
時報

No.11

1961. 6

大阪大学山岳会

時 報 第 10 号 目 次

前 山	篠 田 軍 治
昭和三四年度を回顧する	野 田 憲一郎
1959 年度 冬山合宿報告	
I スバリ岳赤沢岳周辺	
II 白根三山－大唐松尾根	
1959 年度 春山合宿報告	
I 薬師岳東面	
II 真砂尾根から劔岳八ッ峰 I 峰	
夏 山 合 宿	
千丈沢及び槍ヶ岳周辺	
一般山行報告	
雑 纂	
ピーク 29 峰遠征	
会 員 名 簿 (省略)	

前山

篠田軍治

こゝで前山というのは主峰の前にある山だけでなく高山をとりまく周囲の山も含めての意味である。ふつうには前山というと周囲の山を意味しないが、例えば北アルプスに対する美ヶ原のような山は何となく前山という感じがする。

私をはじめて北アルプスへ登ったのは白馬だが、その時は戸隠中社から鬼無里きなきを通して四ツ谷へ出て泊った。途中に柳沢峠があるが今年から開通する四ツ谷、長野間のバス道はこれより大部南の方を通りことになっている。こゝは木が多くて思いのほか眺望はなかった。しかし、こゝから見た白馬三山は確かにそれまでに登った山と違っていた。こゝで、始めて北アルプスへ登る心構えができたのであった。

はじめて南アルプスに入ったのは戸台から北沢峠へ出たときであった。天気が悪かったせいもあったが、翌日仙丈の頂上ではどうしても地形がうまく頭に入らない、もう少しで尾根を間違えるところだったのを覚えている。考えてみると、まだ南アルプスの特徴をつかんでいなかったのだ。

私の松高時代の山登りというと、東の武石峠、美ヶ原へ登っては西の北アルプスを眺める。それから北アルプスに登って、又、東の山に登るという具合で、言わば観察と実験を繰返して行って、その間に考察を加えるという行き方であった。こんなことから前山というものに興味をひかれるようになった。穂高の前山ともいうべき蝶、大瀧から霞沢、どれが一番よいかというと、それぞれに特長があって一概には言えない。霞沢から見える涸沢岳の稜線の美しさ、大瀧からの焼と穂高との対比、初秋の蝶から見た凄さ、何れを一位とも定め難い。

グリンデルワルトを訪れたときにも、一番行って見たかったのはアイガーの北壁が正面に眺められるファウルホルンであった。この山は高さは二六〇〇米ほどで頂上にレストランがあり二一〇〇米あたりまでエスキーのリフトがあるので至って簡単である。道は広く、お花畑の中を通り、湖のふちを通して尾根に出るようになっており、残雪も北アルプスの北部程度である。こゝを訪れた気持は、武石峠や美ヶ原に登って北アルプスを学ぶのと全く同じであった。そして、その翌日、ヴェッターホルンのグレックシュタイン・ヒュッテへ行っ

たが、その時の雷雨の中での山行に、前日のファウルホルンでの観察が非常に役に立ったのであった。

富士山は周囲の峠から見ると特に美しいとされているが、それにも増して美しいのは南アルプスから見たものであろう。逆に富士山から見た南アルプスはあまり立派ではない。やはりある程度の高さ（仰角）があった方がよいのであろう。その意味から美ヶ原から見た北アルプスや八ヶ岳は好い。また南岳と北穂の間で稜線が深く切れ込んでいることや大天井という山が常念山脈では主峰であることなど、観念的には地図の上でよく知っており、また歩いてみてもわかっていることごとくではあるがそれがはっきり呑み込めたという気持ちになる。実際、槍の方から南岳へ縦走して行くと起伏があまりにも少ないので、つい、この調子で穂高へつながってしまうのではないかという錯覚に陥りやすいものである。こうした時に周囲から山を眺めておいた経験が役に立つものである。また、とにかく山登りをする人の中にはルートだけは根ほり葉ほりしらべるが、その周囲に全く無関心な人が多い。これでは一寸した事故があっても臨機の処置はとれないやはり前山から目的とする山を眺めることが必要ではなかろうか。これは故国を離れて外国から日本を眺めてみてはじめてその本質をつかむことができることにも通じるであろう。

昭和三十四年度を回顧する

野田 憲一郎

昭和三十四年度は我々の山岳部が創立されて十周年を迎えた意義ある年であると同時に部の方針の一つの転換期であった。三十四年三、四月の春山合宿には黒部川上廊下の積雪期初横断が三〇名余のメンバーと稜線上のBC、四つのキャンプという、我々としては初めての大規模な極地法によって成功した。このような困難な計画がたった一度の計画で成功した直後であるだけに、この年のリーダーに指名された私としては、第一に一つの大きな目標が達成された後、次の目標が確立するまでの混迷の発生と、第二にそれに伴う部の結束のゆるみ——即ち、山に対して安易な考えが生まれはしないかということ——の可能性を恐れた。もう一つの問題は、ここ二、三年来急激に増えた部員の数に対し、これを完全に引っぱって行くこと、つまりこれまでとは段違いに大きくなった部の中でいかによく各個人の円満な登山者としての成長を達成するかであった。前述の上の廊下の計画はこの大人数をうまく利用して行なわれたものであったが、極地法には上級部員以外のメンバーの自主性の発揮のチャンスが非常に少ないという欠陥があるので、これを繰り返す方向は好ましくない。

以上の三つが三四年度の基本的な問題点であったが、まず第一、第二の問題についてその経過を述べよう。

新しい目標や方針は実際には一タ一朝にして決まるものでもなければ、OB やリーダーだけの考えによって定まるものでもない。OB の適切なアドバイスと部全体の意欲の盛り上がりによって決まってくるものであって、相当の時間を要することである。従ってこれは三四年度一年間かかって解決すればよい問題であった。また三年部員を中心とする意欲的研究により次の方向を見出す努力が推進されていった。黒部川流域を中心とした我々の山行の流れは夏の上の廊下廻りの試み、冬の後立山黒部川さらに春の薬師岳東面と確実に発展している。特に、冬、春の合宿に於ける現四年部員の強力な推進力は高く評価されてよいだろう。むしろ私にはこの歩みが行き過ぎになることを警戒することが必要であった。

第二の問題も従って、私の憂慮したような悪い方向に進むことはなかった。この問題は事故という形で現実化するだろうが、成功に至らなかったいくつかの試みに於いて

ても、それぞれ困難さと力の限界とを正しく評価することにより、事故が防がれていた。(処が今年度になって数件の事故がみられる。これについては後に考えを述べる)

実際的には、部として最大の問題は第三のものではないであろうか。部員数が急増したのは今に始まったことではなく、現4年部員が新人として我々の仲間に加わった昭和三二年度からのことである。それ以前にはメンバーが二〇名にも満たなかったのが、現在では倍の四〇名を越える大きな組織となっている。これに伴う体制の再編成は非常な困難事であるとしても、ここ三年、殆んど目立った解決がないのは残念である。勿論合宿の形態としては三四年冬の後立山と白根三山、春には剣と薬師のような分散、特に薬師では放射状登山が行われ、多人数の中にも個人の主体性を生かす努力がなされている。しかし、平生の集会とトレーニングについては殆んど何の進展もなし得なかった。

部が小規模であった時期にはそれだけ各個人の比重は大であり、集会における討論やトレーニングの際の指導の場合、新人にとっても面白く「ついて行きやすい」状態であったし、全体の統制、計画も楽であったと思われる。その頃は特に「組織」を意識することもなかったであろうが、現在では「組織」の意識なしには何事もなし得なくなっている。しかしそれをどのように整えるべきか、上級部員を含む全部員がオールラウンドな能力を得ることが必要であるが、専門的分化によってそれが阻害されることになりはしないか、さらに根本的には、新人を教育し、しかも部全体が発展できるような体制が可能であろうか。上級部員の勉強に新人がブレーキとならないだろうか。このような疑問が次々に沸いて、ついに新しい体制の編成を達し得なかったのである。最近の幾つかの事故はこの様な未解決の問題点をばくろしたものではないだろうか。結局、これはそれまで表立って現れなかった第一、第二の問題が現実に姿を見せ始めたことを意味するものであり、それは現在のメンバーだけの責任ではない。根本的に我々の部の中に根ざしている規模と組織との矛盾である。我々の伝統を守る為に、この問題を解決することが第一に必要であると思う。

1959 年度

I スバリ岳・赤沢岳周辺 II 白根三山—大唐松尾根

冬山合宿報告

1. スバリ岳西面

1. 食料報告

2. 赤沢岳西面

2. 装備報告

3. 大沢小屋生活

3. 冬山のための荷上げ行

4. 食料報告

《59年12月・60年1月》

5. 装備報告

6. 冬山のための偵察行

I スバリ岳・赤沢岳周辺

前回まで数回の積雪期ポーターは、少数の上級部員に高度の能力を期待する一方、他の部員は殆んど受け身の山行に終始する傾向があった。従って今回の合宿は、各人の自主性を尊重し上級部員の多くにリーダーシップを持たせる為に、少人数のパーティを各地に分散させ独立して多角的に行動せしめる形式が望まれた。これに加えて新人を訓練すること、又ゲレンデ化していない新鮮な目標を選びたいという要求とを巧みに組合せることが計画作製の上で腐心した所である。この形式は部としての大きな成果は得られぬがそれよりも個々の部員の単なる技術以上の成長の方が重要と思われ、これは来たるべき薬師剣の攻略の為にも必要なことであった。合宿は北アと南アに別れた。

1 スバリ岳周辺

大町トンネルの開通は黒部流域の山々び新しい可能性を与えた。元来これらの山々はアプローチの困難な所から下廊下横断に見られる如く長期間の地味な忍耐の対象とされていたものが、入山が飛躍的に容易になった為、北アの中核を直ちに突き得る軽快な登山の対象と看做される様になった。ところで我部の黒部流域の伝統を新しい条件のもとでたどるべしこの地帯がとりあげられたのである。本計画は、33年5月穴戸OBによる赤沢猫之耳周辺の登攀及び新たに34年秋の三回の偵察をもとにして赤沢岳西尾根（猫の耳峰を有す）とスバリ岳西尾根（中央稜）を黒部側から登攀することにし、更に新人訓練の為大沢小舎をBHとしてここから直接赤沢スバリ間の主稜線に至る尾根を加えた。西面の尾根は、共に短いが急峻で頂上直下に顕著な岩峰を有し中級技倆の満足に適し漸く充実をみせて来た多くの中堅部員達に好適と思われた。

12/25 大阪発

12/26 大町からトラックで大町ルートを経てトンネル通過、赤沢口に至る。途中日向山関電事務所へ挨拶に寄った。扇沢で大沢隊は大沢小舎に向いスバリ隊赤沢隊とそのサポート（村井、金子、米沢）は赤沢口で下車、以後各隊全く独立して登攀行動に入った。

A スバリ隊 L 田村^Ⅲ、山本^Ⅳ、酒井^Ⅱ、前沢^Ⅱ、高橋^Ⅱ

12/26 晴れたり曇ったり赤沢隊と別れ、村井等のサポートを受けつゝ工事用の足場を伝い黒部河畔に降り立った。作業は休止され巨大な鉄骨やコンクリートが更に巨大な赤沢の絶壁に寒々とくっついている。右岸の一部をザイルでへずり、大スバリ沢に入ったが、河原の石の上に軽く乗った雪は意地の悪い落とし穴の連続で僅か五百米進んで左岸に設営した。この沢は狭く暗く陰惨でさえある。10.30 トンネルに入る、11.00 赤沢口、2.30 スバリ沢出合、4.30 サポート引返す、6.00 テント設営。

12/27 晴後雪、本日はテントを進める前段階のボッカである。秋の偵察通り左岸の台地を遡行し尾根の側面にとりついた。猛烈なラッセルで、時には胸まで埋まり踏めども踏めども手ごたえなく甚だしく消耗した。稜線末端の千八百米附近にデポし下る。

9.15 発、11.15 尾根取付き、4.20 デポ、4.45 下山、5.10 取付点、6.00 テント。

12/28 雪、テントを昨日のデポまで進める。昨日のラッセルの為行程ははかどるが、湿雪は登るにつれ乾燥しアワが盛んに足もとを流れ、せっかくの踏み跡をくづしてゆく。ブッシュの中なので危険は感じないが一ヶ所ナダレひも 30m 一杯につかって逃げ切った。やせ尾根上にテント地がみつからず、捜し廻った拳句断崖に突き出した岩のテラスを木の枝でひろげて我々5人のねぐらとした。足下に黒部を背後に立山剣をひかえ猫の耳の絶壁を仰いで身震いする様な眺めである。10.10 発、6.00 テントに入る。

12/29 小雪、本日は二千三百米までテントを更に進める準備としてフィクスとボッカをする。秋の偵察でテントを上るのに最も困難と予想される部分である。10Kの荷をもち樹林中の急な尾根はまるで木登りで苦しい。50m 一杯にフィクス、予定の半分も進めずデポ。

9.45 発、2.20 デポ、3.40 テント

12/30 快晴、昨日に引続いてフィクスをしつゝデポを進め二千三百米にとにかくも達してみることにした。昨日一日がかりで開拓したルートを一時間で通過した。初めて足跡を印することの難しさ、「未知」という重荷はより大きな試練である。更に三ヶ所各々50m 一杯にフィクスしデポを進めた。最後の百米はブッシュコギとラッセルを垂直にやらかした様なものであった。悪場を終えて二千三百に達したがいまだ樹林帯は

終らずスバリのピークも見えない。得難い快晴の一日、隣の猫之耳は白い怪猫宜しく我々のケチなブッシュ中の苦斗をあざ笑っている。

以上四ヶ所のフィクスをした。これもテントを上げんとした為であるが、予想以上に悪くことに撤収の際思はぬ困難にぶつかる恐れがある。山本と協議の結果、テントはこれ以上進めぬことにし、ここ千八百から二千八百のスバリまでビバーク覚悟で一気にアタックをすることにした。8.30 発、9.40 デポ、4.30 二千三百、5.20 テント。

12/31 小雪後雨、ラジオはしきりに山嶽地帯のナダレを注意している。天気図上に三つの低気圧群が手をつないで我々をうかがっているので停滞とした。気温は高く 10～15°C。

午後から雨となり天幕の底が池になり始めた。ナイフで穴をあけ排水するが一面に濡れとほる。今日は大晦日、夜中にラジオ入れると第九シンフォニーをやっている。濡れたシラフに顔を埋めて雑音から合唱をより分け聞いた。

1/1 小雪、デポを回収しようと出発しかけたが夜来の雨で雪が不安定なので見合せた。元旦の一日、トラムプにウイスキーをなめ、たら腹喰って騒いだ。横着な奴程タフだ。

夜、星が見える。アタック態勢で就寝。

1/2 「快晴だ起きろ」とキーパーの酒井の声云うなり目前にヌッと朝のソバを山盛りつき出した。5.00 発（アタック田村、山本、サポート前沢、高橋）満天の星が氷りついてアイゼンがよくきしる。暗闇の中ヘッドラムプとフィックスをたよりに悪場を早々に通過した頃、立山がモルゲンロートに映えた。二千三百からワカンをつけ緩傾斜の楽な尾根を高橋と前沢をラッセにたてて急ぎ 9.20 頂上下の岩峰取付きにつく。こゝでサポートを帰し岩場によりついたが、案に相異して粉雪の軽く乗った岩場は、みかけのいかめしさに似ず殆んどザイルを要せず突破 11.30 頂上、すでに 9.00 頃からガスが巻き始めていたがこの時にはかなりの風雪となっていた。帰路は往路を忠実にたどる。風雪のクライミングダウンは登りの数倍も緊張させられた。しばしば下からの吹き上げに目が氷りつき、岩にしがみついてこらえる。途中視界のきかぬままとんでもない方向に降りかけ磁針とかすかなアイゼンの跡でもとに戻ったがこれが最も恐ろしい瞬間であった。樹林帯に入って我に返えり、遅い昼食を取る。めぼしい樹の幹に生ま生ましく大きなナタ目入っているので危く初登攀を疑うところであったが、帰路を案じたサポートの仕わざと判明した。フィクスを一部回収、全所要時間 12 時間、成功の夜は話がはずんだ。「今夜は無礼講やな……」

4.00 起床 5.00 発 7.00 二千三百 9.20 取付 この頃から天候悪化 11.30 スバリ頂上 11.45 下降開始 2.30 取付 3.00 昼食 5.00 テント

1/3 曇、撤収、入山時より雪が安定して歩きやすい。工事場は全く人影がなく、風雪のなすがままである。荒涼として砂漠に忘れ去られた廃墟の様だ。トンネルを出、タクシーで大町へ。黒部の雪がいっぱいこつついたザックをホームに積み上げた。一片の雪もない大町ではこの雪はなにものにもかえがたく思はれた。

11.30 発 1.05 大スバリ沢出合 5.00 赤沢変電所

〔後記〕 赤沢スバリ両西尾根共頂上直下にある雪氷の付着した岩峰の突破にかなりの困難を予想し、この為テントを出来るだけ尾根の上部まで上げてアタックの行程を短くしようとした。しかしせまい急な尾根にテントを上げることは容易ではない。即ちアタックの負担を多くしてテントは低きにとどめておくか、或は無理をしてでもテントを上部まで上げアタックにゆとりを与えるか。我々は後者をとったのであるが、反省を試みれば、岩峰の困難さを過大に見積って不必要に迄慎重でスピーディな行動を制約する結果になっている。ことに北アの様には冬期晴天のないところではスローな方法はチャンス逃がしやすい。しかし本年は雪の到来が遅れ岩峰の雪氷が少なかったため本年の様相が常にあてはまるといえぬという見界もあった。

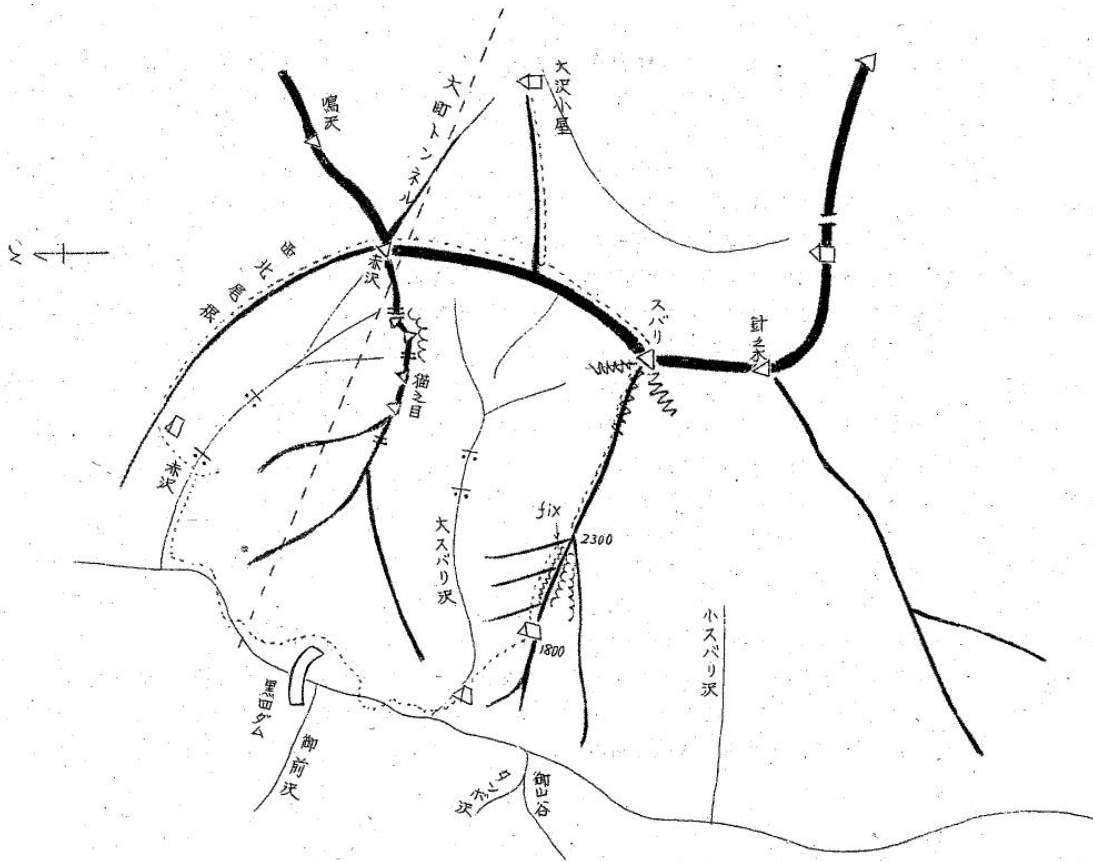
いずれにせよ、久しくスローなポーラ登山をとって来た我々には一つの方法上の反省の契機を与えている様に思う。猫の耳峰の失敗は電力工事の為当分再挙をはかれないので残念であるが大スバリ沢側から比較的良好なルートが得られそうなので遠からず冬期登攀が行なはれるであろう。転進した稜尾根は変化や困難を求める興味はないが、阪大による鳴沢尾根、猫の耳などを含めた一連の尾根群の登攀を完成する一端として意義を認めたい。大沢小舎は初級訓練の目的を十分に果した。即ちテントマナーからスキーワカンアイゼンのいずれの舞台をも備え容易な尾根を得て稜線の経験をもあわせ得た。又大町に近いところから忙しい OB でさえ次々と見え現役との交観が見られたのは大きな収穫であった。

2 赤沢岳西面

一九五八年五月、宍戸、広瀬 OB、現役四名が、立山より黒部に下り、赤沢にテントを出し、赤沢岳西面の登攀を行い、猫の耳と呼ばれる顕著な岩峯の並んだ西尾根の詳細が明らかになった。西尾根はピークより大小の岩峯連ね、その両側は、切り立った壁となっている。

後立山西面における行動の一端としてこの尾根の途中にテントを一つ出し、ピークへのアタックを計画した。西尾根の取付点及び猫の耳を含む、岩峯群の突破にはかなりの困難が予想された。

結果は、赤沢を取付点迄行くことが出来ず、赤沢岳西北尾根（赤沢と鳴沢の間の尾根）にテントを出し、赤沢岳頂上を往復した。



行動概要

期間 12月26～1月1日

メンバー 田井 (L)、谷垣、米林、広橋 OB、村井 (L)、金子、米沢

12月26日 (小雪) 8.35 大出着→9.45 関電黒四建設事務所→10.00 大町トンネル扇沢口 大沢隊と別れる→10.30 トラック トンネルに入る→10.55 黒部側出口着 スバリ隊と別れる→11.45 出発。きれいに除雪された道路を黒部へと下る。赤沢岳西尾根の巨大な壁から絶えずシャワーが落ちている。すざましい壁だ。黒部赤沢出会より少し上流の赤沢左岸の熊谷組飯場の小屋を借してもらえた、15.30。

12月27日 (小雪)

米林、田井、広橋、赤沢偵察 9.20 出発。赤沢は埋れているが、大きな岩が出ていてそれを越すのに苦勞する。雪がふわふわでよくもぐる。

ラッセルを続けたが、ピッチはあがらない。10.45 前方に 15m ぐらいの滝が露出しており、危険が予想されるので、引返えす (11.45) 飯場。かなり高い所に枝トンネルの口が明いているらしいので、午後はそちらを偵察した。(13.00 出発) 黒部側へもどり、雪で埋まった道路を伝って、トンネルに入る。送風機室より外へ出してもらった。

(15.00) 赤沢はかなり低いところにある。30 分程上へ登ってみた。行けぬ事はないが、雪崩の道で、新雪が降った後の徹収の事が心配される。送風機室に下り、番人に聞いたが三十日より正月中閉鎖してしまうとの事で通行できない。赤沢からこゝへ直登するのは不可能である。(17.35 飯場) 村井他は、西北尾根を偵察したが、飯場より、西北尾根にテントを出すことは可能だ、との報告だった。以上の状況より西尾根をあきらめ西北尾根よりピークを狙うように計画を変更した。

12 月 28 日 (小雪)

全員 6.20 出発すぐ尾根にとりつく。木の枝にぶらさがりながらラッセルを続ける。9.30 やっと西北尾根上に着いた。2ヶ所急斜面にフィックスザイルを張った。雪がだんだん激しくなって来た。12.00 ガスの中でテントを張る。13.00 4 名テント入り、他の 3 名下山。大沢小屋へ。

12 月 29 日 (小雪) 雪の中を偵察に行く。10.00 出発、尾根は細くなり、大きな岩がごろごろしている。樹と樹の間の吹き溜りに落ち込んで苦勞する。時々薄日がさし、黒部や猫の耳がガスの間から見える。赤沢は険悪な様子を見せている。12.15 3 っ目のギャップ。森林限界迄、見通しがついたので、食事をすまして帰る 13.15、テント着 14.15。明日は天気が期待出来そうだ。

12 月 30 日 (晴) アタック 田井、米林、サポート 広橋、谷垣

5.40 出発。ライトをつけ、昨日のラッセルを頼りに進む。森林限界へ出る迄、木登りが続く。10.00~10.40 食事、木の間から猫の耳をのぞき、ファイトを燃やす。11.20 森林限界を出た。12.00 岩峰が出て来たので、輪かんをアイゼンとはきかえる。サポート隊と別れる。雪をかぶった岩稜を伝って直上、別に危険な所はない。

13.00 ピーク、風もほとんど無い。暖かい日ざし薬師岳がはるかかすんでいる。スバリ西尾根下部にオレンジ色のテント発見。田村隊のだ。連中の苦勞が思いやられる。主稜線スバリ赤沢岳の科尔から、数名こちらへやって来る。大沢隊だ。28 日下山した村井と再び頂上で握手。14.00 発、春のような暖かさの中を快適に下降。行きそこなった猫の耳をいつかは登ってやるぞと睨みながら。16.20 テント着。

12 月 31 日 (曇、風強し)

天気がくずれそうなので、急いで撤収、11.00 出発、赤布標識を頼りに、どんどん下る。すべるように赤沢へ 13.30。変電所で泊めてもらう。

1月1日（曇）

トンネルを抜け、大沢小屋へ入った。

〔後記〕

目的とした西尾根に取付く事も出来ず、失敗だった。雪が予想以上少なく、取付き迄、赤沢を登ることが不可能だった為である。その点、偵察も足りず、考え方も甘かった。

テントを出せずとも下からアタックを行ける所迄出す事も考えたが、前述のような事情及び天気の中で出来なかった。

赤沢岳西面、スバリ岳西面は積雪期、無雪期を問わず、高度の登攀の対象として今後が期待される。終りにトンネル通過に御無理を御願ひした関西電力に深く感謝いたします。

3 大沢小屋生活

期間 12月25日～1月3日

メンバー 大工原、笠松、打出、錦田、三沢、峯田、森、大角、村井、金子、米沢、兼清、壺中 OB、関本 OB、抱 OB、岡田 OB

12月26日（曇後雪） 田村達を見送った後、残された荷物の山を見て、うんざりした。兎角出来るだけの荷を持ち、あとはデポする。11.30 出発、夏道は台風のためくずれて分らず、河原をラッセルする。重荷と深雪にさっぱり進まず、小屋までいやに遠く感じた。15.25 大沢小屋着。少し休んでから、しばらくお世話になる小屋をそうじして居心地を良くした。

12月27日（小雪） 6.00 起床。大工原、笠松は尾根の偵察。残りはデポを取りに行く。目的の尾根はスバリ、赤沢の中間から、真直東に下りているものである。取付は小屋の正面。何のことはない。裏山に登る様なものだと、取付いてみたが深いラッセルには参った。それでも下りがないので高度は確実に上っていく。林をぬけて、いくらか木のまばらな所にテント地を見つけた。14.00 テント予定地、こゝで引返す。打出達は午後からスキー練習。

12月28日(雪) 4.50起床。テント予定地へボッカすることにしてパッキング。
8.00出発、所が、きのうのラッセルがあったので、快調に登り10.45には予定地につく。さらに上に上げるべく、ラッセルするがここからは難渋する。少し行くと、150mくらいのナイフリッジあり、そこを過ぎた頃から、雪と風がはげしくなって来た。デポすることにする。12.00デポ、14.10小屋着。今夕から一斗缶利用のルンペンストーブを使ったので、薪がよくもえる様になり、小屋生活も快適になって来た。

12月29日(雪) 4.30起床、きのうのデポをさらに上にあげるべく出発。7.30出発、9.00デポ地、デポはそのまま、空荷でどんどんラッセルしていく。2000m附近に良いテント地を見付ける。12.00テント予定地。すぐテントを張れるようふみかためた。14.40小屋着。小屋には村井以下のサポート隊、兼清、OB3名計7名が来ていて、にぎやかになったが、せまい小屋は足の踏み場もない程になった。

小屋の横にN2テントを張り村井、金子、峯田が入る。

12月30日(快晴) OBが来ると、たちまち晴れた。5.00起床、8.40出発。今日まで見えもしなかった稜線や爺すら見える。晴れているので増々快調に登り、9.50デポ地着、ここから兼清以下精鋭のラッセル隊が先行あとはボッカする。テントは予定地よりさらに上げ、2100m附近に張る。10.50テント地着、テントに壜中OB、金子、錦田、米沢が入る。テントを張ってからラッセルを追う。12.00テント地発、途中10m程Fixするあとはただ登るのみ。案外あっけなく、陵線に出た。13.00陵線。立山、猫ノ耳が圧倒的だった。新人の他は赤沢往復、15.50小屋着。村井、森、大角直ちに下山、あとはストーブをかこんで話に花が咲いた。

12月31日(曇後雪後雨) 7.00打出、三沢、峯田が上のテントに連絡に出る。あとは朝寝坊を楽しむ。昼から薪取りとそうじをして新年を迎える準備をした。門松も立てた。上のテントでは、針ノ木往復を目標に出たが、悪天候のため、スバリにて引返す。抱OB、関本OB下山。夜になって雨になったので小屋の横のN2テントを撤収する。

1月1日(雪) 上のテントの撤収のサポートをすべく準備している所へ、赤沢隊の連中がやって来た。そうこうする内に上のテントの連中も撤収して下って来た。小屋内騒然。食糧係、食い放題を宣言する。

1月2日(曇後雪) 5.30起床、小屋の中は、人でごったがえし、始の清潔さは全然見られない。大工原以下6名は附近のゲレンデヘスキーの練習に行く。食糧はだぶついている。

1月3日(曇) 最後のモチをたらふく食う。9.20小屋発、10.10トラック道。トラックが正月でないのでスキーで下る。13.30大町着、7名与兵衛氏宅へ。あとは直ちに帰阪。

4 食糧報告

この冬期合宿は分散の形式をとったためスバリが五名、赤沢が四名という少人数となり、食料の重量に強い制限を受けた。

少し高くなっても軽くする様にとのことで主に重量を減らす事に努力した。

1. 概要

- 一、量を減らさず重量を減らす為いろいろ考えたが結局モチを使うのをやめたその代わりソバ、 α 米とした。
- 二、鯨肉を油であげて使用。
- 三、アタック食は前年同様作った。
- 四、梱包は全て一斗缶を使用し、始めはCI、CIIの食料を完全に分けて荷上げしやすい様にする予定であったが一パーティの人数が少なく食料の各量が少い為又時間的にもあまり余裕がなくうまく行かず各パーティに迷惑をかけた。
- 五、日数はスバリ十六日分、赤沢十一日分とした。
- 六、朝食を作り始める頃はまだ行動、停滞の区別はつきにくく食料でこれを区別するのはどうかと思ったが重量を考えてやむをえず行動食と停滞食を区別した。
- 七、乾燥ホーレン草を作ったがあれは色をつけるという以外あまり意味がなかった様だった。

2. 一日分の重量及び価格(一人分)

一人二千五百円の合宿費の中で食費としては大体二千三百円程度であり平均して一人一六七円程度となった。

重量は一人一日分 0.9K~0.95K 程度(容器ポリエチの袋等を含めて)であり軽く出来たがその為少々かさばったが仕方がなかった。

3. 熱量、栄養価の点は山日記、時報等を参考として大体の見当をつけて行った。

主食として α 米、ソバ、カンパン、クラッカーとしたがオートミール等も考えて見たがこれは時間がかかり過ぎる様なのでやめた。(作るのに)

鯨はサイの目切にして油であげてカレー粉、コショウで味付けをしておいた。

これによって鯨肉の重量を大分軽く出来た。梱包についてはすべてをダンボールにしたかったのであるが夏の例や今までの例から見てその強度を良くすることに自信がなかったので一斗缶とした。

又少しでも変化をつけるためカンパン、クラッカーをそれぞれパン、 α 米と組合せた。食べた者の意見ではやはりモチは少しでも食べたかったということ又アタック食の袋が弱かった事アタック食に水分のあるものをもっと入れる事、乾燥ホーレン草はあまり意味がない事等であった。

4. アタック食について

これは軽くて食べやすい事を目的とし費用の点はあまり考えない事にして計画した。

これはスバリ、赤沢各パーティ共に二名づつとし一人二袋とし、一袋には大体二食分程度を入れた。

飲料用としてスキムミルク一箱を用意した。これは濃くとかして出発前にテルモスにつめかへ携行する。

これは昼用であるが他の食料は一般の食料の中から持って行ってもらう事にした。費用は一人大体二百四十円（一袋百二十円）であった。

なお僕としては冬山合宿は冬期休暇が初まると同時に出発するし又年末で学校の方も忙しいのでもう少し早く決めて係を決めてほしかった。

アタック食内容

（但し右表は一袋分についてのもの）鯨肉はしょう油とサトウで煮つめたもので全体をポリエチの袋でつつんである。

カンパン	1/4 袋
クラッカー	1/2 本
粟オコシ	一枚
ラスク	適量
ビスケット	適量
角パン	二個
チーズ	一個
チョコレート	一個
ブドウ糖	二個
甘納豆	適量
スキムミルク	〃
鯨肉（ポリエチ袋入）	〃

献立表

(一人一日分)

行動日			停滞日	
朝 食	クラッカー	一本	中華ソバ	1/2 袋
	バター	1/8 箱	コンソメ	1/15
	パンスープ	1/10 "	鯨肉 (加工)	約 50g
	ワカメ	1/20 袋	ホウレン草	α
	乾燥ホーレン草	α	切干	10g
	切干	10g	食用油 (リボン)	1/20
	食塩	α		
昼 食	パン (ウインナロール)	二ヶ	カンパン	1/2
	カンパン (三共)	1/6 袋	バター	1/8
	バター	1/8 袋	ミルク	20g
	ミカン (普通の小型)	一個	サトウ	30g
	チョコレートチューブ	1/2 本	又は紅茶	α
	魚ソーセージ	1/2		
	ジャム	1/5		
夕 食	α米	一袋	中華ソバ	1/2
	クラッカー	1/4 本	鯨肉	50g
	カレー粉	α	ホーレン草	α
	ベルチャーハン	一袋	食用油 (リボン)	1/20
	食用油	1/20	コンソメ	1/15
	乾燥ホーレン草	α	切干	10g
	鯨肉 (加工)	50g	メザシ	一匹
	メザシ	一匹	塩	α
	塩	α	茶	α
	切干	10g	(カレー粉を使用してもよい)	
	メリケン粉	α		
茶	α			

なおαは適量を表わし、昼食のミカン、チョコレートチューブ、ジャムはどれかを選択する。またカレー、ベルチャーハンも同様である。

その他コショウ、ネオシロゲンを含む。

なおサポート隊の食料の一部は黒部のトンネル出口附近にデポ中、除雪車に飛ばされ紛失した。

重量表

	BH	C1	C2	計
赤沢	13kg	22kg		36kg
スバリ	10kg	23kg	34kg	67kg

5 装備報告

今年度より新しく使用した装備を冬、春まとめて報告する。

テント T1 テトロン製内張りナイロン

ツェルト テトロンと綿の混紡の布 20 ヤールを新保氏より寄贈していただいたので図に示すような寸法のツェルトを二張作った。このツェルトの下端にはテープを入れて中に入ったものがこれで下をしぼることにより尻の下へ巻きこんで風が吹込むのを防ぐ為である。布地には特殊な加工がしてあり全く通気性がない（これは全く雨がもらないという利点でもある）この為両サイドにベンチレーターを備えた。張線やテープは凍結予防の為オールナイロンである。

ザイル 冬山より日本製綱より寄贈していただいた 11~12mm、30m ナイロンザイル（赤色）二本を使用した。

又フィックス用ザイルとしてこれまで古い 12mm ザイルを使用していたが冬期のスバリパーティは少人数でしかも相当量の fix ザイルを必要とする為 8mm の麻ザイルを Fix 専用として使用することになった。帝国産業の大久保 OB の好意により原価で 300m 入手出来た。これが便利であるので春季劔岳パーティも 400m 新たに使用した。このザイルは 200m 又は 300m の長いままで受取るので適当な長さに切って使用し Fix の際の無駄を少し出来るのも利点である。

バーナー 春山用に新しく二つ購入したが予算の確保と試用の意味で一つは国産の中型バーナーを買った。構造、外観は中型ラジウスと全く同じであり火力が少し弱い。性能も似ている。他の一つは中型プリムスである。プリムスはテーパーネジからガスが漏れるものがあり気をつけたが今度のも合宿の半ば頃少しもれたがアルミ箔でパッキングして止った。

この他に春山用にコッヘル二組、ハーケン 21 本、スキー用シュピッツェーを購入した。

6 冬山のための偵察行

猫之耳峰は既に我々の詳しく知る所であった。しかしスバリ岳西南中央稜は積雪期の対象として取上げる為には我々自身の体験が必要と思われたので、次の三回の偵察を行った。

1. 田村、保母

10月9日 大町より関電ルート、大沢小屋を経て針之木小屋に入る。途中大沢小屋裏より赤沢スバリ間に至る尾根を観察し、良好と見た。又針之木頂上から問題の尾根を眺め、明日の見当をつけた。即ちスバリ頂上からこの尾根を黒部へ向って下るのである。7.30 大出トラックにより 9.00 扇沢、10.10 大沢小屋、1.45 針之木小屋

10月10日 険悪な様相を呈する頂上直下の岩峰群はあたってみると簡単に下降出来三時間でブッシュに入った。こゝからは立山側から入るパーティが偵察してくれるので昼食後引返し更に赤沢まで足をのぼして尾根を側面から眺めた。結局「末端は急峻だが問題はあるまい問題は頂上の岩峰群に雪氷が如何に附着するかにある。」ということになったが、これは誤りで、後に打出前沢の立山側からの偵察により尾根末端に問題があることがわかった。

6.45 出発、7.40 スバリ、10.00 引返し地点、1.30 スバリ、2.15 赤沢、4.50 針之木小屋

10月11日 下山

2. スバリ西尾根偵察

期間 10月8日～10月13日

メンバー 前沢、白井、打出

出発前、大阪で、関電に行って、黒部第四発電所ダム現場の立入許可証をもらっておいた。この紙片のおかげで、トンネルを通してもらった。

9日早朝、富山の関電出張所で安全帽を借してもらい、立山に向った。丁度、快晴で、バスから見た弥陀ヶ原が大層美しかった。秋という季節は、魔法使いかも知れない。スカートをはき、ハイヒールはいた女性が来るからという理由で、立山を山とっていない山男に見せてやりたかった。

一の越から、トンネルの出来る前のボツカルートである。タンボ沢への道を下った。御山谷よりは、西尾根がよく見えたからである。タンボ沢に入るとあの広いカーン状のところを端から端まで木馬道がついており、他に道もないのでその上を歩

いたが、久しく使用していないため、こわれていて、歩きにくかった。たくぼ沢のもみじが、又美しく、見わたすと空の青さと、樹々の黄色ばかり目に入った。

間もなく工事場についたが、上から見ると小さく見えたが、近よって見て、その大きさにおどろいた。馬鹿でかいダンプカーが普通のトラックに見える程で、一体どこに何千人もの人が居るのかと思った。

翌日、尾根にとりついて見えたが、ブッシュがひどく、かなり上の方まで登ったが、岩峰につき当たり、引きかえして来た。後で検討して見ると、高ににして半分ぐらいのところの派生した尾根を登り、主尾根に出るところの岩峰につき当たったらしい。しかしこの経験が、十一月の偵察に役立った。

尾根は二千米附近で、急な段がついており、大スバリ沢側の支尾根は、大部分上部が岩峰で段がついている。ルンゼも上部はかなり急である。

翌日、平まで往復したが、小スバリ沢の方から取附くのは、トンネルの関係からも無理に思えた。

十三日 朝のバスに乗せてもらい黒四を出発したら昼汽車に乗れ、大阪に夜着いたのには驚いた。山から帰ったという気がしなかった。

この山行では、関電のお世話になりっぱなしであった。 (田村)

3. 前二回の偵察を総合した結果、一、尾根を末端で二分する巨大なガレの附近に危惧があり、二、又取付点も明確ではない、三、更にトンネルを含めてダム工事現場の事情も現地でたずねて見る必要がある、等から三度目の偵察となった。田村、平田、打出

11月2日 大町日向山関電事務所の御好意によりジープに便乗させて貫いトンネルを抜け大スバリ沢出合よりやゝ下流右岸砂州上にテントを張る。立山側の斜面を少し上ってスケッチをし、ルートを考えた。容易ではなさそうだ。

11月3日 大スバリ沢を遡行し、昨日目ボシをつけておいた小ルンゼをつめて尾根に出た。状態はすこぶる悪く冬の軟雪は更に不都合を倍加すると予想された。しかし十分なフィクス工作をすればテントを上げ得ぬこともない。

いささか悲観している所に異様な動物の気配がしキモをつぶして逃げ帰った。クマではなかったらしいが。

11月4日 撤収、関電事務所で平林技師に冬の黒部について詳しい説明を聞き、好意ある御申出をいただいた。 (田村)

II 南 ア

1 白根三山——大唐松尾根

冬の合宿計画に当って、我々がまず考えねばならなかった事は、わずか2週間の短い日数のうちにいかにして多数の部員が効率的な山登りをするかという問題だった。一方、部の中で1956年冬の北岳バットレス以来しばらく遠ざかっていた南アルプスへ再び目が向けられた。その結果後立山黒部側と白根三山という分散合宿の形態がとられ、さらに後立ではより小人数のパーティによるクライミングが行われたのである。

当初の計画は次のようなものであった。釣尾根にACを置いて北岳バットレスの一本の尾根を登り、次に白根三山を縦走して農鳥岳から前年冬神商大にトレースされたばかりの大唐松尾根を下る。そうして後半により大きな比重を置く為、バットレスでは比較的容易な尾根を選ぶ。この観点からバットレスを研究した結果、1956年に登った第四尾根とその左の第五尾根以外はアプローチ等の問題を含めて、我々の技術や目的には過大であると思われた。ここで一応目的を第五尾根と定め10月末から池山小屋への荷上げと偵察とを行った。その結果、天候いかんによっては二つの目的のどちらをも達成できない恐れもあり、第五尾根にそれ程の価値もないと思われた。篠田先生のアドバイスもあり、未知の尾根の下降を含む白根三山の縦走のみに計画を変更した。

計画の大要は次のようである。池山小屋をBHとしポーコン沢の頭附近にBC、これに縦走用の荷物を集結して、新人を中心とするメンバーは下山、他は五名で縦走、下山予定一月六日。

メンバーは野田(L)、大島、佐藤、保母、西垣(以上縦走)、五百歳、森田、白井、黒木、梶本、浜田 以上一名。

十二月二十五日 富士→身延線経由で出発

十二月二十六日 甲府着、7.41 バスで芦安発電所前、ここからチャーターしたトラックで鷲の巣着 11.30、荒川小屋 14.30

夏この地方を襲った台風の跡はまだ生々しいが、なんとか鷲の巣山までとらつくは入る。ここからの急な下りは雪がうっすらと地面をおおっている。北アルプスの11月の感じである。荒川小屋到着後、大唐松尾根からの下り道を探しに行くが見出し得ない。(後で分ったことだが、この道は林道工事の飯場のすぐ裏手に下っていた。)

十二月二十七日 快晴、荒川小屋発 6.00、池山小屋着 12.30

池山釣尾根下部の急登は 10 センチ程度の積雪で、部分的な悪場や倒木は我々を苦しめた。ルートは赤旗が沢山あり決して迷うことはない。池山小屋では意外な事件が我々を待受けていた。我々が秋に荷上げた食糧のうち、ビスケット 20 食、乾パン 23 袋 (46 食)、ソーセージ 10 本、計 66 食ほかにローソク大部分など重要な昼食類が殆んど盗難に会っていた。そうして空の缶は小屋の外に捨ててあった。我々の食糧は全部ブリキ缶に入れて紙で封をし針金でしばって小屋の片すみに積んであったのであるが、内容を調べたらしく、全部の缶のフタがゆるんでいた。小屋番の話では 11 月頃から三回程この小屋へ来たとき、少しずつ盗まれていたという。他のパーティの荷上げ品もあったが嚴重にシールしてあった為か、開こうとした跡はあったが被害は無かった。直ちに今後の食糧について検討した所、第五尾根登攀を予定して少し多めに荷上げてあったので朝食用に準備した乾パンを昼食用に当て、朝は少々時間がかかるが他のものでまかなえば、何とか計画遂行可能であることが判った。けれども特に昼食用のビスケットについては新しい試みでありその使用について非常な期待を持っていただけにがっかりした。このような盗みを登山者がするはずはないが、今後とも荷上げに当っては注意を要することだと思ふ。

十二月二十八日 晴一時曇 池山小屋発 6.30、10.30 砂松の頭、ポーコン沢の頭中間に設営

森林限界までは倒木が多く、木の上を伝って行く所もある。積雪 50 センチ内外、森林限界以上でも風は案外寒くない。期待していた砂松の頭からのバットレスは雲におおわれていた。積雪少なく、岩がゴロゴロと露出していて良いテント地は仲々得られない。設営に選んだ場所は少々吹きだまりの気味の所で、風の方向が一定していないようである。これで縦走用の荷物はここに集結し、縦走パーティたテントに入り、五百歳をリーダーとするサポート隊は池山小屋へ戻る。

十二月二十九日 快晴 9.30 キャンプ発、12.10 北岳、12.40 縦走隊とサポート隊別れる、14.00 3052m ピーク下で設営 (サポート隊は AC 泊)

池山小屋から上ってくるサポートを待つて出発、縦走隊は約 30 キロの荷物。八本歯は雪室もそう悪くなく針金なども出ていた。流石に陵線上は厳冬の気分であるが寒さは弱い。東の谷は全く雲海に閉されているが西側は北アルプスの連峰が暖かそうな伊那谷の彼方に全内を現わしている。

ここで縦走隊はサポートと別れ、間の岳へ向う。午後二時近く、ガスが捲きはじめたので早目に行動を中止し、キャンプ。テントは初使用のテトロンテント、内張はナイロン。

ここでテントのことにふれると、第一に非常に薄く軽く、凍りつかないので積雪期の縦走には非常に好適である。撤収時にも容易に袋に入れられる。但し第二に薄いことの一つの弱点としてある程度風を通す。その為、テント内の温度を高く保つことができない。この点は少々目のつんだ生地を使うことで幾分軽さを犠牲にすれば解決できるかもしれない。またその犠牲をはらっても軽さを面でまだ充分余りあると思う。また、風を通す理由はナイロンの内張にあったのかもしれない。従来のような木綿の内張ならば水蒸気の凍結によって繊維の目がふさがれ、十分に風をふせいだかもしれない。ナイロン内張は凍らぬ代り、上昇して凍った水分が雪になって落ちて来るので寝袋や衣類が湿ることになる。テトロンテントに木綿の内張ならば特に第二日目以後の装備軽量化には少しのブレーキとなるにしても相当に強力であると思う。この晩テント内に落ちた雪を、外部から入ったものかと考えたこともあったが、事実はそのようではなからう。

十二月三十日 晴のち高曇 7.50 出発、9.40 間の岳、13.00 西農鳥岳、14.00 農鳥岳、14.40 キャンプ

南アルプス特有のバカ登り、バカ下りを繰り返して進む。風のない場所ではポカポカと暖く、手袋を外しても大して冷たくない。西農鳥の登りは直登したが上部では可成り傾斜が強い。西方の山々は高い雲におおわれ、この好天つづきもそろそろ終り近いことを物語っている。農鳥ピークより 200 メートル程下ってキャンプ。東斜面なので高く立った這い松の上にやわらかく積った雪で設営困難、曇天となり急激に気温下る。

サポート隊は AC から一気に西山温泉に下る。

十二月三十一日 曇時々小雪 8.30 出発、13.40 キャンプ

大唐松尾根はいくつもの大きな起伏を繰り返して大唐松山に到り、次第に高度を下げて唐松平から急に荒川に落ちている尾根で、特に大唐松山までは細く両側は急である。

この尾根に入るまではカンバの木の混った急なルンゼを腰ぐらいのラッセルに悩まされつゝ、半ばすべり下る。尾根の背には所々に小さな岩峯があり荒川側の急な斜面をトラバースして行く。ガスがかかり時々晴れる。正午頃夕目発見、テント地は大

唐松山の手前に一ヶ所、大唐松山を越えるとしばらくはない。意外にピッチ捗らず、大唐松山手前の森林中にキャンプ。夏の焚火の跡がある。積雪 50 センチ。

一九六〇年一月一日 小雪

動いて動けない日ではなかったが、これまでの連日の行動であり、新年のことでもあるので停滞。風もなく静かな正月であった。

一月二日 晴 7.30 出発、9.00 大唐松山、13.30 唐松平、16.20 荒川出合、17.00 荒川小屋 ザックに「初荷」の札をつけて出発。大唐松山からの北岳はすどく立っている。これ以後ルートは南面で倒木が極めて多く、特に雨池山へのジャンクションには殆んど立木が残っていない。唐松平からは最後まで前につんのめりそうな下り、積雪が少いのと夕目で夏道がわかる。一ヶ所悪い岩場のトラバースがある。荒川の水音が聞えはじめる頃アイゼンを脱ぐが凍った急斜面は迂りやすく再びアイゼンを着ける者もいた。尾根の最下部は急な草付で足跡は不明瞭である。

一月三日 晴

夜叉神トンネルを越えて甲府へ、夜叉神峠から鳳凰三山縦走のプランも出たが、食糧棚卸の結果、うまいものがないというので中止。夜叉神荘の前でトラックを捨て、下山、合宿を終る。

2 食料報告

この冬山は縦走形式なので荷の軽量化、朝食の簡便化のためビスケット乾パン等を主にするようにした。ところが秋に池山小屋に荷上げた食糧のうちビスケット全部（二〇袋（一袋 7 枚入））、乾パン 23 袋、ソーセージ 10 本その他計 66 食分が盗まれていて一時は計画通り出来るかどうか不安であったが、池山へはいるまで停滞のなかったこと、参加人数が予定よりへったためその浮いた分をやりくりしてどうやら縦走隊 8 日分 S 隊 4.5 日分を作ることができた。盗られたのはほとんど昼食の主食であったがこれには朝食に予定していたのをまわした。

食料を荷上げておく場合、番人のいつもいる小屋はともかくそうでない場合は梱包は簡単に開けられないよう針金ですか（これは鼠、頭の黒い鼠をふせぐにもよい、同じ小屋に荷上げた東京都庁のパーティはかんをつんだまわりをベニヤ板でおおって釘づけしその上からまた針金で縛ってあった。それから内容は明示しない方がよいかもしれない今度の場合ビスケット等のうまくすぐたべられる物の入ったカンだけがあけられていた。しかしこの様な心配をしなければならないのは非常に残念である。

食料表(全食料)

乾パン	38 袋	コンソメ	12 本	ジャム	70 食
クラッカー	30 本	ミソ	6 袋	ミカン	16 個
ソバ	60 袋	カレ SB	2	桜干	30 枚
モチ	30kg	玉ネギ	25 個	砂トウ	4 斤
米	4 升	切干	2K	鯨肉	4K
サーモンソーセージ	50 本	マーガリン	10		

() 内は一人一日分

	主 食	副 食
朝	中華ソバ (1/2)	コンソメ (1/20) 玉ネギ (1/10) 切干 マーガリン (1/10) 鯨 若干
昼	乾パン (1/2) 又は クラッカー (2/3)	サーモン (1/3) ジャム ミカン (1/2) マーガリン (1/8)
夜	モチ (1.5 合) 6~7 枚 又は 米 (1.5 合) BH	ミソ (1/10) 又はコンソメ (1/20) 玉ネギ (1/10) 鯨 50g 切干 桜干し (1/2)

3 装 備 報 告

目的が縦走であるので極力重量の軽減に専念し、結果としてはテトロン製のテント、ザイルを携行することになった。テトロンテントは新保先輩のお世話で入手した帝人テトロンです。最初はツェルトを作る予定の所、入手するとツェルトには少しもったいないと考えてテントを作ることになった。

型はミード型 5 人用、底布はビニロン、内張は最初本絹を使うつもりだったが安いのが手に入らずナイロンタフタを使ったが失敗であった。テトロンもナイロンも水分に対する膨潤せいがなく又通風性の防水が施してあったので稜線上では風がスースー通り抜けるような感じで横からあおられるたびにローソクの火が消えた。

しかし大変軽く同型のビニロンテントの 7 割の重量であり、雪もつかず凍りつかないので撤収時間が短くこの点縦走には好都合であった。

この山行では雨に遭わなかったもので、防水性は未知であるが、春山でひどい雨に遭えば浸水騒ぎがおこるかも知れない。

ザイル、三ツ道具、いずれも八本歯と大唐松尾根上部での使用を考えていたが一度も使用しなかった。

バーナーは縦走に2台持つていくことを考えたが日程も短く又荷を軽くする為、最も調子のよいのを極めて慎重に取扱うことにして一台にした。

一覧表は後記の如くである。

(大島)

冬山装備表 (白根三山)				
	縦走隊		サポート隊	
テント	テトロン5人用	8.3kg	ビニロン6人用	12.0kg
ザイル	テリレン40m	2.0	マニラ40m	4.0
三ツ道具				
ハンマー	1	0.5	1	0.5
カラビナ、ハーケン	若干	1.0	若干	1.0
バーナー	1	1.0	1	1.0
コックフェル	1	0.8	1	0.8
たわし	2	—	2	—
スコップ	小1	1.0	大1	1.6
テルモス	1	1.8	1	1.8
修理具	若干	—	若干	—
		17.0kg		23.0kg

1959 年度

春山合宿報告

《'60年3月の記録》

I 薬師岳東面

1. まえがき
2. 行動概要
3. 行動記録
4. ルート図
5. 後記
6. 食料報告
7. 気象報告
8. 荷上げと偵察

II 真砂尾根から剣岳八ツ峰 I 峰東面

1. 行動記録
2. 食料報告
3. 装備報告
4. 気象報告
5. 偵察と荷上げ

I 薬師岳東面

1 まえがき

我々、阪大山岳部は一九五六年の下廊下横断（鳴沢－内蔵之助平－立山）に引続き、一九五九年上廊下横断（赤牛岳－スゴ沢－スゴ尾根）に成功したがその間一九五六年冬双六小屋－雲の平－薬師岳ラッシュ（2週間以上の吹雪のため失敗）、一九五八年冬双六小屋－赤牛岳ラッシュ（三俣小屋横より14時間のアタック成功）を始めとし、四季を問はず、数多くのパーティを、黒部川下廊下上廊下源流、薬師岳、赤牛岳、雲の平周辺に送った。

一九五九年上廊下横断に際し、水晶岳－赤牛岳の稜線を、西に薬師岳東面をながめながら行動したが、雪をまとったその姿に、大いにファイトを燃やした。

薬師岳東面は、三つの大きなカール、数本の長大な尾根、深く切れ込んだ谷、多数の岩稜、壁、をそなえ千三百米程の高度差で急激に黒部上廊下に切れこんでいる。薬師岳への東からの接近は長い稜線と、深い上廊下によって遮ぎられる。その為、有峯より太郎小屋を経て、薬師岳頂上附近にBCを作ることにした、ここから

(イ) ACを比較的容易と思われる南稜第一尾根に下し、上廊下を渡って、赤牛ヘラッシュ及び上廊下の偵察

(ロ) BCを早暁に出発し、沢あるいは、比較的容易な尾根を下って、金作谷北尾根より、南稜末端にいたる間の各尾根を登攀した。

なお、合宿終了後、一部パーティは立山へ縦走し残りはなお数日薬師岳に留まることとした。

八月、十一月に偵察隊を出し、地形がかなりはっきりしてきた。又同年十一月、太郎小屋へ、一部食糧のボッカを行った。三月十七日大阪発、二十三日、南稜第一尾根頭に BC を建設以来、非常な悪天と湿雪に悩まされながらも、金作北尾根、金作中尾根、中央稜、南稜、南稜第一、第二、第三尾根、金作谷、ガラ沢の登攀、上廊下のアタックに成功した。

天候及び尾根の状態が悪く、テントを下降さす事が出来ず、赤牛岳へは、アタックを送り得なかった。

2 行動概要

期間 3月17日～4月4日

メンバー 田井 (CL3)、玉井 (SL3)、打出 (装3)、前沢 (気3)、高橋 (食3)、佐藤 (食2)、金子 (食2)、酒井 (会計2)、宇野 (医2)、黒木 (マネ2)、米沢 (2)、平田 (4)、田端 (4)、森田 (4) 後発 田村 (L3)、笠松 (3)、大工原 (3)、保母 (3)、森村 (3)

3月17日 大阪発

3月18日 猪谷着 有峯経由 全員折立へ (バス、トラックにより)

19日 (晴) 6.30 発、四名太郎小屋へ (15.20 着)、残りは太郎小屋へボッカ、太郎 16.00 発、折立 18.45

20日 (晴) 7.30 発、全員折立より太郎小屋へ (13.50 太郎着)、独標よりスキーシールを使用

21日 (強風雪) 太郎小屋停滞

22日 (晴) 6.50 発、薬師へボッカ2回往復、平田、森田は折立へ下山、田井、前沢、南稜第一尾根頭に雪洞を掘る。(着 9.45)

23日 (晴) 全員太郎より空洞を拡張して入る。

田井、前沢、第一尾根、中央稜偵察

田端、上岳往復

24日 (風雪) 停滞

25日 (晴) 第一尾根下降 田井、高橋、打出、前沢、酒井

北薬師往復 玉井、米沢

南稜下降 黒木、佐藤、宇野、金子

田端、太郎小屋より下山

26日（風雪）

27日（風雪）

28日（晴）

中央稜、上廊下迄 高橋、黒木、前沢

第二尾根→立石→上廊下→中ノ谷→BC 田井、酒井、後発を迎えに折立方面へ 玉井、米沢 後発 田村、笠松、大工原、保母、森村 太郎小屋へ

29日（曇）田井と酒井の凍傷を二名太郎小屋へ連絡。田村、保母、玉井、太郎よりBCへ上り玉井は凍傷の酒井、佐藤と太郎へ下る。

30日（曇）黒木、金子、高橋、太郎へ下る、他は停滞。

31日（風雪）停滞

4月1日（曇時々雪）太郎より酒井他5名下山。

2日（晴）

第二尾根→ガラ沢→第三尾根 田村、保母

金作右俣→上廊下→金作中尾根 打出、宇野

第二尾根下部 田井、前沢

玉井、大工原、笠松、高橋は太郎より薬師往復し一部撤収

3日（ガス）BC撤収、太郎へ。

4日（晴）全員 太郎→有峯→富山

3 行動記録

金作北尾根

3月28日 快晴、強風→地吹雪後曇

メンバー 打出、佐藤、金子

雪洞発 7.15、北薬師の手前で佐藤調子悪く引返す。帰路佐藤は右耳に凍傷を負う。

北薬師 8.20 に通過し北尾根の分岐点を 9.15 に通過。この分岐点は雪庇のため上から分りにくく少しとまどった。分岐点から少し下った所から急な斜面となり上からは斜面の途中の部分は見えない。急になるコルを9.40に通り、そこでアンザイレンする。雪は新雪が表面に十センチ程積り団子になってすべる。その斜面の下のコルが 11.10。ここで高度にして黒部川までの約半分、距離では約 2/5 程度であり下まで下り得る見通しは立ったが天気と時間を考え、12.30 引返す。そこから下はナイフリッジが少し続

きその下はブッシュである。稜線 2.10、風はかなり強い。デポ地点 3.45、雪洞 4.00。帰りは稜線までトレースが消えラッセルを強いられた。金子左耳に凍傷。

金作谷及び金作中尾根

4月2日

パーティ 打出、宇野

春山合宿最後のアタック日である。アタックは3パーティー夫々薬師当面の異なったルートを目ざしている。我々二人のパーティーの目標は薬師本峰から金作谷のカールへ下りてそこからさらに金作谷を下り、できれば黒部川との出合まで下ってから引返し金作中尾根に取付きその尾根伝いに北薬師頂上まで出る。もし下まで降りられないようなら途中から尾根に取付いて登るというものである。

午前六時三十分ベースの薬師南稜の雪洞を出発する。二人の荷物は共に 5kg 内外で軽いが早朝の気温はきわめて低い。稜線上を歩いて七時薬師岳本峰に到着、薬師如来に安全を祈って七時五分祠の後に下りる場所を見つけアイゼンをきかせてカールに下りる。雄大なカールを背にしてなお下るとたやすく金作谷に下りることができた。谷はさすがにデブリだらけである。気温が上りラッセルがひどいので固く大きなだんごになったデブリの上を歩くのだが、足を捻挫しそうで歩きづらい。左手の金作中尾根を見ると、尾根の側面は雪の急斜面で岩峰もあり途中から取付くのは非常に困難である。やはり末端まで下ることにする。

谷を下り中尾根の末端の取付きへ着いたのは八時五十分。そこから少し下ると約十五分程で黒部川へ到着、出合は雪で埋まっているが、少し下流では流水がでていいる。そこで少し休んでから引返す。九時半中尾根に取付く。取付きは岩場であるが、ザイルも使わず尾根上に出る。そこへ出るのに四十分程かかる。尾根は雪が深いのでアイゼンをはずしてワカンをつける。しばらく登るうち、先刻下った金作谷に側面からあまり大きくはないがナダレが二、三起るのが見られる。やはり早い時間に谷を離れて良かったと思う。尾根は谷から見て想像していたよりは幅広く、また雪も深くアイゼンの必要は全くない。ワカンが偉力を発揮する。休憩のたびに赤牛や木挽山をみてどんどん高度をかせいでいるのを知る。途中二十分ばかりで昼食をすます。ラッセルを交代しながら、早いピッチで登り続け、北薬師直下の行程中唯一の悪場である急斜面でアイゼンにはきかえ、そこもなんとか登り切る。主稜線に出たのが午後五時五分過

ぎであった。北薬師頂上でその日の山行に満足しながらゆっくり休んで夕やみのせまる稜線の上をとぼとぼ歩いて六時頃雪洞に帰り着く。

中央稜から黒部へ

3月28日

メンバー 高橋、黒木、前沢

時間

7.00 出発

9.00 中央稜上部岩稜通過

11.30 黒部着、昼食

12.25 黒部出発

4.00 岩稜取付

7.50 雪洞帰着

主稜線上は相変わらず強風であるが三日ぶりの快晴で剣が良く見える。薬師頂上の小さなホコラの東側から中央稜に下る。稜線のかげに入ると同時に風はなくなり部分的にひざを越すラッセルとなるが下りでもあり雪も軽いので苦にならずはかどる。23日にアンザイレンして下った雪の急斜面は前日までの雪が安定していないので下れない。横の岩の露出した部分を下るがこの方が楽である。23日に引返した岩稜に出る。赤いナイロンザイルがうれしい。非常に細いやせ尾根の上に雪がのっている一番やっかいな場所をすぎ、所により確保用に二本ほどハーケンをうつ。岩稜を通過して時計を見ると九時、今日は黒部まで行けそうだ。あとはなだらかな雪稜で問題はないが、雪は完全にくさっており足をふみだすと大きな塊がずるずると落ちていく。黒部と頂上の間あたりで尾根が大きく二つにわかれるがここでワカンをつけ右つまり南側を下る。岩稜に取りついている頃から見えていた右の第一尾根左の金作中尾根の二パーティも今は見えない。やがて樹林帯に入る。シリセードをして時間をかせぐ。11.30 井戸の底の様な感じの黒部の流れに立つ。少し下手にスノーブリッジが懸っており渡渉はいたる所出来そうである。早く引返さぬと遅くなると思ってもつい昼食などで一時間近くいる。もっとかゝると思っていた樹林帯を意外と早く1.45に抜ける。ワカンをはずすこの頃より雪多くなり風が出て下りのラッセルが消されている。登りのラッセルは時間を喰う。岩稜下部に4時着。突然一人が腹を押えて倒れる盲腸だったらどうしよう。しかし30分ほどでなんとか歩ける程度におさまる。気温が下って岩についた雪が締

りとても歩き易く助かるが、一応アンザイレンする。岩稜をすぎると急にラッセルが深くなる。そろそろ日が暮れだした。ジャンクションまで行かぬうち完全に日が暮れ前方は薬師の巨大なシルエットにうまってしまい方向がつかめない。ピッケルでたたいて一番高い方へ登る。ホコラの真下へ出てほっとする。主稜へ出るととたんに強い風で地吹雪を伴っている。主峯を南へ下って雪洞へ帰るのだが左黒部側へよりすぎると雪庇をはづすし右へよるとルートがわかりにくく下手をすると薬師沢へ下りかねない。やがて22日の荷上げの時に残したデポを見つけ小おどりする。この時雪洞の方向にランプが明滅しているのを見つける。有難い。これまで出さずにいたランプを出し合図する。向うも気づいたらしい。あとは雪庇をはづさぬように進むだけだ。雪洞帰着8時近い。熱い湯をのむ。とても疲れた。

南稜第一尾根

3月25日 メンバー 田井、前沢、酒井、打出、高橋

南稜第一尾根とは、薬師岳東面の中央カールと南稜カールにはさまれた比較的傾斜のゆるく幅の広い、そして岩の少ない尾根である。

以下当日3月25日の記録と合わせ概要を記す。なお時間は偵察しながらのものである。

8.30 ABC 発、ここからはところどころ岩の出ている丸い尾根をたんたんと下る。向って左側の中央カールの、まわりの壁がぐいぐいせり上がる。9.10 尾根が三つに分かれる。この辺から尾根上に岩が入りくんでとび出していて、所によっては腰迄もぐる雪、陽の当る斜面では、はい松まで露出している。

右から二つ目と三つ目の沢を10m程下ってから直角に右に中央の尾根を越し、一服。10.10 空はあくまで晴れ、右も左も沢は急で気味が悪い。一方尾根は岩が10m程垂直にせり上がり、登ってみるも先は下るところもない。

12.00 左の沢の右はしを岩壁にそって下る。日陰になっていて、しかも吹きだまりらしくラッセルは腰迄、岩の切れたところを直角に右に曲る。この辺は少しやばい。下は沢の中央迄見通せる急な沢、上は岩。ザイルを使う。約10m。ここからは重い雪とブッシュと岳樺がずっと黒部まで続いている。推定に時間を要すると思はれる。我々は見通しが立ったので帰路についた。13.40→15.15 ABC。

南稜第二尾根——上廊下

3月28日 快晴 メンバー 田井、酒井

南稜第二尾根は南稜から出ている尾根の中で一番顕著な尾根で、南側はびっしりと岩稜をならべ、二千七百メートルぐらいから扇状に広がって黒部へ下っている。

久しぶりの快晴に強風の中を南稜に下る。第2尾根の頭から、コルまでは岩稜伝い、コルから肩(2700m)迄は不安定な雪稜を下った。ふりかえると、南稜側面の氷をつけた岩群が朝日の中で輝いていた。肩下の南側はくっきりとしたリッチを数本形成している。赤牛岳、水晶岳の稜線、雲の平、上廊下がずっと見渡せるが、この尾根の直下立石めがけ、ゆるい尾根を下った。雪はひざ迄ぐらいもぐる程度、黒部へ出る直前に、立石正面の沢をからんで河原へ立った。水はとうとうと流れている。食事をすませ、河原(黒部左岸)に行く。赤牛側から、滝状の小沢が入るあたりから廊下状になって来たので、高巻きを行った。このあたり薬師側の沢は大きなデブリを押し出し、雪橋となっている。

デブリを一つ一つ越えるが岩のそばは空洞になっていて危険である。再び両岸が廊下になって来た。昨夏下流から来て引き返した所である。ハーケンを打ち、捨て縄をかけ、補助ザイルを張って、へつった。下は青黒いところになっていて緊張させられる。あと3ピッチ斜面をトラバースして悪場終了。南沢出合を通り、河原伝いに中谷出合着。出合は、大きな雪橋がかかっている。食事をして、日没を待つ。温度が下がって来て凍り出した。雪崩の危険を感じなくなったので登り出す。最初はしまって歩きやすかった。星がだんだん増えて来る。カール底の上り口附近の星を、コンパスとして、ラッセルを続けた。高度をあげるにつれもぐるようになってくる。蟻地獄が頭に浮ぶ。カールへは右手の岩稜に取り付いてあがった。いつの間にか、雲の流れが、速く星が消えている。睡かったがチョコレートをしゅぶりながらラッセル。雪庇を避けて、岩稜の根本を伝って南稜稜線に出た。稜線上は強風で酒井の眼鏡がたちまち白く凍りついてしまう。磁石を出して見ていると、薄明るくなって来た。予想以上に時間を食っている。雪洞はすぐ見つかった。

BC 発 7.00 第二尾根肩 8.55 立石 11.40 発 12.20 悪場終了 15.40 中谷出合 15.50
発 16.30 南稜稜線 5.00 BC 5.30

南稜第三尾根

4月2日(快晴) メンバー 田村、保母

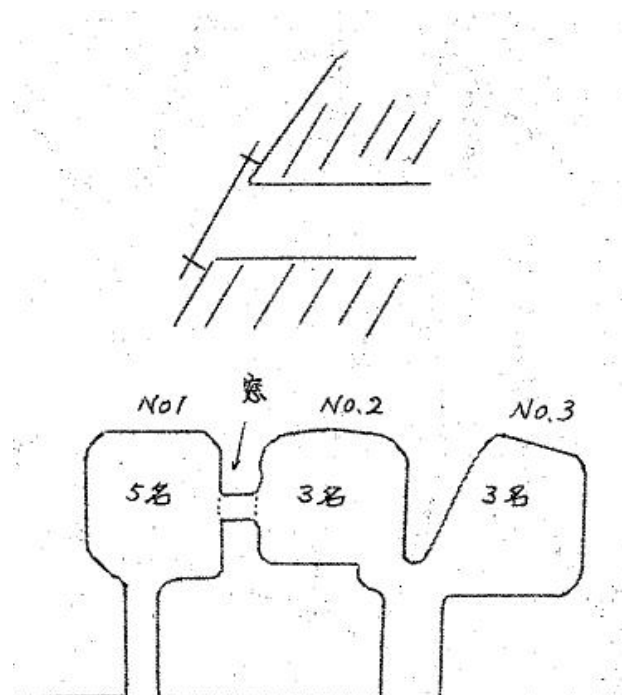
6.00 出発、第二尾根のコルより沢を下り、7.00 に第三尾根の支尾根に取付いた。下った沢は広いがかなり急な沢で大小さまざまなデブリがあった。アイゼンで膝までのラッセルだった。主稜とのジャンクションまでは平凡な雪稜。雪はアイゼンで膝あたり時に腰まで来た。途中一ヶ所だけ急傾斜のところがあり、ここではじめてアンザイレンしてブッシュにつかまりこれを通過した。以後ジャンクションまでコンティニアスで進んだ。主稜に入ってからはずっと交代確保を行った。そこより三ピッチで小さなピークを越して昼食 (11.00)。昼食後三ピッチ目が悪くブッシュの生えた岩場に雪がつき下層は氷になっていた。確保用にハーケンを一本打ちあとはブッシュにつかまり腕力にたよって30m 一っばいで登り切った。以後は岩の上に厚く雪の積った両側が岩壁となって下の沢まで切れ落ちているナイフリッジを三ピッチでピナクル頂上に立った。尾根通しに下ろうとしたが雪の状態が悪く下れず二ピッチ引返し南側の急な雪稜を下りコルに達した。コルより南側の六十度近い雪面を二ピッチ登りこれより悪い雪にくるしめながらリッジに出て三ピッチで南稜に出た。4.00 そこには田井君、前沢君が二時間程我々の登攀を見守っていてくれた。緊張を解かれのんびりと雪洞に帰った (5.00)、輪かんは持って行ったが雪の状態が場所により非常に異なりかつ傾斜がきつかったので用いなかった。

(保母)

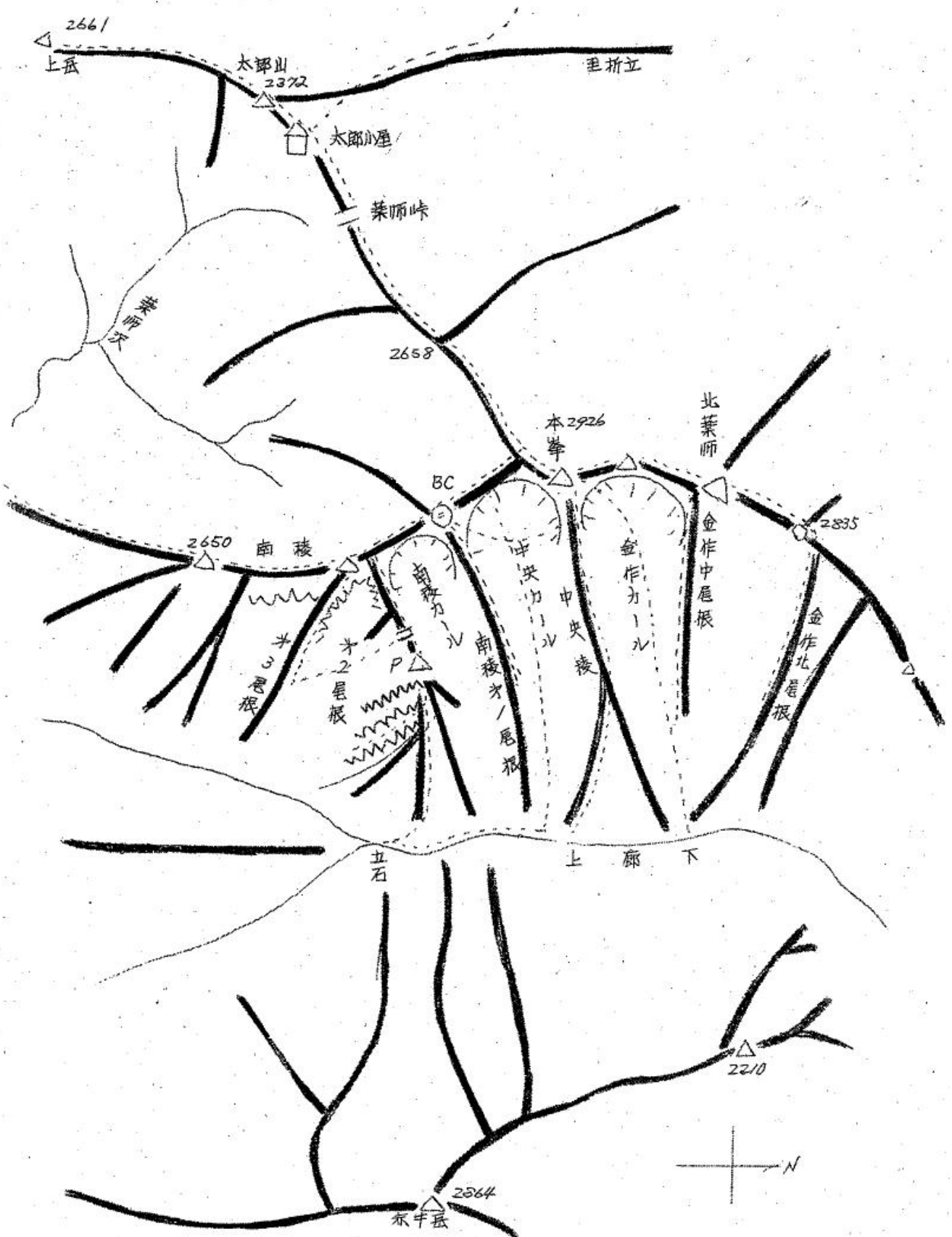
装備及び雪洞について

雪洞は、薬師岳南稜第一尾根の頭に十一名用のものを掘った。やたらに大きなものは、天井がすぐ低くなる危険があるので、下図のごとくねずみ穴式とした。入口を No.1、No.2 のように、共通構造としたことは成功で、雪質も良かったが二十日近く使用したが天井は、ほとんど低くならなかった。

入口の通路は、左図のように、斜面にそって、布を張るべきである。通路の上を、破ったり、雪洞の中に入口布を張ると、雪が吹き込んだり、上から滑って来る雪が、引っかかって、埋没の原因となる。



4 ルート図



行動予定表

	独立	太郎小屋	業師岳B.C	A.C	赤井
3月18日	12	10			
B.Hへ荷上げ 予想停泊日 1日		4	10		
B.H集結 " " 1日		10	4		
B.Hへ荷上げ " " 1日		3	2 12		
B.C 集結 A.C 偵察 " " 1日	3 5		12	2 偵察ルート開始	
A.C 建設 B.C行動開始 後発入山 " " 1日		5	2 荷上げ	5 4 偵察 2 東面 2 下山	
赤井アタック " " 2日			5	2 連絡 2 東面 2 下山	4
上廊下偵察 B.C行動 後発B.C入り " " 2日				2名連絡 2 東面 2 下山 2 上廊下	2 3
A.C撤収 B.C集結 " " 1日				5 撤収 2サポート 2 アタック 2	
この次の日曜日 2名 有峰へ下山, 19名 立山へ出発, 5名 残留 残留者は, 4月8日朝 有峰へ下山					

行 動 表

	折立	太郎小屋	葉師岳B.C	
3.18 曇	14			
3.19 晴		4 10		
3.20 晴		2 10		
3.21 風雪	停滞			
3.22 晴		2	2 10 8	
3.23 晴	← 2		2 上岳	← 2 *ノ尾根 中央後
3.24 風雪	停滞			
3.25 晴	← 1		5 2 4	*ノ尾根 北葉師 南後
3.26 風雪	停滞			
3.27 風雪	停滞			
3.28 晴		後 見 5	2	3 3 2 中央後-雲部 金作北尾根 *2尾根-境下 一中谷
3.29 曇			2 3 3	
3.30 曇			3	
3.31 風雪	停滞			
4.1 曇	← 6			
4.2 晴			11	2 金作中尾根 2 *2尾根 2 ガラ谷- *3尾根
4.3 曇			6	
4.4 晴	← 10			

5 後 記

薬師岳東面の開拓という点では、一応の成功を見たが、多くの反省すべき点がある。

テントを下す予定の第一尾根は岩峯にはばまれ、中央稜は、雪の状態が悪く、メンバーの関係もあり、テントを出せなかった。その後 BC よりラッシュでアタックを考えたが、遂にその機会を得なかった。後でわかった事であるが、金作中尾根、末端にテントを下すことは可能である。上廊下へ下るには、金作谷を更に下らねばならぬが、夜明け前ないし深夜ならば、距離傾斜共に少ないし、危険は避けられるものと思はれる。ただし高度二千米附近では、三月でも雨が降るようなのでその点、テント等注意が必要である。

縦走は立山へ行く予定であったが、縦走メンバーに凍傷者を出したので中止した。凍傷は三月二十八日の強風下の長時間の行動による。

今回の合宿で特に問題となったのは、下廊下、上廊下の横断の頃よりよく言われて来たことだが、“下向の登山”の特異性である。通常のアタックでは、下の BC から、ピークに向け、行なはれるが、我々の場合は、まず稜線から下に向けて出発し、しかる後、上向けに帰って来なければならぬ。午前中は誰しも元気で良いから、それにつられ、必要以上に下ってしまう。又下りに急いで、くかく足を傷めたりしやすい。その為、登りになってから、苦しい登攀をしなければならなくなる。その失敗例が三月二十八日の行動にあらわれている。

高度差が主稜線と黒部川との間で千三百米あるのであるから、当然の事であるが、上と下でかなり、天気や雪質がちがっている。上で雪が降っている時、下ではかなり雨が降ったようである。その為、次の晴天に沢の下部はかちかちにクラスト、上部はフワフワで、ラッセルにてこずるような事があった。

我々はここ二、三年主としてポーター形式の山行を主として来たが、それに対し、今回のようなやり方は、個人、個人の天候、雪の状態に対する判断力及び技術の向上という点で得る所大であった。

なお、スムーズに BH 入り出来たのは、全く前田建設の御好意によるもので、ここに深く感謝します。

(田井)

6 食料報告

春の合宿は、アプローチの長い事及び ABC 以後の行動がアタック的要素を多分に含んでいる事を考慮して、食料の軽量化、調理の簡素化に努力した。

1. 概 要

- 一、朝、昼食に全部、毎日糧菓製造の乾パンを用いた。
- 二、朝食の副食物としては、簡単な飲物のみとし、出発の際の調理時間短縮に留意した。
- 三、晩はソバと餅を併用した。
- 四、行動食、停滞食の区別はなくした。
- 五、各自非常パック携帯を決めたので、アタック食に類するものはつくらなかった。
- 六、近頃合宿で使用量の増してきた滋養の含まれない科学食品(例えば人工甘味料、毒々しい色のジャム等)を極力廃除した。

2. 乾パン

懸案の乾パンが秋に試作試食され、まずまずの成績だったので、今回は朝、昼食に全てこれを用いた。

長 所

- 一、梱包に便利、又かさばらない。一斗缶にゴムパンで約 30 ケ 15 食分、クラッカーで 22 本 33 食分入るが、乾パンは約 200 枚 (朝食分で 40 食、昼食分で 23 食平均)
- 二、配分に便利、毎日糧菓ではこちらの希望通り一食分ずつポリエチレンの袋に入れてくれるので大変有難い。
- 三、越年しても変質しない。
- 四、特に朝食では、湯さえつくれば食事が始められる。
- 五、乾パンにいろいろな栄養分を入れる事によって、副食の量をへらす、あるいは全廃も可能。

短 所

- 一、どうもあまりうまくない。一般に味が薄い。又もっと甘い味のものの種類を多くする必要あり。
- 二、値段が高い。即ち 1 枚 5 円なので朝食で 25 円、昼食 35 円では他と比較して高い。(ゴムパン 27 円、中華ソバ 225 円、クラッカ 16 円、三立の乾パン 20 円) しかしこれは副食を減らす事でおぎなえる。

なお今回用いたものは、ピーナツ入、バター入、レーズ入、ミルク入、ゴマ入の五種類であるが特別に注文する事もできる。

各成分分析表は再三の請求にもかかわらず入手できなかったのは残念である。

又、朝食 5 枚、昼食 7 枚の量は十分であろう。

3. 献立

献立表を参照されたい。

4. 仕分、梱包

梱包は、秋春共全て一斗缶使用。

太郎小屋においてある秋の荷上品と春上げたものとの仕分け梱包は充分の準備により四人で四時間足らずで済ます事が出来た。その際に注意した点として、

- 一、一回目のボッカで上げる食料及び縦走用食料はどの缶をあけても主副食共に含んでほとんど同じ内容物である事
 - 二、どの缶もほぼ等しい重量である事
 - 三、缶の外側に内容物の一覧表をはる事
 - 四、ボッカあるいはデポの際、缶にかけた縄がよく切れて内容物がはみ出すので全部缶のふたに目張り紙をはった事
- 等である。

計画がポーラーでなく、ラッシュ的だったので仕分けは昨年に比し非常に楽だった。

5. 費用及び重量

一人一日百六十円の割で立案したが、装備雑貨を除くと百五十円見当になる。それに各自の行動予定日数だけ掛けただけを集め使用した。昨年のように他人の分の負担は止めた。

秋の荷上げは主食を主にし 160kg、春に上げたものは 200kg 足らずだった。

6. 使用状態及び残余食料

合宿途中の計画変更で、一方は食い放だいなのに、一部では食料不足となった事は、食料係のミスであった。常に流動性を持たさねばと痛感した。

合宿終了時の残余食料は

折立・撤集用のもの 6 食分

太郎・乾パン 3 缶、副食品 1/2 缶

薬師・乾パン約 5 缶、副食品約 3 缶

例年残余の多く出るマーガリンは、それを見込して普段の 1/2 程度しか持っていかなかったが、それでも余った。

(金子、佐藤、高橋)

7 薬師岳気象報告

先年の春山の際、エボシ-赤岳間の稜線を行動しているときこちらが良い天気であっても黒部をへだてた薬師岳方面は午後になるといつも雲がわき上り、直接日本海に面した薬師岳の天候の悪さ、敏感さを思わせた。今度の合宿の前に先年薬師岳周辺で合宿を行った京大山岳部の気象係田中健一氏にその特徴などについて知らせていただき参考になった。

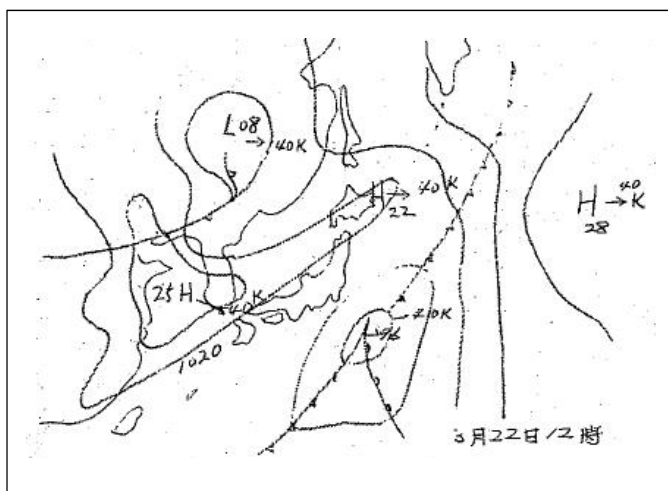
気象報告と云っても毎日の天候のくわしいデータはとっておらず、ただ天気図と実際の天候、予報との比較などである。次に毎日の大体の行動と共にこれらについて記す。

なお天候の変化した時間は大体のものであり特に停の日などあまり外に出ないので必ずしも正確ではない。

- 3/19 折立 \rightarrow 太郎小屋 ○ 無風
 20 " \rightarrow " ○ 微風 \rightarrow 12h⊖ 強風 \rightarrow 14h⊕
 21 停滞 ○ \rightarrow 10h● \rightarrow 15h⊙
 22 太郎 \rightarrow 薬師雪洞 ○ 強風 \rightarrow 主稜

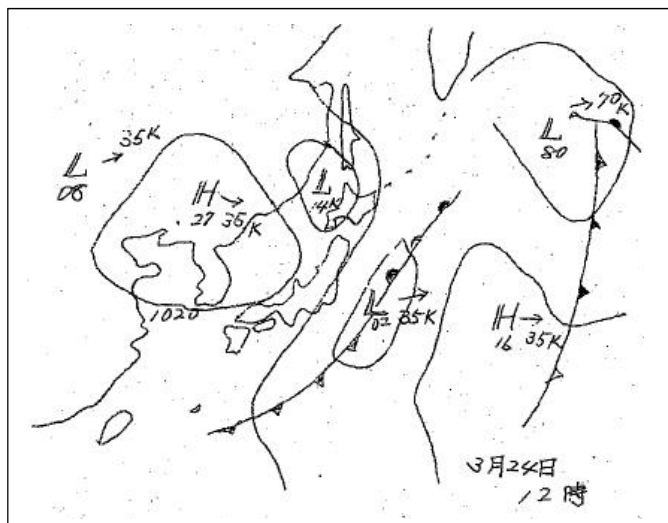
SE 烈風 (風速 15~20m)、歩行困難、しかし少し下った太郎側の樹林帯は無風

薬師では W~S 風が殆んどすべてであり雪庇も東~北に発達しているがこの日は逆だった。



- 23 雪洞 \rightarrow 第一尾根 etc ○ 微風 \rightarrow 14h
 ⊖ 強風 \rightarrow 16h⊙ 強風、寒冷前線接近の為夕刻より天候悪化

- 24 停滞 14h⊙ 強風 \rightarrow 17h⊙~⊕
 前日の天気図から比較的良い天気になると考えていたが高気圧がずっと北を通ったため天候悪化



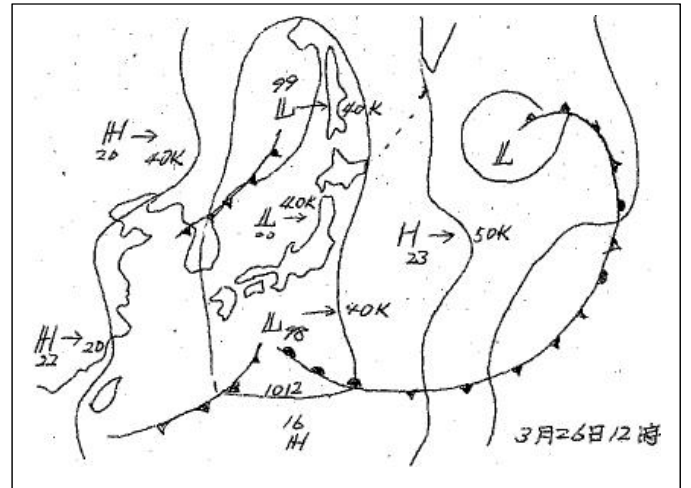
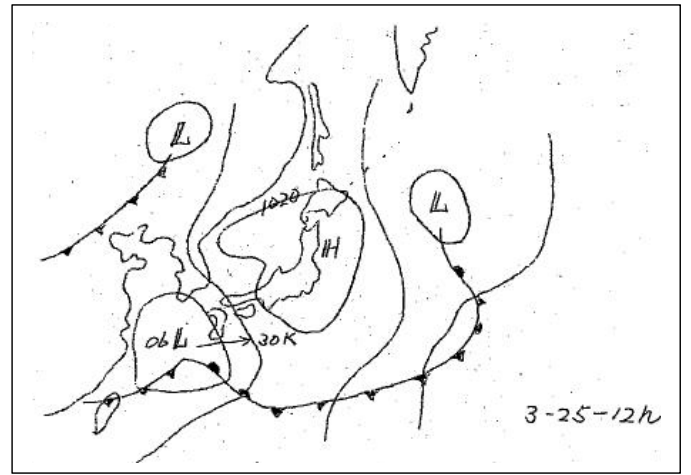
- 25 雪洞 \rightarrow 第一尾根 etc ⊖ \rightarrow 15h⊙
 主稜近くでは風が吹いていても少し下ると無風、気温高く雪の状態はどんどん悪くなる

26 停滞 8h⊗→15.30◎→17h 再び⊗
朝 S 風強→15h~16h 弱→17hW 風、
気圧の谷に入り全国的に雨

27 停滞 一日中⊗
前日と同じ様な天気雪洞入口がしょ
っちゅう埋る。

28 雪洞⇨黒部 etc 7h ○ → 12.30 ⊕
→14h◎~16h⊕19h○

主稜上は SW 風が終日吹いていたが
少し下ると無風になる。前日の天気
図で移動高が九州の南を通ることか
ら好天気が予想されたが、15h 頃は全
天雲におおわれ風も出て心配した。
これは地形性のものか 16h には回復
しました。



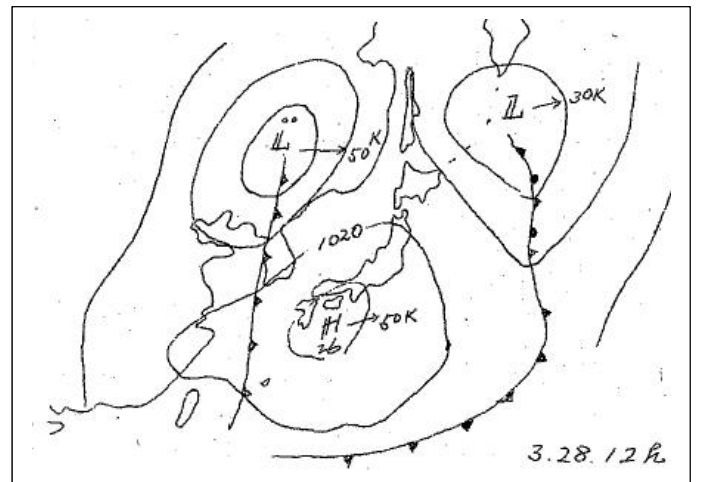
29 停滞 8h 濃いガス SW 風かなり強
11h⊕14h◎→⊕~◎

前線を伴った低気圧が接近した為悪
天候となる。前線が ENE~WSW へ
走っておりすぐ後に別の低気圧がひ
かえている為悪天気が続く。

30 停滞 濃◎→◎~◎

31 停滞 9h●~◎強風→16h●

気温が高く明け方から雨が降り続く。一番北寄りの無人の雪洞は雨もりしてい
る。30 日から前線が東西に走りこの上を低気圧が走り天候回復の様子がない。
移動高を待つ。

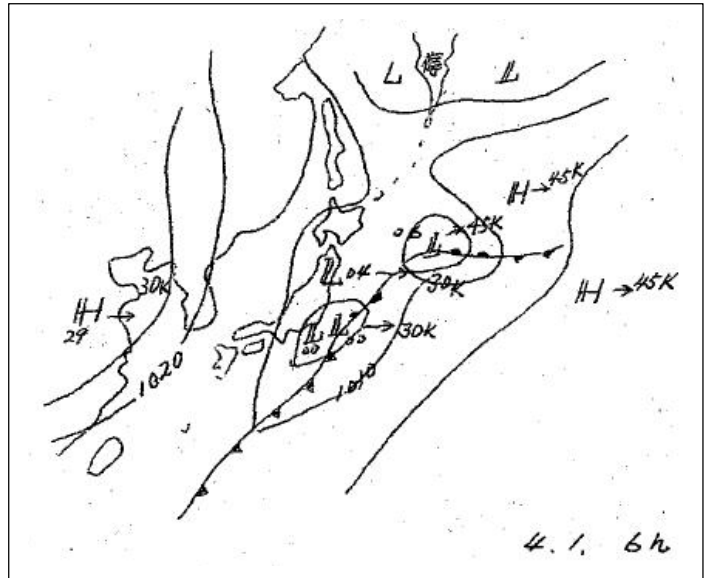


4/1 停滞 4h⊗→9h◎~⊗→16h◎

華北に張り出して来た高気圧に期待したが天候はいぜん回復しない。ただ気温
が下って来て雪になった。朝 6h の天気図ではすぐに良くなる様に思えたが日本
海に低気圧が発生した為又悪化する

2 第 1,2 金作尾根 etc 4h○→13.30→14◎→15.30⊕細水

午前中これ程の好天になるとは全日考えていなかった。これという移動高もなくただ天気図で西の方から晴れて来ているのをあてにしていた。午後から又曇ったが 16h 頃晴れだし、空中に浮遊する細氷がチカチカ光って美しい。



- 3 雪洞→太郎小屋 6h⊕~10h⊕~
⊕→12h⊙⊕→14h⊙~⊙

薬師から太郎への尾根はまるくここで完全にガスにまかれた為一時は方向を誤るほどだった。樹林帯では無風。

- 4 太郎→折立→猪谷 6h⊙→7h⊙~14h⊕

以上である。主稜線へ出てからの行動日数が 6 日であるから約半分となる。

(前沢)

8 太郎小屋へ春山用荷上げ、薬師岳偵察

期間 11月3日~11月7日

メンバー 田井、大工原、高橋、前沢、酒井、黒木、佐藤、米沢、小山

薬師岳東面での春山合宿にそなえ、相当量の食糧、装備を荷上げた。その後、薬師岳南稜にテントを出し南稜第2尾根の岩場を偵察。雲平よりの写真偵察とはかなりちがっていたが、豪快な岩稜群を発見した。

11月3日(晴のち曇) 7.30 チャーターした小型トラックに乗り小見出発→8.30 有峯着→9.00 折立着→10.15 一部の荷を飯場にあづけて全員 30kg ずつで出発→雨にぬかるんだ道に、予想以上時間とられる。13.30 三角点→冷たい雨の中を進む 16.45 太郎小屋着、泊る。夜豪雨。

11月4日(雨のち曇) 雨がおさまって来たので 10.00 小屋発→ずくずくの太郎平を飛ばす→11.20 三角点→12.10 折立着。

11月5日(快晴) 7.00 残りの荷をまとめ第2回のボッカ出発→どんどんピッチ上る→8.35 三角点→11.00 太郎小屋着→偵察メンバー(田井、前沢、高橋、酒井)は南稜にテントを出すべく出発 12.40→15.10 南稜ジャンクション。カールは斑状に新雪→南稜第1尾根頭附近にテント張る。15.30 残雪が尾根の上にまだ残っている。

11月6日(晴) 天気の様子がおかしいので急ぐ。7.30 テント発→第2尾根頭→第2尾根は岩稜とブッシュが交互に現われる→中央カール側にチムニーを降り、コルに立つ8.30→ここから本格的ブッシュこぎ始る。第2尾根の肩より更に草付の急斜面を下る。ここから第2尾根は黒部に向い多数枝分かれしている。すばらしい岩稜が集っている。その中央B稜の頭に細い岩尾根を伝って下る。頭10.05→頭から下を見るがハングしているようだ。固いよい岩だ。天気が怪しいので10.35 帰途につく→はえ松こぎを続ける→11.50 コル→12.35 南稜→テント場着12.50→撤収→14.25 太郎小屋着。他のメンバーは今日午前中薬師岳往復。

15.30 太郎小屋発→18.40 折立。飯場に泊る。

11月7日(雨) 前建の人々の御好意でトラックに便乗させてもらう。7.30 折立発→9.00 小見着 (田井)

II 真砂尾根から劔岳八ツ峰I峰

1 行動記録

積雪期の劔岳八ツ峰、といってももう新鮮さはとうの昔に失われている。だが先人たちは例外なく一、二のコル又は二、三のコルへ上って、一峰へ直登するという真に末端からの記録はまだない。末端から頭まで、我々はこれを狙った。我々は当然、未知の個所、一峰の当面に目をそそいだ。一峰のピークから四本の尾根が劔沢におちている。マイナーピークで二つに別れている尾根(一稜、二稜)、ダイレクトに劔沢に達している尾根(三稜)、二股に至っている長い尾根(四稜)、三稜を撮った場合、劔沢から一峰まで高度差940M。四稜の場合は1040mにもなる。一峰東面が意外に大きなスケールを持っているのを知った。傾斜も2000米以上は急で 40° ~ 45° 、ことに2000m~2300mは 45° を越えている部分もある。

さて「末端から頭まで」このために克服しなければならない問題

1. 一峰東面について、われわれは何も知らなかった。積雪期のその場所については文献も見あたらなかった。ただ〇年立教大学山岳部報告に一枚の写真があっただけだ。
2. 積雪期において一峰東面の下に到達する方法
3. 一峰東面では、非常に困難な登攀を強いられること、そして非常に長いアタック行。

1、2の問題を解決するために、58年秋十一月初旬、偵察と劔御前小屋への荷上げを行った。大島、白井が劔沢から一峰東面へ、村井、谷垣、峯田、三沢が真砂岳からハシゴ段乗越を経て黒部別山に到る尾根（以後、真砂尾根と仮称する）を降った。だが、結局、一峰東面については何も具体的なことを知り得なかった。唯三稜か四稜が登攀可能ではないかという憶測はついた。2については、もちろん劔沢を通るのが、もっとも近道にちがいない。だが雪崩の危険がある。それに荷物を運ぶことなどのために何度も往復する。いわば幹線だから安全にあるに越したことはない。それ等の理由から真砂尾根を使うことに決めた。

結局、次のような計画をたてた。劔御前小屋をBH、真砂尾根の2300mの高度の場所にCI、真砂尾根から劔沢へおりているいずれかの尾根（それは一峰東面のどの尾根を選ぶかによって異なってくる）の末端にCII（これがアドバンスベースキャンプになる）、一峰東面のいずれかの尾根のなるべく高いところにCIII（アタックキャンプ）をそれぞれ建設する。

CIIIからアタック隊は八ツ峰、その頭、本峰を通って別山乗越へ行く。サポート隊の一つはCIIIから一峰、または五、六のコルの窓まで、他は別山乗越から本峰までアタック隊を迎えに行く。

メンバーは三年部員が三人、二年部員が6人、新人が4人、そして早く帰る四年生一人と先輩が一人、少しすくなすぎた。もう少し多数予定していたのだが、たとえばリーダーに予定していた大島が頭骨炎で参加不可能になるなど、不測の事情のため減少した。

成功に至るためには解決すべき鍵は多くあった。

1. 偵察と登頂の二つを行わなければならないこと
一峰東面と真砂尾根からの下降ルートについての偵察。また一峰東面に要する時間と困難度がよくわかっていなかったのも、もし、一峰それ自体が対象である場合八ツ峰は放棄し、計画を一峰のみに限定すること、を前もって申し合わせた。
2. 雪崩の危険。なるべくこれを避けるためルートを多く稜線にとったが、なおかつ、これの予測の必要と危険はつきまとうにちがいないこと。
3. 真砂尾根の大部分は曲折したナイフリッジの連続であるが、ここを多くの荷物をついで新人が通ること。このため250mのフィックスを要した。
4. CIIIの建設。急峻な一峰東面にキャンプを上げること、又、おろすこと。なるべく軽量にするために、アタック直前に建設し、できれば雪洞にすることを考えた。

6. 長い困難なルートをとるアタック

5、6については、かなり詳しく準備したが結局、行い得なかったことなので、ここに詳述する必要もないと思う。

……………だが、われわれのなし得たことは、偵察だけであった。

期間 3月15日～4月2日

メンバー 佐藤、広瀬、村井、谷垣、西垣、白井、錦田、丸尾、五百蔵、三沢、梶本、浜田、森、4年木村、OB立花

(行動記録)

3月14日 広瀬、五百蔵を除いて全員大阪発、富山へむかう。

3月15日(晴のち吹雪) 美女平9.30発、弥陀ヶ原ホテル前14.00～14.40、天狗平小屋18.00。ホテルまでは荷物はすべて雪上車であげた。荷物の半分をホテルに残し、それぞれ30kgをかついで天狗平へ。天候次第に悪化。美松杉をすぎるところから吹雪、視界はきかない。スキーを、はいて荷物の多くをデポしようやく小屋に入る。

3月16日(吹雪) 吹雪のすきをねって前日デポした荷物をとりに行く。小屋から200メートルぐらいの距離であった。停滞。尚、この日広瀬、五百蔵、みだが原に入る。

3月17日(快晴) 人間と荷物半分は天狗平に、残りの荷物はホテルに残っている。人間も荷物もすべて地獄谷まで持っていき、真砂岳から出ている尾根をも偵察しようと思図した。4時星空の下、天狗平を出発、深いラッセルののちホテル着6.00、広瀬、五百蔵と合流、ホテル発7.05、天狗平帰着10.45ふらふら。立花、木村、佐藤が12.30、村井ら12名は少しおくれて天狗平発、立花らは夏道より数百メートル上手で沢を横切り、14.20、村井らは室堂経由で16.00、房治温泉着。先行した佐藤の誤った指示によりこの遅延を生じたのである。立花ら3名は15.30地獄谷発、雷鳥沢の右岸の尾根を通過して別山乗越17.45、途中からアイゼンが必要になる。すでに日没寸前であったので雪質を調べたのみで下山。19.35地獄谷着、この日は全員房治温泉に泊る。荷物はまだ半分天狗平に残っている。

3月18日(曇) 立花、村井、谷垣が真砂尾根の偵察に向う。他の12名は5.00発。沢を横切るルートをとって6.10天狗平着。残りの荷物をもって7.45天狗発。9.00～10.05房治。乗越へむかう。登るにつれガスは次第に濃い。風もつものる、乗越は吹雪、13.30着。村井らは偵察に行けず乗越小屋にいた。

3月19日(快晴) 立花、村井 7.00、乗越小屋をあとにし、真砂尾根へザイルフィックスと偵察に向う。約2200米まで下る。14.00 乗越帰着。佐藤ら10名は地獄谷へ荷物をとりに下る。6.10 発、7.40~9.25 房治、13.50 乗越。白井、錦田、森は秋に荷上げた食料を整理するために小屋に残る。やっと荷物のすべてを乗越へ上げたと思ったら共同装備の缶を忘れたことがわかり丸尾と五百蔵をとりに下らせる。

3月20日(強風のち吹雪) 天気図に台湾坊主があらわれたのでCI建設を見合わせ。台湾坊主による遭難は数多いことでもあるし、真砂尾根はかなり困難なナイフリッジであり、しかも帰途は登りになることを考えて、真砂岳頂上、東面に雪洞を掘りCI用荷物をデポする。6.40 乗越、7.50~10.10 デポ地、10.50 乗越。雪洞を掘ってデポするというやり方はよくなかった。埋るおそれがあるのだ。幸い今度の場合は埋まらなかったが。尚、午前中に立花、森、木村下山す。12.40 吹雪の中を丸尾が共同装備の缶とともに上ってきた。五百蔵は帰阪を求める電報のため下山した。

3月21日(風雪) 停滞。計画はすでに四日もおくらせている。今日から全員で11名。

3月22日(快晴) CII、CIII用荷物をもって全員でBH乗越小屋を出発、5.50、アイゼンをつけて、わかんは使用せず。デポ地7.10~8.10 CI用と入れかえる。村井、広瀬がしっかりしたトレースをつけるため先行する。鋭いナイフリッジ、急斜面のトラバースをくりかえす。雪庇はすべて内蔵助谷側にかなり大きく出ている。進むにつれて、八ツ峰と急峻につきあげているその一峰東面の巨きな三角形の相貌があきらかになる。13.50 CI建設地につく。約2240mの地点。真砂沢側の斜面の上部には11人用の雪洞を掘る。ここまでに要したフィックスザイルは250mに及ぶ。村井、広瀬、佐藤はハシゴ段乗越の手前まで偵察に行く。やはり三稜か四稜どちらかといえば三稜が登れそうだと思う。四稜の北側を見るためには黒部別山まで行く必要がある。三稜のまん中より少し下にはテントの張れそうな白い台地が見え、まん中より上は凹凸のない斜面が白熊の背中のようなようだ。

3月23日(晴) 村井、広瀬は偵察。黒部別山より一峰東面をスケッチ。三稜と二稜をマークし、真砂尾根より剣沢への下降ルートとテント地を見つけてくる。ハシゴ谷の西側の尾根を下り、その末端の台地がテント地、しかもそれは三稜と剣沢をへだてて対峙している場所だ。他の9名は7.20 CI発、デポ地9.10~10.20、CI着12.45。これで荷物も人間もすべてCIに揃う。うまくいきそうだ。われわれは希望にもえた。雪の状態も良好。

3月24日（風雪） 停滞。前線のため、前線通過後の気圧の谷のせいで結局一日降った。

3月25日（晴のち曇） 6.07C I 発。真砂尾根を下り、ハシゴ谷西側の尾根を下る。クラストの上に50cm ぐらい雪がついてあるきにくい。（ワカン）。

8.40 C II。この日のうちに一峰東面を偵察する予定だったがだめだ。三の沢を上って三稜にとりつくことになるのだが、沢は雪崩つづけている。一峰東面の沢にも、別山尾根につきあげている沢にもたえまなく雪がおちている。表層雪崩である。C IIには村井、広瀬、谷垣、白井が入る。他は11.45 C II 発、14.10 C I 着。

3月26日・27日（ともに風雪） 停滞、文字通りのドカ雪、雪洞の雪かきがしんどい。3mも深くなり、結局通路は5m ぐらいになってしまう。真砂沢から強風とともに雪がまいあがってくる。C IIのテントは雪にうずもれ雪かきのためねむるひまさえない。

3月28日（晴のち曇） 朝、快晴、気よくしてC I 出発 6.20、深いラッセル。C IIは夜中の雪かきのためみんなねぼけ面。雪崩の危険のため偵察は不可能。今日も又、一峰の真下で一峰とにらめっこするばかり。タバコもきれた。

3月29日（曇） C I 7.30 発、くもり空。時折吹雪が襲う。9時すぎC IIにつく。下る途中、雪がブロックになって落ちることを知った。直径10cm たらすの雪の球がころがるうちにみるみる直径1m 以上の円盤になるのだ。こういうスノーボールにあたったらしまいだと思うが、一方スノーボールのできる時は大きな雪崩の心配はない。C IIに書きおきがある。広瀬の字だ「佐藤君へ、3/29 5.00 出発。悪天のため引き返す、8.30 再出発。アヤシイ天気だが一応村井、白井は三稜、ヒロセ、谷垣はマイナー（二稜）をトレースする。明日アタック態勢に入ってはいかがかね。小窓尾根で横浜市大がやったらしい、初心忘るべからず、ゼアミ」。

三稜については、村井の記録にしたがって書く。

剣沢と出合から約30分三ノ沢を登る。このあたりの傾斜約30度、そこから三稜にくい込んでいる沢（傾斜約25度）に入る。この沢はスベリ台の科尔につきあげているルンゼに通じている。腰までのラッセル、落ちてくる雪のブロックを身をもってさけながら登る。表層雪崩はたえまない。出合から100m。ここから(A) 90° まがってスベリ台の科尔へのクロワールに入る。

クロワールは約60m 続く。雪崩道のため(Bsc) 底がつるつるにみがかれている。音もなくブロックがすべっている様は不気味だ。C 附近に数本の岳樺。科尔からスベ

り台のピークまではブッシュを手がかりに直登 20m 1 ピッチ。ここから鋭くきりたったナイフリッジのピークがつづく。三の沢は垂直に切れている。四の沢側は 40~50 度。雪庇は三ノ沢側に出ている。リッジの上部は雪面、下部は岩稜、となり幅約 50cm、スベリ台のピークから 6 ピッチで第二のピークと次のクロワールとのコルに出る。そこには間口 5m 奥行 20m ぐらいの岩穴があり、ビバークに好適だ。十三時引返す。約束の時間なのでつづくクロワールが登攀可能と見定めてからこのコルから四ノ沢へ下る。かなり容易に下れる。

二稜について

マイナーピーク東面の岩壁はびょうぶのようにおれまがりながら、きりたったまま三の沢側へおりている。その岩壁の下方にぐい入っている雪の沢、そこを登って岩壁の上へ出ようと試みたが、実は岩壁の上はナイフリッジ。しかもブッシュがありその上に雪がのっている。おちこんだらブッシュの下はがらんどろではいあがれない。

14 時すぎまで小さな雪崩がおちつづけた。16 時半両パーティ前後して CII へ帰る。この間、西垣、三沢、梶本は黒部別山へ登る。他は CII で広瀬、村井らの行動を見ていた。偵察の結果、二稜は放棄した。三稜から登れることは確定的だと思われた。村井、白井の到達点からクロワールを登れば白い台地。次いで小さなピークを二つ越せば凹凸のない白い斜面に出る。そこは登れるだろう。あとはピーク（三の沢の頂上）直下の急斜だが、それも見たところ越せそうだ。

しかし三稜は登路といったなまやさしいものではなく、あきらかに登攀の対象だった。だから当初の予定にしたがって焦点を一峰のみにしぼることにした。それにもと通りの計画を遂行するにはメンバーも減っていたし日数も満足でなかった。

3 月 30 日（曇のち雨） CI を撤収して CI の食料とともに全員 CII に入った。CII では村井、広瀬、谷垣、白井が三稜に向ったが、雨のため引返した。

3 月 31 日（雨） 全員 2 時起床の予定だったが 1 時にはみなおきていた。一晩ねむれなかった者もいる。雨と風のためにテントはゆるみ、雨もりで殆んど全員のシュラフがずぶぬれになった。テトロンテントの 5 人はまったくぬれてしまった。尚、雨はふりつづいている。雪がとけて、向いの一方からはしばしば大砲のような音がきこえ、雪がおちつづけている。テントはあたりの雪面より 40~60cm も高くとまっている。もちろんアタックは出せない。食料は 4 月 3 日までしかない。翌日行動出来るようなら、丸尾、錦田、三沢、梶本、浜田は村井、西垣とともに乗越へ帰ってもらうことにする。残りの、佐藤、広瀬、谷垣、白井で一峰をアタックすることにする。食料を C

IIに長くのこすためだ。とにかく一峰のピークを踏むために四の沢から上って岩穴へ行くルートをとることにする。

4月1日（雨、一時曇のち風雪） 一時起床

三時にアタック出発の予定だ。だが、少しこまかくなかったがやはり雨だ。もういくらぬれても同じだがねむれないのが困る。たとえばテロンテントにいた西垣は一晩中シュラフをしぼっていた。他もだいたい同様のありさま。帰る方のメンバーは事実弱体だ。村井と西垣で支えられるかどうか。それにねていない。帰りのルートは登りである上に三年がトップになってラッセルしなければならない個所が多い。雪はぶすぶすにくさってラッセルがひどいし、一峰からは大きな雪崩がおちている。白く輝いていた一峰も、今や陰惨で黒々としている。今までの例で晴れていても雪崩待ちに一日つぶさなければならぬことが多いと思われる。もはや、アタックよりも全員無事につれてかえる方が問題だ。……と思われた。食料は三日迄だから、二日に撤収しなければならない。アタックメンバーだけになればひきのぼすこともできる。しかし、アタック4人だけ残すのは撤収する方も心配だし、アタックメンバーの方は撤収パーティが心配だった。6時になっても天気が悪ければ、7時になっても、8時になっても、……と少しづつひきのぼしたが遂に8時、アタックを断念せざるを得なかった。一峰まではどんなに少く見積っても8時間はかかる。8時までに出発できなければ致し方なかった。

10時ごろ、晴れ間がみえた、撤収の準備を始めた。何故なら、天気図は天気は快方にむかうことを示していたから。13時CIIをあとにする。風雪になってくる。深いラッセルの為真砂尾根上に出たのがすでに17.30、CIの雪洞に泊る。シュラフが凍っているのでバーナーで暖をとりながら坐っていた。

4月2日（快晴） 一峰とその東面は再び白銀に鎧われていた。風もなく一片の雲もなかった。だが、東側の雪は予想通り不安定だった。8時CI出発。真砂岳頂上14.00、17時すぎ、地獄谷へ帰着。

失敗の原因

1. 天候が悪かったこと。たとえば、最後の一週間のうちCIIが行動できたのはたった一日であった。
2. メンバーの不足。もともと不足気味だったうえに尚、減ったこと。

3. 雪崩、一峰東面が急傾斜であるため、降雪の翌日は天気の如何に拘らず行動できなかったこと。風は西から東へ吹く、そのため西面の雪はかなり堅いが当面は不安定であることが多い。
4. 弥陀ヶ原のボッカを軽く考えていたこと。

計画では三日で乗越へ荷物とともに全員が入る予定だったが五日かかっていること。
5. 今まで、新人を主にボッカにつかっただけで帰らせたが、こんどはしまいまでつれていったこと。そのため計画の終りの方で人数がだぶつき、いたずらに食料を減らしたこと。
6. 雨、テントの雨に対する無防備性。シュラフがびしょぬれになり、ねることもできなかった。春山の雨とテントについて、次の山行までに考えなければならない問題である。

テロンテントは雨を殆んどそのまま素通りする。ビニロンはいくぶんましたが余りかわらない。
7. 悪天候、弥陀ヶ原ボッカの誤算等により計画におくれがちであったこと。
8. 偵察と登頂、この二つの課題があったが、それは我々には少し負担でありすぎた。

(後 記)

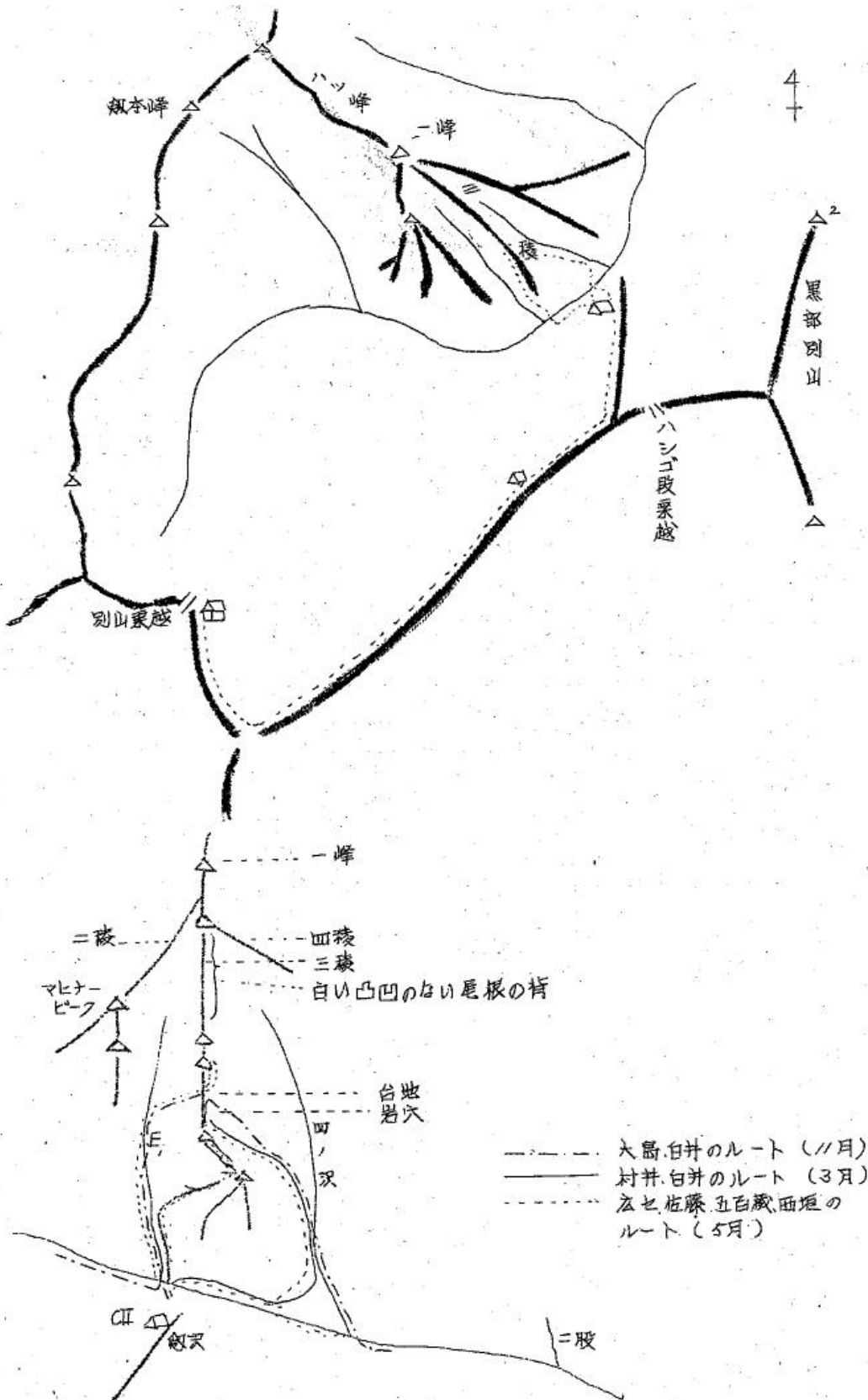
われわれは五月初旬にもここを訪れた。メンバー、佐藤、広瀬、五百蔵、西垣。劔沢を下り、かつてのCII建設地をベースにして、四の沢から三稜の岩穴へのルート(春の村井、白井の下降ルート)をとり、クロワールから白い台地へ出た。そこはテントを張るだけの広さはどうやらある。そこから上は急峻なナイフリッジ。ところどころ雪がはげおち岩稜やブッシュが露出しているが、岩稜は文字通りナイフで頂稜の幅はまったくない。結局、台地から6ピッチに5時間を費し、雪崩待ちとビバークの末引返した。今後、ここを狙うには、やはり雪の多い三月、四月初旬、そして好天の比較的好くつづく四月はじめがもっとも適しているだろう。

われわれが真砂尾根をつかったのは、劔沢の雪崩を恐れたこと、一峰を偵察することのためだが、この経路は余りにもしんどすぎる。夜間にでも一挙に劔沢を下ってしまう適当な手段を考えなければならない。

行 動 表

	美 女 平	原 山 が	天 狗 平	世 家 谷	B H	C I	C II
15	⊙→⊗	→ 13					
16	⊗	→ 2					本根宿へ入
17	○	→ 11 2 2					
18	⊙	→ 12 3					
19	○	→ 10 3 2					
20	⊙ ⊗	← 3 下山	→ 1	← 11 水			立花、森、木村下山 五百旗下山 / 真砂岳上にシメテ
21	⊗	停滞					
22	○				→ 11		
23	①			← 木 世 ?	← 2		
24	⊗	停滞					
25	① ⊙					← 7 → 4	
26	⊗	停滞					
27	⊗	停滞					
28	○→⊙					← 7 4	
29	⊙					← 7 ← 2 ← 2	村井、白井、三橋へ 石比、谷理、三橋へ
30	⊙→●					← 7 ← 4	
31	●						
1	⊗					← 11	
2	○					← 11	

三稜について云えば、もし雪質がよく雪崩の心配がなければ、例の台地にテントをあげる事も可能であるし、一峯のピークへの、さらにそれを通ってのハツ峰へのアタックも可能であると思う。結局、問題は天候の、ひいては雪質のよい時期を把むことにあると思われる。





《ハシゴ段乗越上部からのスケッチ》

2 食料報告

全般的に見て今回の食料計画で留意した点は献立に変化をつけたことと、行動食、停滞食の区別を作らなかった事である。

献立に変化つけるといってもむろん重量及び費用の点に制限があるが、特に長期間山に入っている場合、食料の影響は種々な面で非常に大きいため、この点に特に注意

をはらった。停滞食は行動食よりも少くともよいという見方もある様だが、次の日の行動にそなえるという意味からは区別はなくても良いものと考えた。又いたずらに食料計算がややこしくなるということもあり、食い延しなどの必要が生じた時原地で適当に行えば良いと思う。

以下今回の食料の各点について記す。

重量 今回はポーラーシステムであり、ボッカも二回行うことが定まっていたので重量にのみ特に注意をはらうことはなかった。

秋のボッカでBHに約100kgの荷上げを行った。春には220kg荷上げし総重量は約320kgである。又一人一日当りの食料の量は1.3kgである。この重量は梱包重量を含めてのものであり、まずまず満足すべきものといえよう。

費用

一部のものを除いて入山日数が同じであったため、入山日数に従って食料費を集めた一日一人当りの食費は160円となった。

献立

前に述べた様に食料に変化をつけるため朝昼晩共三通りの献立をした。しかしあまり変化をつけすぎると食料計算が複雑になり、無駄も生じやすいので注意すべきである。味を良くするため、鯨のてんぷら及び乾燥野菜を自家製で作った。鯨のてんぷらは100gの切身をしょうが味醂等を加えた醤油に一日間つけこもをつけててんぷらにしたものである。これは比較的長期間保存することもできるので便利である。合宿では前期に鯨を用い後期にはコンミート、カンヅメを用いる様にした。乾燥野菜は大根の葉及びほうれん草をゆでて影干しにしたものである。今回は一人で作ったため少量しかできずABC以上とした。

乾燥野菜は原料が多くても出来上がったものは非常に少量となってしまうため食料係以外の人たちにも分担して作ってもらえれば良いと思う。特に重量が大切な場合は全面的に採用して効果のあるものと思われる。

次に具体的に朝昼晩について書く。

朝食、中華ソバ、自家製ビスケット(5枚入り)、クラッカーを用いた。クラッカーは1/2の予定であったがこれは不足で2/3を必要とした。ビスケットは昼食についても共通のことだが、なるほどクラッカーに比べてうまいし又体積も小さいが、乾パンに比べると値段が二倍もし又これだけでは食べにくく副食を必要とするので値段を考えた場合非常に不利である。しかし味、値段をもう少し考えたなら十分使えるだろう。

朝食は調理を早くすませることが出来る様モチは用いなかった。費用の面でメザシは全廃した。今回はこれについて格別の文句も出なかった様だ。カルシウムの補給にはスキムミルクで足るし、蛋白質の点では鯨等で行うことができる。しかし食事の後でメザシをしゃぶるのが何ともいえぬという人がある様なので、時に応じて考えれば良いだろう。

昼食、従来のウイナロールを廃して、ビスケット、乾パン、クラッカーを主食に用いた。乾パンは 1/2 袋で十分だし値段も安くポケット等に入れ簡単に食べることができるので便利である。しかしこれだけを用いているとあきるので三種の主将を用意した。三種とも副食は同じにしたのでビスケットの時がいちばんうまかった。マーガリン、魚ソーセージはやはり不評であったが、栄養値段の点からこれに代わるものがないので、できるだけ全部食べる様にしてほしい。夏みかんは重くかさばるので不利であるが皆の希望もあり、一部採用した。春は特に水分が不足がちなのでやむを得ないだろう。ジャム、ピーナツクリーム等はなるべく味の良いものを用い、主食を食べやすい様にした。

夕食、主食には調理が比較的簡単で食べごたえのあることからモチを用いた。水を作ることが困難な春にはモチをもちいるしかしかたがなく米に比べて割高についた。調味料にはカレー、ハヤシ、ポタージュを用いた。カレーは今までと異なり固型のものを用いた。これはかさが低く、そのままけずって湯に入れれば良く又味もよいことが秋のボッカの時に使用して分っていたためである。しかしおなじ固型でもハヤシの方は味が数段劣る様だ。これを用いたのは失敗だった。

その他、献立以外に切りコブ、メリケン粉などを持っていった。切りコブは塩を加えてコブ茶にするとけっこううまいのができた。又一時的にせよ満足感を得ることができ好評だった。メリケン粉はカレーをこくする目的で持って行ったのだがその必要はなく停滞の日にホットケーキにしたいくつをまぎらしていた様だ。

アタック食 今回のアタックにはテントを持って行けないので調理ができず、すぐ食べることができるものを用意した。又アタック食の性質上軽くすることに留意し梱包をもふくめて一人一日 1kg とした。又梱包はすべて二人分としポリエチレンの袋に一食分をまとめて入れた。又特にサラミソーセージを用いて味及び栄養の改善につとめたが高価なので多量に使用する分にはいかなかった。今度の春山の計画自体が失敗に終りアタック食は使用されなかったものでこれについての良否の判断を下すことができないのは残念である。

アタック食（一人一日）

(朝)	クラッカー	1/2	(昼)	カンパン	1/2	(晩)	クラッカー	1
	ビスケット	20g		ビスケット	30g		ビスケット	30g
	バター	1/4		チョコレート			コンビーフ	1/2
	コンビーフ	1/2		アメ	2ケ		チーズ	1/2
	ジャム	1/2		ココア（朝用意）			サラミソーセージ	少々
	サラミソーセージ	少々		バター	1/4		ジャム	1/2
	ココア			ジャム	1/2		ココア	
	レーズン			レーズン			バター	1/4
				ソーセージ	1/2			

	A		B		C	
	中華ソバ	1/2	ビスケット	5枚	クラッカー	1/2
	コンソメ	1/15	ミソ	20g	ミソ	20g
	食用マーガリン		食用マーガリン		食用マーガリン	
	玉ねぎ	1/8	玉ねぎ	1/8	玉ねぎ	1/8
	切干		切干		切干	
	〔鯨		〔鯨		〔鯨	
	〔コンビーフ	1/4	〔コンビーフ	1/4	〔コンビーフ	1/4
	〔カンヅメ	1/5	〔カンヅメ	1/5	〔カンヅメ	1/5
	(12日)		(5日)		(7日)	
	ビスケット	7枚	乾パン	1/2	クラッカー	2/3
	マーガリン	1/5	マーガリン	1/5	マーガリン	1/5
	ソーセージ	1/3	ソーセージ	1/3	ソーセージ	1/3
	ジャム	1/3	ジャム	1/3	ジャム	1/3
	〔レーズン		〔レーズン		〔レーズン	
	〔夏みかん		〔夏みかん		〔夏みかん	
	(8日)		(8日)		(8日)	
	モチ	300g	モチ	300g	モチ	300g
	カレー	1/5	ポタージュ	1/6	ハヤシ	1/5
	食用マーガリン		食用マーガリン		食用マーガリン	
	玉ねぎ	1/8	玉ねぎ	1/8	玉ねぎ	1/8
	切干		切干		切干	
	〔鯨		〔鯨		〔鯨	
	〔コンビーフ	1/4	〔コンビーフ	1/4	〔コンビーフ	1/4
	〔カンヅメ	1/5	〔カンヅメ	1/5	〔カンヅメ	1/5

注意 { 印をつけたものは、そのうちいずれか一つ ABC 以上では玉ねぎの代わりに乾燥野菜、以上の外に、スキムミルク、紅茶、コブ等を用いた。

	全体量	ボッカ	BH	MC	ABC	AC	Attack
モチ	100kg	13kg	30kg	35kg	15kg	7kg	—
中華ソバ	64 個	7	28	30	13	6	—
クラッカー	139 個	13	41	45	19	13	8
カンパン	64 袋	14	13	20	9	4	4
ビスケット(普)	1124 枚	—	53×7 32×5	44×7 23×5	19×7 11×5	9×7 4×5	—
ビスケット(上)	520g	—	—	—	—	—	520g
コンミート	112 個	6	37	39	10	4	6
ソーセージ	116 本	15	36	36	17	7	4
カンヅメ	20 個	7	—	—	9	4	—
鯨	6kg	600g	2000g	2100g	900g	400g	—
コンソメ	11 本	1	3	4	2	1	—
カレー	20 個	2	7	7	3	1	—
ハヤシ	20 個	3	6	7	3	1	—
ポタージュ	20 箱	2	6	7	3	2	—
ミソ	10 袋	1	3	3	2	1	—
マーガリン	45 箱	6	13	14	6.5	3	2.5
ジャム	118 袋	14	36	38	17	7	6
食用マーガリン	16 箱	2	4	5	3	2	—
スキムミルク	5 箱	1	1	1	1	1	—
玉ねぎ	84 個	9	27	30	12	6	—
切干	4kg	300g	1500g	1500g	500g	200g	—
乾燥野菜	500g	—	—	—	350g	150g	—
ワカメ	7 袋	1	2	2	1	1	—
チーズ	3 個	—	—	—	—	—	3
塩	3 袋	0	1	1	1/2	1/2	—
コショウ	3 ビン	0	1	1	1/2	1/2	—
砂糖	16 袋	2	4	5	3	2	—
メリケン粉	4 本	—	1	1	1	1	—
茶	5 本	1	1	2	0.5	0.5	—
乾ブドウ	700g	200g	200g	200g	100g	100g	適量
夏みかん	35 個	5	12	11	5	2	—
アメ	16 個	—	—	—	—	—	16 個
ココア	1 袋	—	—	—	—	—	1 袋
紅茶	7 箱	1	2	2	1	1	—

3 装 備 報 告

装備の報告についてまず第一に書かねばならない事は装備の缶が BH に上っていなかった事であろう。結果としては気がついた時すぐ取りにもどり天狗の小屋のあったのでそのまま計画を続行出来たのであるがこれは明らかに装備係のミスであった。これは梱包の缶には表面に何も表示してなかった事等がこの原因としてあげられる。やはり食料の缶のように内容物、重量その他が一目でわかるように明示しておくべきで

あった。(装備の缶は少ないのでよもや運び忘れるという事はないだろうと思っていたのがまちがいの因であった。)

今後装備係をやる人はこの経験をいかして絶体にこのような事のないようにしてもらいたいと思う。

次に雪洞の入口についてだが入口にグランドシートの古いのを使ったのだが2、3日たつともう入口が2m近くもつまり出ることについても相当体力を消耗するようであるがこの点も大いに研究する余地があると思われる。

テントは二張もっていったがテロンテントの方は雨が降ると直接もるようだし又雪が強く降るとこれも中まで入ってくるような有様で使いものにならなかった。このため合宿のおわりごろになるとこのテントに入ったものは全員がシュラフがびしょぬれになってしまい徹夜でシュラフを乾すという始末であった。これが全員のファイトをすくなくならず消失させた事は明らかである。

また雨が降ってテントの中が水びたしになった場合底をすこし破って水を雪に吸い取らしたのだがこれはやはり感心出来ない事だと思う。テントの底のゴミ取りの穴を最初から真中のあたりに作っておくと水の入った場合テントを破る必要はないと思われる。それから春山は雨が降ると言う時特に今度の合宿の場合のように比較的低地にテントをはり生活をする場合雨に対しての処置を考えてシュラフカバーを完全防水とするとかビニールシートを出来るだけ多くもっていかして合宿にのぞむべきであると思う。

その他ケロシンは4立缶を用いたがこれを運ぶ場合必ずもれてザックとか他のものが油でぬれるのであるがこれがもらいなくふうはないものか。

また、テルモスが一つ使えなくなったのだがテルモスだけは別にして一人が注意して運ぶようにするとよいと思う。

以上簡単ながら思いつくままに感想を書いたわけだが今後装備係を受けもつ人にとって参考になれば幸いである。

(谷垣)

4 気象報告

三月十五日入山早々、快晴に恵れて美陀ヶ原のボッカを始めた午後天候が急変し、地吹雪の為天狗の小屋へ逃げ込んだ。前日夜又は十五日朝の天気図を確かめていれば少くとも余裕のある行動がとれたであろう。天候に対する不注意、考えの甘さによる一大失敗であった。十六日も前線通過による強風で停滞したが後三日間はフルに行動

出来た。二十日朝台湾坊主の北上を知り、空模様の陰悪さも気の所為か思われる程度であったが思い切って午前中だけの行動に決定。この際の自信ある判断が出来ぬ為、「一日を無駄にしてしまうのではないか」という不安が強かった。中途半端な気象知識は害になると痛感す。後二日間は晴れ、積雪状態も絶好となり気を強くしたが次の四日間の悪天でドカ雪が降り形勢不利となる。次の二日間は晴れたが表相雪崩が激しくアタックは出せないまま、二十九日から気温が上がり、ワッパにも雪団子が出来る程になる。三十日午後より四月一日まで雨が続き、ヴィニロンテント内は濡れとなった為、一日十時晴天を少し見て撤収を執行したが、深いラッセルと降雪の為、MC 跡の雪洞で一夜を明かした。この日は大陸に強い高気圧本州太平洋沿いに前線を持つ低気圧群があって季節風が強いのは当然で、普通の条件下では高度を増して行く行動はとらなかったであろう。

今合宿中で肝心のアタック期である二十四～三十一日の間のみ、春特有の四日間週期が全く崩れ、さらに前線が三日間停滞し、春雨に見舞われたのは余りにも皮肉な気象条件であった。表層雪崩の著しい岩稜を対象とするこの登攀は積雪状態さえ通常であるならば可能であるという自信は得たが、三月下旬より四月上旬までの間で、アタックに必要な最少三日間の晴天に恵まれる可能性をはたしてどの程度期待出来るかと言う疑問が残る。その年の高気圧の動きが、如何なる特徴を持つかを知る為には前々より気象に絶えず留意しなければならないと思う。

5 劔岳東面偵察及び荷上げ

(八峰の末端からのトレース)

期間 11月2日～11月7日

メンバー 大島、村井、谷垣、白井、三沢、峯田

11月2日(曇時々雨) 11.20 立山荘(ホテル)、16.00 天狗小屋

この間各自6～7貫づつ二往復する。17.20 房治

11月3日(曇) 6.35～8.20 房治～天狗間を往復、8.35～14.20 房治～劔御前小屋を往復。これで10人10日分の食料、燃料を荷上げした。

11月4日(雨後晴) 11.45 小屋発、15.40 小屋帰着。真砂岳東尾根の最初の岩峰まで行き、劔沢への下降路と八峰の一峰への取つきを偵察。全員同一行動。

11月5日(晴) 6.00 二隊に分れて出発 7.00、O、S二人は劔沢を下降し、8.00 三の沢をつめたが滝の連続のため左岸の尾根に逃げ四の沢へのコルに出た。(17.00) 気

がつけば日没近く、急いで四の沢を降る。途中から闇中をランプの光をたよりに下ったが滝は凍り始め、非常に時間がかかった。22.00 長次郎出合の岩陰でビヴァーク。平蔵谷出合までの残雪が青氷と化し、クレヴァス多く夜間行動は危険な為小屋に帰るのを断念する。

村井、谷垣等四人は真砂岳東尾根を通り真砂沢出合へ伸びる支尾根を劔沢へ降り、小屋へ帰った。(20.00)

11月6日(晴) 6.00 大島、白井は岩小屋を出発、10.00 小屋帰着、谷垣、峯田は別山尾根を本峰へ頂上へ。村井、三沢は劔沢を下り平蔵谷出合上部で O、S 二人を確認し、本峰へ向った。15.00 全員小屋帰着

11月7日(雪) 房治を經て下山

冬山、春山の偵察と荷上げにメンバーが分散し十分目的を達することが出来なかったが、ハシゴ谷乗越の手前の尾根から劔沢に下り第三尾根に取付くという見通しが立った。しかしトレースしていないこと。連続しているナイフリッチが積雪通れるか否か。一峰東面の雪崩の心配。他にルートがないかどうか、等々未知の点が多く、春山で現場へ来てから再び偵察する事になった。(記 大島)

千丈沢及び槍ヶ岳周辺

一般に夏の合宿地としては剣や穂高が選ばれることが多く、我々も過去3年間、これらの山で合宿していた。けれどもこれらの山の混雑ぶりは年々はなはだしくなり、また新鮮さも乏しくなったので、今年の合宿地はこれ以外の場所を選ぶことになった。いくつかの候補地のうち、豊富な雪渓とあまり人に知られていない、静かな上に変化に富む岩場のある北鎌側稜が合宿地に選ばれた。

北鎌尾根を全般的に見ると、独標以南の千丈沢側には岩登りの対象となる岩場があるが、天井沢側や独標以北には森林が発達していて岩場は殆んど見られない。千丈沢側の岩場を穂高や剣でよく知られている岩場と比較してみると、その最大の特徴は狭く、急な沢が複雑に発達し、数多くの枝沢に分れている為地形が極めて複雑なことである。この点は特に、ここに初めて合宿する我々にとって重要な点で、ある程度の探検的な興味をそそられる点でもあった。またこの附近には殆んど知られていない沢があるが、この中東沢の遡行が篠田先生のアドバイスによって計画の中に組み入れられた。

合宿参加者は以下の通りである。

野田 (CL)、平田 (SL)、佐藤、田井、大工原、森村、田村、村井、大島、西垣、酒井、打出、五百蔵、森田、白井、保母、錦田、谷垣、高橋、宇野、前沢、金子、米沢、丸尾、梶本、三沢、加藤、松井
それに OB として広橋、岡田。

7月13日 先発隊大阪発。田村ら三名は先に千丈沢へ入り偵察とキャンプ地の選定、整備を行う。大工原ら2名は細野で食糧の購入に当る。

7月15日 本隊大阪発

7月16日 快晴 大町→第五発電所、13.00 七倉発、16.30 第五発電所着。

湯俣まで入る予定であったが大町での連絡がスムーズでなかった為七倉への集結が遅れた。懸念していた台風5号は本邦を外れ、好天に恵まれた。

7月17日 快晴 第五→BC 6.30 第五発、9.00 湯俣、17.30 BC 着。

高瀬入のルートは起伏の少ない楽なルートであるが、非常に時間を要し、六の沢出合より少し上流の右岸のキャンプ地に入る。場所は狭いが仲々良いキャンプである。

7月18日 曇時々小雨

沢の概略を知るために偵察、いずれの沢も急なゴルジュをなしているが、六の沢は幅も広く、傾斜や雪量は新人の雪渓技術訓練に最適であり北鎌尾根からの下山ルートとしても、大槍を越えるわずらわしさを避け得る唯一のルートである。五の沢は岩場の中核部にいくつもの枝沢を広げた錯綜した谷で、主要なリッチへは殆んどこの沢から取付くことになる。

(ここの地名は慶応大学の呼称と、法政大学のそれの二つがあり、我々は尾根については慶応の、沢については法政の呼称を使っているが、非常に不便である。全般的な名称の統一が必要であろう)

7月19日→26日

この期間の定着合宿中の登はん対象は、A稜、B稜、C稜、D稜、C稜ツルム、六の沢左方の小尾根、小槍、硫黄岳、中東沢などであり、天候のはっきりしない日には双六岳、西岳、南岳方面へ歩いた。北鎌側面の各稜は最近の「岳人」などにくわしいので時間記録の一例に補足的説明を加えるに止める。

最もアプローチの短いのがC稜ツルムである。正面の高度差は150m程度であるが草付と硬い岩のミックスした非常な急傾斜で腕力登攀を強いられる。中程に45°程の広い斜面がありこの上に見事な凹角がある。私の記録では11ピッチ、5時間。また正面左方にまっすぐつき上ったクラックがあり、広橋、酒井が21日に登った。恐らく初登はんである。

A稜は最終の2ピッチが非常なナイフリッジである。そこに至る3~4ピッチは楽しいフェースである。

C稜は上半部はコンティニューアスでも登れる容易な尾根であるが、取付きは各パーティまちまちである。

D稜は最もスケールが大きく、アプローチも最長である。大きく三段に分れていて取付きに洞穴があり、冬期にビバークした記録を入れた瓶がある。取付きより4時間、8~10ピッチ。取付以前から相当手応えがある。

硫黄岳、赤岳は北鎌尾根千丈沢側の展望台として最も優れているが、岩が極めてもろく、登はんには決適さを求むべきもない。いずれも涸れた沢をつめて稜線へ出るが、ここの地形もよく知られていない。赤岳→硫黄岳の縦走はあまりにも岩がもろく、危険である。

中東沢へは村井、白井らが試登したが相憎の降雨による増水で目的を達し得なかった。

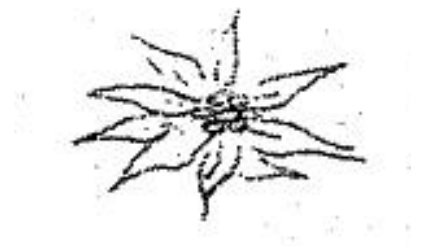
なお、合宿中の天候は 18、22、23、24 日が雨又は曇一時雨であった以外は、絶好の晴天で相当の行動が出来、一昨年、昨年と恵まれなかった夏山合宿も久し振りに相当の収穫があったと云えよう。

7月27日 快晴 BC→湯俣（解散）

撤収を行い、湯俣で各縦走隊毎に別行動。後立山パーティは濁へ、他は湯俣にキャンプ。第五発電所に預けた縦走用荷物を荷上げする。酒井は飛驒乗越経由で帰阪、村井は双六小屋へ向う。

以上の様な経過で夏山定着合宿を終えたが天候も良好で、各部員の熱意も相当に発揮され、北鎌尾根を選んだ目的にもほぼかなった成果が得られたことと思う。唯一の痛恨事は事後の記録の整理が不十分であったため貴重なスケッチや記録の一部を散いつしてしまったことである。

リーダーとしても残念なことである。記録整理の為に強力な記録集中機関を作るべきであろう。



一般山行報告

槍ヶ岳北鎌尾根

期間 4月29日—5月4日

メンバー 野田、佐藤、大島

4月29日(晴) 9.25 葛温泉発、11.40~12.45 濁沢、13.20~13.30 第五発電所、16.10 湯俣(三角小屋)

葛温泉の桜と高瀬溪谷のコブシが非常に美しかった。

4月30日(晴後曇) 6.20 出発、8.20 千天出合、11.35 北鎌沢出合、11.40~12.30 偵察、13.30 尾根取付、19.30 ビヴァグ地。水俣沢より残雪あり、北鎌沢は雪崩の危険を感じたので、出合より一時間の所で右手の小沢をつめ、日大ルートを経て独標に出ようとしたが尾根の上部は雪のナイフリッジの連続。日も暮れたのでクレバス中でビヴァック。夜半より小雨。寒さのため殆んど眠れず。

5月1日(小雨) 7.10 出発、7.35 引返点、10.05 日大小屋。相変らずの雪のナイフリッジが雨水を含み、足元が不安なのと、クレバスが多いため、安全策を取り小屋へ戻る。全身ずぶむれとなる。

5月2日(快晴) 6.45 出発、9.55~10.55 北鎌沢のコル、14.10 独標基部、15.20 独標頂上ビヴァック。昨日の失敗を顧み、早朝の内に沢をつめる。稜線上では腐れ雪と急傾斜と重いザックに悩む。この間かもしか二頭を見る。独標上、満天の星をながめてのビヴァックはすばらしかった。

5月3日(晴後曇) 8.20 出発、11.20 北鎌平、14.20 槍頂上、17.10 肩の小屋。千丈側はカチカチの堅雪、天丈側は、膝までもぐる腐れ雪という訳で変化があつておもしろい。夏なら20分もかからぬ穂の登降に、腐れ雪と重荷と風雪に悩まされ肩の小屋に飛込んだ時は、既に日が暮れかけていた。

5月4日(曇後晴) 7.45 出発、9.55~11.00 一俣小屋、11.40 横尾、12.40 徳沢園。東鎌尾根を経て燕岳まで縦走する積りであったが、休暇の日数、食料、疲労度などを検当して槍沢を下ることにした。横尾からは夏のごとき騒々しさであった。穂高の残雪、梓川の新緑、雪解け水、そして蛙の営み、やはり五月の上高地であった。とにかく五月の山を満喫した。

(記大島)

五月の内蔵助平

メンバー 兼清、中村、酒井

4月28日 曇のち晴

追分 12.00－雷鳥沢 4.30

4月29日 晴

雷鳥沢 7.10－真砂平 11.50－ハシゴダン出合 12.20－ハシゴダン乗越 3.15－内蔵助平 3.50

真砂平を過ぎる頃から、雪けいが切れる。池ノ平山を後に見て、ハシゴダンに登る。広く明るい沢である。乗越手前で膝までのラッセルを強いられるが、乗越からの展望は素晴らしい。足下に雪の内蔵助平、右に立山東面のカール、左の黒部別山の彼方に黒く光る赤沢を飽かず眺める。

4月30日 晴 停滞

バサッと音を立てて、雪に埋もれていた岳樺が青空におどり出る。枝先に青い小さな新芽がほころんでいた。

5月1日 雨 停滞

5月2日 晴

内蔵助平 7.00－黒部出合 9.00－御前谷出合 12.00～1.00－内蔵助平 6.00

黒部別山の絶壁を左に見て内蔵助沢を下る。ブッシュが方々に出ている。黒部出合から御前谷出合まで、雪の合間に出ている山道をたどりながら進む。御前谷出合附近は丁度第四発電所建設の最中であつた。飯場わきの小径から、御前谷に入る。雪はあらかた消え、雪どけ水が瀧となって流れている。草付と岩の左岸ぞいに進むこと二時間半、右岸へスノーブリッジを渡り雪の急斜面を登り切ると、沢は広くひらけ、内蔵助平の乗越までたんたんとした登りになる。

5月3日 晴

内蔵助平－黒部別山

黒部側に大きな雪びが張り出しているが、なだらかな尾根となっている。剣の展望が素晴らしい。

5月4日 晴

大町ルートを経て下山

なお、立山への尾根をトレースする予定だったが、天候が悪化しそうだったので、後日を期することにした。文献は冠松次郎著「黒部」である。 (酒井記)

赤石岳

メンバー 平田、田村、広瀬、西垣、西川 OB

四月二十九日 (晴) 伊那大島よりバスで大河原へ、シスターボーイの車掌の声に悩まされた。

トラックに便乗して、釜沢へ 12.00、昼食をとって小渋川の右岸ぞいに小渋湯跡まででた。夏はここより渡渉をくり返しながらか河原までゆくんだけど、水量が多くて渡れないので、地図にもある右岸沿いのへつり道をゆく。廃道にちかい道で崖くづれした所ではピッケルでステップを切ったりして進む。薄暗くなって左側より大きな沢のはいってくるのとぶつかった。その岩の上に「板屋谷、上流に岩小屋あり」とかいてある。これ幸いとそこにとまることにする。19.00 着岩小屋は 7、8 人も泊れそうな大きなもので中で火をたきスキヤキをする。

三十日 (曇) 岩小屋 7.00 あいかはらず右岸通し、踏み跡のような道をナタ目をたよりにしたりしながら進む。高山沢をすぎキタ沢の手前で川の水量も少なくなったので河原へおりる。

ももまでのしびれる程冷い渡渉を二回して 16.00 やっとか河原の小屋へ着いた。釜沢から夏なら五～六時間のところ二日もかかった。

五月一日 (雨後曇) 停滞

二日 (晴) 5.00 発初め夏道どおりにゆく、森林限界のあたりよりアイゼンをつけ、夏道は大聖寺平へトラバース気味に着いているがそのまま小赤石への尾根を直登する。頂上 11.30 頂上のやぐらは半分雪にうまり小赤石は東側に雪庇がでていた。くさった雪の中を百間洞山ノ家へ、山ノ家は大沢岳からの尾根の末端より 50 米ほど登ったところにあり少しわかりにくい。一七、〇〇

三日 (晴) 山の家 5.00 発大沢のコルより、大沢渡へ下る 11.00、軌道にのせてもらうことにしたがなかなか来ず、その上北又渡までしかゆかなかった。北又より最終バスに間に合うよう急いだが少しのことで間に合はず、その夜は木沢村の前天館にとまった。

立山・劔

期間 4月28日～5月5日

メンバー 大工原、前沢、保母、錦田、白井、丸尾

4月28日 20.10 大阪発

4月29日（晴時々曇） 美女平から上ノ小平までバス。上ノ小平からの荷物は雪上車に託しスキーのみかついで歩く。11.50 ホテル着、12.30 ホテル発、スキーもかつぎ12貫の荷にあえいだ。途中で昼食、天狗付近でほとんどバテかけ、あとはフラフラと18.45 房治にたどり着く。今年は雪が多いとかで、まだ水はなく雪をとかしていた。

20.00 夕食

4月30日（曇） 立山の東面を見に行く。9.05 房治発 10.50 一ノ越着、ここにスキーをデポし、アイゼンをつける。御山谷の斜面をトラバースし、タンボ沢の頭の上って立山東面を見る。各尾根は岩峯が連っており、沢は雪崩のあとが著しい。稜線から大きな雪庇が当面に出ている。沢の傾斜はアイゼンをきかせれば、登れそうである。

15.00 一ノ越着、ここからスキーで房治に帰る。18.00 夕食、22.30 寝る

5月1日（雨、風強し） 停滞

5月2日（快晴） 4.40 起床。オートミールを作ったので、朝食に時間がかからない。6.25 房治発。7.30 御前乗越着。ここでアイゼンをつける。斜面をトラバースして直接黒百合のコルに出る。9.35 前劔。平蔵コルの手前で、昼食。10.50 平蔵コル、カニの横バイは完全に鎖が出ている。11.25 劔頂上着、すばらしい眺めをたのしむ。12.00 頂上発。カニの横バイで大分待たされた。割に調子よくいったので一服劔で50分程一服。15.50 御前着。楽しみにしていた雷鳥のグリセードは、雪がくさって出来ず、残念だった。17.00 房治着

5月3日（快晴） 4.00 起床、7.30 出発、真砂と大汝の間の、小さなピークから出る尾根を登る。9.00 ピーク着、ここでアイゼンをつける。稜線はさすがに寒く、アイゼンが快適にきく。10.00 大汝頂上。頂上附近は岩の上に薄氷が張っている。10.30 雄山神社、寒いのでお参りもそこそこに、山崎カールの南側の尾根をかけ降る。途中で昼食。下るにつれて暑くなる。12.45 房治着、スキーをする。

5月4日（曇、小雨、下界は雨） 6.15 起床。パッキングをし、残った食糧を買ってもらおう。10.00 房治発。天狗まではスキーをかついで行く。11.00 天狗でスキーをつけ出発、11.50 ホテル着、昼食。13.10 ホテル発ここからは、ストックで押さぬと、すべ

らない。14.50 上ノ小平着。ここからバスで下山。富山で一杯のみ、夜行で帰阪

(大工原)

中尾峠 —— 徳本峠

メンバー 打出、佐藤 (T)

五月二十九日 (晴) 夜行と長時間バスにゆられたので、二人共調子が出ず、中尾峠についたのは四時すぎで、峠付近には雪が残っており、水には不自由しなかった。

槍見温泉 (12.45) - 中尾峠 (4.10)

五月三十日 (晴後曇)

焼の小屋より西穂山荘に行く道がはっきりせず、相当時間がかかった。天気があやしくなったので、西穂へ行くのをあきらめ、独標より引返した。西穂山荘の前でグリセードの練習をしていた明大ワンダーホゲルの連中が部員の一人が足の骨折で騒いでいた。明神館についたのは四時頃、そこからからみで徳沢を往復した。その晩は明神館でとまる。

焼の小屋 (7.00) - 西穂山荘 (11.00) - 独標 (1.00) - 明神館 (3.50)

五月三十一日 (晴)

前夜上高地からバスで帰るか、徳本峠を越えて、島々に出るか大いにもめたが、天気がすばらしく良いので峠をこえることにした。峠の上で一休みしていると日大のパーティが新人訓練のため、二三人ほど登ってくるのに出合った。一、二年は十貫ほどの荷をかつぎ、三年はからみであった。涸沢にでも入るのだろう。岩魚留まで快調にとぼした。小屋には人がおらず、食べ残した食糧を飢えた人の為に残していく。二股の取入口より単調な軌道上を島々に向ってとぼす。夏にくる所ではないと思いながら。

明神館 (7.30) - 徳本峠 (9.10) - 岩魚留 (10.30) - 二股 (1.10) - 島々 (3.20)

今回の山行は二人でのんびりとした峠越を目的にしたので目的は達せられたと思う。五月の終りから六月の初めにかけて天気が良いということがわかった。連休をさけたので、人もあまりおらず、上高地の緑を楽しむにはもってこいの時期だった。

小豆島・拇岳

メンバー 金子、五百歳

期 間 6月1日

記 録

坂出着 4.00—(半泊)—同発(8.00)—^{バス}橘着 8.35—取付着 9.35—登はん開始 10.00—
昼食 12.40~14.00—拇岳頂上登はん終了 14.42—^{徒歩}頂上発 15.17—取付 16.10—同発
19.05—坂出 21.15

岩は概して大まか、第二ピッチの釣り上げ気味にトラバースする所と、第三ピッチのトラバースがちょっと緊張する程度で、楽な岩場だ。バリエーションを選べば別。景色もよく、明るい岩で、観光をかねて行くには絶好。観光シーズンに土曜から行くと、行きの船では眠れないからご注意。 (五百蔵記)

愛 知 川

メンバー 兼清、酒井

6月15日(晴)

²⁰⁰大阪—^{バス100}八日市—¹³⁰黄和田口—折戸峠 発電所に泊る。

6月16日(晴)

⁰¹⁰折戸峠—¹⁴⁰ダム—⁰¹⁰白滝谷出合—¹⁰⁰天狗滝—¹³⁰広沢出合—³⁰⁰上水晶谷出合—¹³⁰国見峠—湯ノ山

初夏の土曜、日曜を利用して、新緑の溪谷をわらじばきでバシャバシャ歩くのは楽しい。更に日が許せば御在所の岩場にもいける。

文献 続近畿の山 山と溪谷社 (酒井記)

雲ノ平—劔縦走

メンバー 西垣、五百蔵、森田、白井、金子、三沢、松井、加藤

7月27日 合宿を終わって全員湯股へ集った。縦走の荷が重すぎる。後で食いのぼしをしてもよいからということにして腹いっぱい食料をつめこむ。合宿のつかれもあるし、これから出発するのだから栄養をとることも必要だろう。

7月28日(晴) 7.40 湯股発、11.00 ワリモ沢出合、18.15 三俣レンゲ。レンゲの登りは中々のアルバイト。

7月29日(晴) 9.30 発、11.30 雲の平スイス庭園にテントを張る。西垣と金子は岩魚の釣に祖父沢へ残りは雲の平を散歩する。岩魚は小さいのをやっと三匹つって来た。これを全員で食べたからほんの一切れずつだった。

7月30日(晴) 五百蔵、金子、西垣、三沢は高天ヶ原大東鉦山跡へ、森田、白井、加藤、松井は水晶、赤牛へそれぞれ空身で往復する。

7月31日(晴) 7.30 雲の平発、9.30 薬師沢出合、16.00 太郎兵衛

8月1日 7.20 太郎発、10.00 薬師岳、18.30 越中沢岳。越中沢の頂上には雪がのこり快適なテント場があった。

8月2日 8.10 発、五色 10.00、一の越 15.00。一の越では久しぶりにスカートをはいた人を見て喜んだ。

8月3日(晴) 6.45 発、雄山 7.45、三田平 10.10。劔沢にテントを張り空身で頂上へゆく、頂上 14.00。カニの横ばい附近は登る人おりる人が言い合いをするほどの混雑やむをえず横の岩を登る。下りは平蔵をグリセードでおりた。4.50 テント着。

8月4日(晴) 8.00 発、二股 10.30、池の平 13.30。仙人池附近はテントが張れず池の平がテント指定地になっていた。

8月5日(晴) 5.30 発、アソ原 8.45、上部軌道にうまいこと便乗できたが無蓋車にのせられたためトンネルの中でびしょぬれになりとんだ所ではじめて雨にあった。樺平 10.10 発、富山 14.00 着

烏帽子一針之木一白馬

期間 7月28日～8月4日

メンバー 大島、錦田、丸尾、宇野、梶本

7月27日(晴) 7.30 奥千丈キャンプサイト(合宿地)、11.30 湯股、16.30 濁沢出合

7月28日(晴) 7.30 出発<ブナ立尾根>14.30 にせ烏帽子岳寄りの雪溪横にキャンプ

7月29日(晴) 休養、ある者は黒岳まで、又は野口五郎岳まで往復

7月30日(晴) 6.30 出発、9.30 不動岳、17.00 船窪小屋。縦走中、最悪の日であり全員コッテリのびた。

7月31日(晴) 7.00 出発、14.00 針の木峠、16.00 針之木とスバリ岳のコルにキャンプ。

8月1日(晴) 5.45 出発、8.40 新越、11.25 種池、14.30 冷小屋上方の雪溪横にキャンプ。

8月2日(晴) 5.10 出発、7.05 鹿島南檜頂上、13.40 五竜岳、15.15 五竜小屋昨日より俄然人が増す。

8月3日(晴) 6.05 出発、8.00 唐松小屋ここより空身で白馬往復。

8月4日(晴) 11.00 出発。八方尾根をユルリと下る。

劔本峰から三の窓を廻って池の平

期間 8月16日～8月19日

メンバー 白井他7名

8月16日(曇) 9.35 弥陀ヶ原ホテル出、12.10 地獄谷、5.10 劔山荘(泊)

8月17日(曇後晴) 6.10 劔山荘出、9.40 本峰、2.30 三の窓コル、3.30 出、7.50 小窓三の窓出合、11.30 池の平小屋(泊)

今日は17時間余のアルバイトだった。これはメンバーに慣れない者が居たため本峰から三の窓の間で以外に時間をとったことと8月中期にの雪溪の状態を計算に入れていなかったためと思われる。三の窓の雪溪はアイゼンなしではおりられない状態だった。小窓三の窓出合から池の平までは夜あるいたが合宿後の縦走の時通っていたのでまよわずに池の平についた。

8月18日(雨) 停滞

8月19日(晴) 8.10 池の平出、12.05 阿曾原峠、阿曾原 1.05

東沢－黒部上廊下－平

メンバー 村井(L)、谷垣、保母、酒井(食糧)、高橋(装備)

春の黒部川上廊下横断計画に参加した我々は奥深い溪谷の静寂とした春の姿に接することが出来た。中元のタル沢附近より見る上の黒ビンガの上記、及び上下流方向に望まれるさしせまるが如き兩岸の壁は我々の心に、暗黙の内に夏の上廊下溯行の夢を抱かせた。

7月27日(快晴) (湯股 9.00－三ツ俣 16.00) (双六 7.00－三ツ俣 10.00)

合宿後全員三ツ俣に集結し、溯行に必要なる装備を点検する。テントも支柱グランドシートを省き軽量化を計り、食糧にも心を配った。

7月28日(快晴) (三ツ又 8.00－東沢乗越 11.30－三ノ沢出合 15.30)

慣れぬ地下足袋に此れからの激しい渡渉を感じつつ、雪溪今だ消えやらぬ東沢に足を踏み入れた。水量は例年に見ない程多く、雪溪が残っているのも珍しい。好天に恵まれ、ブトに悩まされるも溯行ははかどる。野口五郎の稜線よりの三ノ沢出合附近にテントを張る。

7月29日（快晴） （三ノ沢 8.00－黒部出合 14.00）

三ノ沢出合に掛小屋を持つ岩魚取り達の収穫を見てから溯行中も岩魚が気になる。谷垣がよどみに乗り上げた岩魚を手づかみにするに及んで皆夕食の材料仕入れに精を出す。古い流木の堆積地を通り越すと濃紺の黒部川上流に出る。川柳おい繁る砂丘にテント地を設ける。紫の瀨、様々な色調の石の大群、周囲を取りまく山塊は緑一色である。その夜の星座の美しかったこと。古くは冠松次郎氏の行の姿を想像しながら岩魚の塩焼きに舌鼓を打ち。

7月30日（出合 8.00－下の黒ビンガ 11.00－引返し点 4時－テント 4.30）

テント地よりすぐに渡渉が始る。前日までの悠長な一日は許されない。左岸通しに躓に行く。下の黒ビンガ手前で行きどまり 20m 程泳いで直下に達するもそれより 50m 程は水量多く前進不可能だ。やむなく右岸に渡り、ヨロイの如き壁を右方に約 2 時間の高巻をする。ビンガを通り越すと完全な廊下だ。廊下の偉容に圧倒されながら左岸のへつりを続けるも口元のタル沢手前にて行きどまり。前進を断念。引き返し河原にテントを張る。数回に及ぶ腰までの時には胸に達する渡渉で全員疲労こんぱいだ。残光を追いトカゲをする。

7月31日（快晴） （テント地 8.00－出合 12.00－平 4.00）

朝光を一身にあび廊下に身を引かれつゝひき返す。今回の計画は十分な準備を経て行なわれたのだが、全員の無経験及び例年にない水量の為不成功に終わった。がワラジで痛めた足を引きずりながら平に向う我々の心に、満足感が宿っていたのは断じて瘦我慢ではなかったはずだ。双六小屋の小池氏の言う三回目の成功説は我々の心の支え、否これからの目標を与えるものであろう。

8月1日（快晴） （平 8.00－針ノ木峠 14.00）

8月2日 下山

（村井記）

黒部源流－東沢

期間 7月29日～8月7日

メンバー 野田、前沢、黒木、高橋

昨年来た時は、もう四、五日遅く、白い綿のような花が一面に咲いていた岩苔平（高天原）は、今年は橙色のユリが花ざかりであった。

昨年と同様美しいと感じた。大抵のところは二度目に来た時は、あまりに期待が大きすぎがっかりするものであるが、ここはそうでなくて嬉しかった。

雲が平を出たのが昼前で途中踏跡を見失ない奥のタル沢ぞいに下ったので、立石の岩小屋についたのは四時頃だった。静かな所で、水量が多かった。

シラフカバーとツェルトだけだったので寒く、よく眠れなかったが、翌日、六時に出発して源流に向った。例年より水量が多いらしく、幾度も高巻をした、必要のないところまで高巻したのかもしれない。一ヶ所だけカンバを切って、丸木橋をかけたところもあった。このため時間を喰い、薬師沢まで五時間程かかった。薬師沢附近は、のんびりした河原であった。薬師沢出合は、雲ヶ平への登り口で、昨年渡渉したところだが、憶えていた程のことはなく、小川のように感じた。赤木沢附近は、聞いていた通り、ゴルジュになっていて、水にうつった緑が美しかった。

祖父沢附近では三人共バテてしまい、祖父平で、誰からともなく座ってしまった。考えてみると、空身とはいえ、朝から今まで（二時半）歩きずめで、寝不足なのだから仕方がない。

祖父沢を少し登ると、体の調子が悪くてテントに残った黒木が、釣の名人振りを発揮して、岩魚を釣っていた。雲ヶ平の祖父岳のふもとのテント場につくころには、地下足袋の足を動かすのが困難なほどバテていた。

その晩は岩魚に舌つつみをうった。

翌々日、東沢を下った。

始め、五郎の池を通りたかったが、遠いので東沢乗越から下った。乗越の少し下は、一面の御花畠で花を踏むのがかわいそうであった。沢につくと、大体右岸に踏跡があり難なく昼ごろ、岩魚釣りの小屋についた。小さな小屋で、中につりざおなどがおいであるのが見えた。暑かったので、そこから二時間程下ったところでテントを張り、黒木が尺以上もある岩魚をつった。

東沢は、期待していた通り、静かで、美しい沢で、針葉樹と、流れと石の具合が何とも云えずよかった。

翌日、思ったより時間がかかり昼ごろ黒部本流に出た。上廊下をのぞく計画であったが、もう山にもたんのうしたので、針ノ木峠を越えて帰ることにした。針の木峠で人の多いのに驚いた。

7月29日 湯俣－三俣レンゲ
7月30日 三俣－雲ヶ平－立石
7月31日 立石－源流－雲ヶ平
8月1日 雲ヶ平周遊
8月2日 雲ヶ平－東沢乗越－東沢
8月3日 東沢－黒部出合
8月4日 出合－平－南沢出合
8月5日 南沢出合－針の木峠－大町

雲の平行

期間 8月22日～8月28日

メンバー 大工原、広瀬

8月22日（曇後雨） 13.20 大町発、14.20 葛温泉着、大工原と落ち合う。雨の為自炊小屋泊。

8月23日（晴後曇） 8.50 葛温泉発、11.00 濁小屋着。東沢往復、濁小屋泊。

8月24日（晴時々曇） 6.30 濁小屋発、9.30 湯股発、13.30 赤沢、16.50 三俣蓮華着。伊藤新道は以外に長かった。三俣には上廊下組の食糧があり、とても助かった。小屋泊。

8月25日（曇後晴、夜雨） 雲の平を散歩、岩魚釣りの人を見かけた。一週間位、岩魚釣りでもし乍らここで過ごしたいものです。

8月26日（風雨後曇） 停滞

8月27日（曇） 6.45 三俣小屋発、9.00 双六発、10.30 大野間乗越発、15.10 蒲田川の左右俣出合最終バスを逃して、今田館泊。

8月28日（快晴） 富山を経て帰阪

今度の山行程、ゲルピニストのつらさを味わったことはない。しかし神様はよくしたもので、困った者には必ず救いの手をさしのべてくれる。 (広瀬記)

九重連峰

メンバー 黒木

期間 八月二十七日～三十日

時間記録紛失のため出発と到着の時間はおよそしかわからない。

8月27日(晴) 10.30 大分県営種畜場発。帰省先の八幡より夜行で熊本經由竹田に朝つくまで一睡もしていない為、途中木陰で昼寝して15.30 法華院温泉着。まわりを草山にとりかこまれた美しい坊ガツルの小高原のはずれにある硫黄泉。万葉の木、馬酔木が多くその名をとったアセビ小屋も近くにある。

二十九日(晴後曇) 大船山を往復、ガスのため早目に降りて午後坊ガツルを散歩。放牧の黒牛とテントと小川の落ち着いた景色。

三十日(快晴) 前二日の厚さにこりて6時頃出発、九重山頂に着くと丁度阿蘇山が爆発したばかりで煙の塊はまだ小さかった。後は牧戸峠より硫黄冷泉寒地獄に12.30着。あまりの冷さに手、足、顔を洗ったのみですぐバスで久大線の豊後中村まで出た。

穂 高 (屏風北壁・北尾根)

8月30日~9月2日

メンバー 大島 浩、玉井康雄

8月30日(晴) 16.09 大阪発

前穂北尾根の屏風岩からの完登とジャン飛驒尾根が目的であった。

8月31日(快晴) 03.40 藪原、07.10 上高地、11.00~12.30 横尾にて昼食、13.00 屏風正面ルンゼ押出し、15.00 八高テラス、16.00 引返す、18.00 正面ルンゼ押出し、18.40 横尾山荘

藪原から入ると時間と金の節約になる。おかげで午後から屏風岩へ出掛けることになった。ルートは容易といわれる北壁ルート。横尾林道から3のガリーを下り本谷に出る。下流に向ってケルンに導かれて細い押出しに着く。僅かな踏跡をたどり取付きの見はらしのよいテラスに出る。慶応稜の巨大なオーバーハングがすばらしい。これより頭の上へ上へとブッシュの中を木登り、うんざりした頃、草付の外傾した広いテラスについた。頭上に中央カンテ、八高テラスらしい。東にトラバースして正面横断ルートが続いているのを確かめて慶応稜の方へトラバース。下がすっぱり切れている、傾斜が垂直なのでブッシュにつかまっても安心感がない。アブがものすごい途中玉井が不調になり大島は一人慶応稜に向ったが時間切れで引返す。下りは念の為ザイルを取り出しブッシュの中をコンティニアス。今日はずい分疲れたしアブとブッシュで面白くなかったので明日は涸沢より前穂に出ることにした。小屋泊まりの快適さ、時計をはめて湯に入る。

9月1日(晴) 07.00 横尾、09.15 涸沢ヒュッテ、10.40^{昼食}~11.30 5,6 のコル、14.00~14.30 前穂頂上、16.00 奥穂、16.30 穂高小屋。涸沢は雪多くスキーヤーも多かった。5,6 のコル迄もピッケルがあっても邪魔ではなかろう。北尾根は四峯と三峯が面白い。前穂頂上では測量班がテントを張っていた。釣尾根よりガスが出はじめ夜になるとますます濃くなった。

9月2日(雨) 07.15 穂高山荘、09.00 横尾、12.00 上高地。ジャンへ行く予定であったが濃いガスの為あきらめる。小屋泊りでは停滞が出来ないのでやむなくザイテンを下ると雨が強く吹きあげはじめ横尾についた頃は完全に濡れた。松本の風呂屋に期待したが着いてみると残念にも公休日でがっかりした。とにかく明るい自由な山行であった。(玉井)

滝谷・ドーム中央稜

メンバー 金子、五百歳

期間 10月10日~12日

記録

10月10日(晴)

上高地バス終点発-涸沢小屋着

北穂小屋まで行くはずだったが

10月11日(快晴)

涸沢小屋発 8.10- (南稜) - 北穂頂上 11.40

のんびりと北穂へ。頂上で昼食の後、金子はキレット底まで、五百歳は偵察をかねてドーム附近を、それぞれ散歩。

10月12日(ガス-一時晴-濃いガス)

小屋発 7.45-ドーム基部 8.30-第3尾根 T₂10.00-中央稜取つき 10.20-昼食 12.20~13.15-ドーム頂上-小屋着 16.40

朝起きてみると一面のガス。その切れ目からのぞく滝谷の岩々は湿気を含んだ西風をまともにうけて、数センチの厚さの霜で真白におおはれている。ぶきみなうなり声をあげ、うずまくガスと共に吹き上げて来る風は耳の感覚がなくなるほどに冷たい。少々Fightをなくしたが、とにかく出発することにした。ドーム附近まで来ると少し晴れ間が出たので、30分ばかり陽なたぼっこをしてFightをとりもどし、第3尾根を下る。T₂附近でブロッケンを見たが、その珍らしさよりも、我々などよせつけそうにも

ない中央稜の威容やガスをぬって聞えて来る落石の音から受ける不安の方が頭を離れぬままに中央稜に取りついた。最初のピッチのいやな所は体の厚さほどしか幅のないチムニー。背中とお腹とお尻を使って、いも虫の如く登る。第3のピッチではスリッパして思わず大声を上げる。第4ピッチでルートを失う。いやな気持。取付での不安が再び頭をもたげる。ガスで行き先の見えぬ不安。打ち残されたハーケンを見つけた時の安心感。最後のピッチのハングで、絶えずはがれ落ちて来る霜をかぶりながら、つかれた腕でカラビナにぶらさがっているとつくづく登るのがいやになる。だが、今来た所を下る事を考えるとぞつとして、やむなくハングを乗越す。登はん終了。濃いガス。太陽は何処かへ行ってしまっている。セカンドの確保。じっとしていると恐しく寒い。だが、自力で登ったのだと思うと、そんな事は気にならない。夕食はガスソバ。でも、楽しかった。

10月13日（曇—晴）

岳川谷を下るはずだったが、前穂までの凸凹がめんどろになって南稜を下る。

（五百蔵）

燕 岳—常念岳

期 間 10月15日～10月17日

メンバー 梶本他一名

10月15日（快晴） 松本着 4.42—有明発 6.30—^{自動車}宮城 6.46—中房温泉着 11.35 発
12.40—合戦小屋 16.35（泊）

伊勢湾台風の影響により有明—中房間のバスは不通で、途中数ヶ所壊れた橋を渡る。

10月16日（曇のち小雪） 合戦小屋発 8.45—燕山荘 10.00—大天荘 14.15（泊）

稜線近くからかなりの新雪があり、吹き溜りではひざを没するラッセルを強いられ大いに時間を喰う。午後になり雪が激しくなり、視界全くきかず大天荘に泊る。

10月17日（晴のち曇）

大天荘 6.00—常念小屋 7.55—鳥川橋 13.35—^{バス}柏矢町 14.10

台風接近のため穂高まで行く予定を急変し、常念小屋を通り下山する。

一の沢を通る道はかなり荒れており、時々道を見失う。今度の山行は終始台風に痛められ散々であった。しかし晩秋の山々は峰々の新雪に紅葉が照り映え美しいプリント模様をなし、それはやがて来る冬山の前奏曲であるかのように感じられた。

黒部より赤沢岳西尾根

“一九五八年の記録”

——猫の耳に魅せられたのは昭和三十年の黒部横断計画において鳴沢西尾根から眺めた時からである。その後一部の部員の念願から猫の耳は離れ得ないものとなってしまった。しかし部の積雪期横断という大計画の前に、私たちの猫の耳行はのびのびとなってしまった。その間、文明の進歩は黒部をも見のがさなかった。黒部の千古の静寂さは失われダム工事の発破の音が谷から谷へ響きわたっていた。今度はダム工事の完成とともに黒部も第二の上高地とならんとしている。私たちの記録が将来の黒部の発展の捨石となれば幸いである。——

期日 一九五八年4月26日→5月4日

メンバー 宍戸OB、広橋OB、笠松、田井、玉井、田村

4月26日(晴) 大阪発(富山へ)

4月27日(雨) 弥陀ヶ原ホテルまでウィーゼルで。天狗平でキャンプ。風雨強くナイロンテントの支柱折れ全員ビニロンにつまる。

4月28日(曇) 天狗平発12.30、一の越15.10、御山谷を下りタンボ沢出合で19.30キャンプする。干物のため出発がおくれ赤沢まで行けなかった。

4月29日(曇) タンボ沢出合10.00、黒部出合10.15、赤沢出合つり橋12.10、赤沢をつめトンネル横穴14.45、すこし上ってキャンプ16.15.

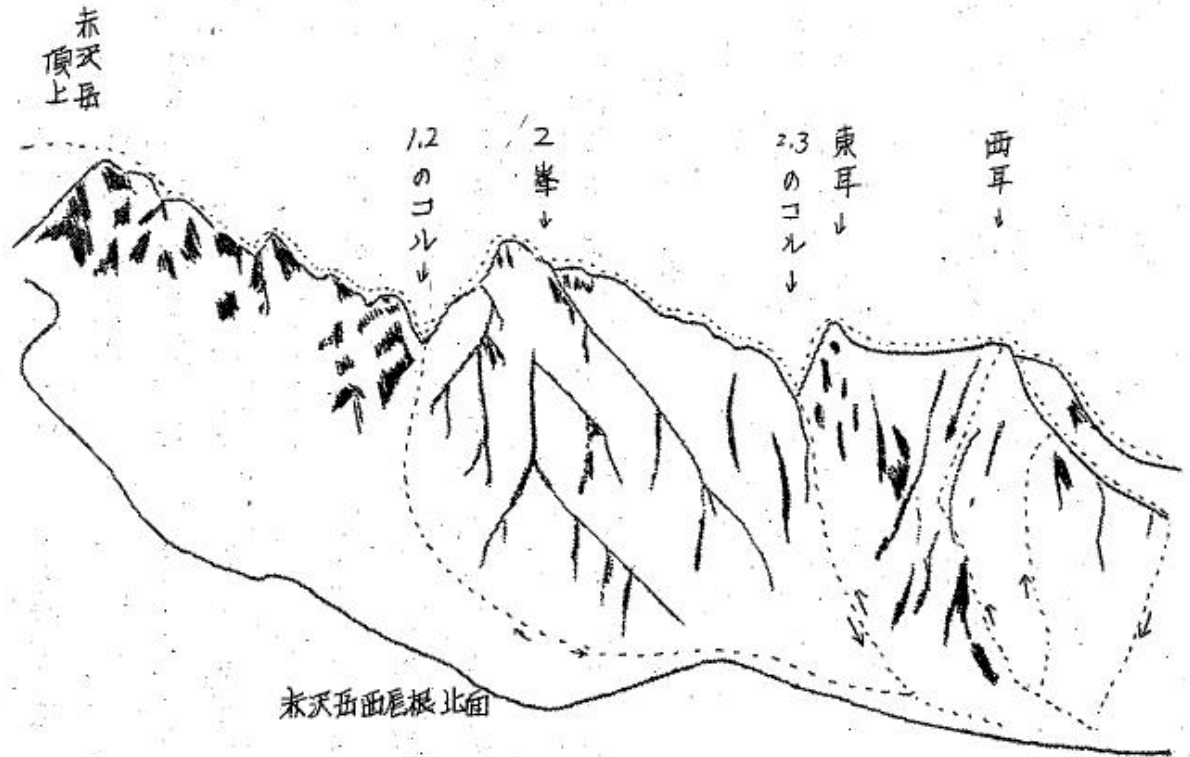
工事のため楽に赤沢出合に着く。赤沢は出合迄雪があり容易に登れた。適当な場所がなく雪溪の横の小さな窪地にBCを作ったが、余り快適な場所でなく、積雪の多い年ならば当然雪崩の危険があると思われる。

4月30日(晴) 赤沢を二股の上までつめ偵察を行った。一パーティはテントより三時間半で左俣を1,2の科尔へ登った。科尔附近は狭いルンゼで急傾斜である。他のパーティは右俣を猫の耳(赤沢岳第三峯)の下へつめ取付きルート調べた。

5月1日(雨) 停滞、午後には止んだが落石多し。

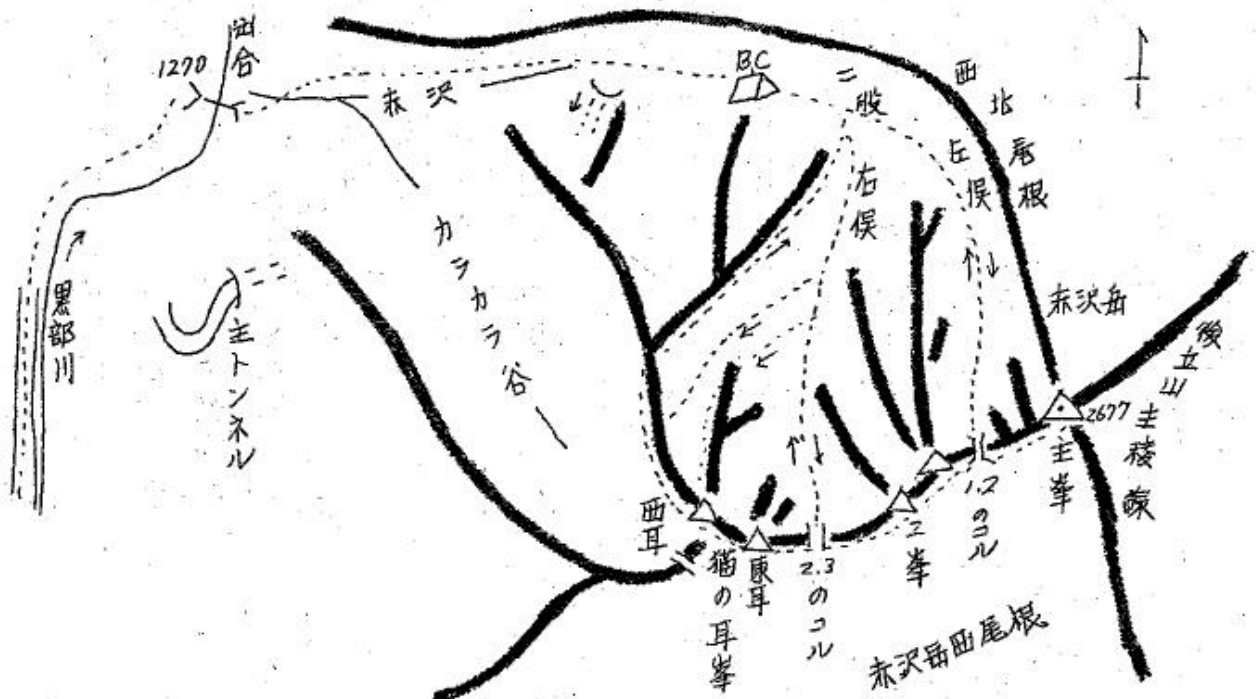
5月2日 二人づつ三パーティに分れてアタックする。

〔宍戸、広橋 OB〕 05.30BC 発、右俣から猫の耳の西耳直下まで雪溪をつめ、岩場にとりついた。浮石の多い、逆層の壁を2ピッチで西耳からダイレクトに出ている尾根とりつき、西耳頂上にたつした。西耳ピーク 12.00。右俣パーティと13.10合流し東耳ピークよりコンティニアスでスバリ側をからみ2,3のコルへ下る14.40。ここは両側を



赤沢岳尾根よりスケッチ

.....トレス (穴元)



ハンダした壁にかこまれたすごいキレットである。コルから右俣を5ピッチスタカットで下り、あとをグリセードで飛ばす。BC着 18.00。

〔田井、田村〕 05.55BC 発左俣をつめ 1,2 のコル 08.15 着コルより岩峯づたいに主峯へ出る (09.30) 下りはスバリ側のブッシュぞいに 1,2 のコルへ戻り、稜線ぞいに 12.20 第2峯に立つ 2 峯の 3 峯の壁はものすごく赤茶けた逆層の岩で構成されている。猫の耳パーティとコールをかわして 1,2 コル経由 14.30 BC へ戻る。

〔笠松、玉井〕 07.00 発右俣をつめ猫の耳直下で右に上っている急なルンゼを登る。稜線の手前でクレバスを右にさけ、うすい雪ののったスラブを登り西尾根稜線の小さいコルに出る (11.00) ブッシュを漕いで西耳ピークに 13.10 着き OB パーティに合流。

5月3日(晴) この日も同じパーティで動く

〔広橋、宍戸 OB〕 06.00 BC 発右俣を 2,3 のコルへつめ、コルより 2 峯へのリッジを登る。11.15 2 峯着。左俣パーティと合流して 1,2 コルを経由 14.30 主峯着。左俣を通過して 17.45 BC へ帰る。

〔玉井、笠松〕 06.00 発左俣で 2 峯からの激しい落石に悩まされつゝ 1,2 コルより 2 峯へ行き OB と合流

〔田村、田井〕 09.00 発右俣より 2,3 のコル経由猫の耳を大きくスバリ側をからんで 11.45 東耳に出る。ブッシュの中を西尾根を下り、2100m 位より二股めがけて支稜を下るも末端附近で滝上部に出これを巻いて二股に出る 17.30 BC 着。

5月4日(雨) 夜半テント近くの沢が雪崩れ不気味である。11.50 BC を撤収、工事場の好意で工事中の大町トンネルを通過信州側にぬけた。(黒部側 12.05、大町側出口 13.00)

このトンネル通過に関しては JAC 関西支部報にすでに記載した通りである。

(田井、田村)

最後に赤沢岳西尾根について総括的に見てみよう。登攀時期としては無雪期は沢歩き、沢から尾根に取付く場所及び、ブッシュが問題になると思われ、積雪期も大きな雪崩が出つくした五月ごろが最適だろう。キャンプサイトは私達が BC を設営した場所よりも、もう少し上の二股附近がよいと思うが、いずれにしても注意しないと雪崩れに見舞われそうな危惧がぬぐい難い。雪が多い年ならばアプローチが長くなる欠点はあるが、赤沢出合に置く方が無難だろう。西尾根から赤沢側に派生している尾根は、いずれも黒部側が赤茶けた逆層の岩壁からなっていて、ここは到底登られそうにない。

私たちがトレースした以外では二峯直接尾根がヴァリエーション・ルートとなりえよう。

雑 纂

一九五九年度役員

チーフリーダー 田村俊秀

監督 (OB) 尾藤昭二、西川元夫

大島浩 (装備)、玉井康雄 (OB 連絡)、笠松卓爾 (岳連)、佐藤茂 (サブリーダー)、村井康雄 (新人係)、大工原恭 (会計)、広瀬貞雄 (サブリーダー)、酒井次郎 (マネージャー)、田井英男 (図書)

一九五九年度一般会計報告

収入	前期繰入	四、八四七 円
	部費・入会金	二二、一〇〇
	体育会援助金	九、〇〇〇
	諸会費残金	一、三五五
	昨年度会計残金	二、八三五
	時報会計残金	七〇〇
	雑収入	一、八〇〇
	計	四二、六三七
支出	装備	二二、七五三
	テント購入及び修理	一〇、八〇〇
	通信費	一、八四〇
	岳連及び日本山岳会々費	三、八〇〇
	雑費	二、三二七
	支出計	四一、五二〇
	残金 (次期繰入)	一、一一七
	計	四二、六三七

一九五九年冬 テント寄附

会 計 報 告

今年も多勢の方々から御寄附いただき誠にありがとうございました。おかげ様で冬用テント（テトロン5～6人用）を新調する事が出来ました。厚くお礼申し上げます。尚テトロン生地については水野健次郎氏及び新保正樹氏から多大のご配慮をいただきました事を感謝いたします。尚残金は10年誌発行の準備金として銀行預金にしております。

収入	寄附 (42 氏)	四二、〇〇〇円
支出	テント布地	二、四〇〇円
	〃 加工	一五、〇〇〇円
	通信費	三、三五六円
	雑 費	三九〇円
支出計		二一、一四六円
残金		二〇、八五六円

寄付者氏名

医学部	国里勇吉、新谷五郎、恩地 裕、大久保克己、伊藤俊夫、徳永篤司、松久 博、住吉仙也、尾藤昭二、岩永 剛、宍戸 元、片山徹
理学部	水野健次郎、新保正樹、大島輝夫、加藤幹太、細見一仁、大村一生、関本靖裕、高木俊夫
工学部	川戸俊治、池田 滋、梶原信男、遠藤常忠、久保三郎、川島 勇、宮本貞雄、二木節夫、杵中 勝、鷺沢 忍、椎木二郎、立花直治、西川元夫、村瀬泰弘
薬学部	三枝礼子
歯学部	石沢命久
法学部	山本光二、広橋 茂、岡田 博、四方大中
文学部	由比浜哲也
経済学部	木村裕一

(以上四二氏)
(兼清、大工原)

ピーク 29 峰遠征

ピーク 29 峰登山計画をめぐって

徳 永 篤 司

P29 篠田隊長の現地通信によれば本年度プレモンスーン期にネパール・ヒマラヤを目指す登山隊は次の 10 隊であるとのことである。

1. ピーク 29 峰 (7,835m) 日本 (篠田軍治)
2. ランタン・リルン (7,245m) 日本
3. ジュガールヒマール (7,073m) 日本
4. カンチロバ () 英国 (J. B. Tyson)
5. ヌプツエ (7,833m) 英国 (J. Walmsley)
6. 植物調査隊 (アンナプルナ山) 英国 (B. James)
小型飛行機、グライダー使用
7. マカルー (8,470m) 英国 (E. Hillary)
無酸素登頂を目標
8. アンナプルナ三峰 (7,516m) 印度 (M. S. Kohli)
9. プモリ (7,135m) 印度 (N. Kunman)
10. エヴェレスト (8,840m) 米国 (W. P. Hackett)

この内アメリカのエヴェレスト遠征は例の国境問題で不許可になり、ヒラリーの率いるマカルー隊も、アマダブラム峰を無許可で登った為に現実が危ぶまれていたが、その後どうやら登れることになったと伝えられている。

こうした政治的配慮による計画実現の有無はさておき、これら諸国がネパール・ヒマラヤの持ち込んだ 10 指に及ぶ種々の登山計画は、世界の登山界が何を考えどの様に進んで行こうとしているかを知る上に重要な資料を提供している。

1950 年のアンナプルナより 1960 年のドーラギリ登頂に至る 10 年間に、地球上の 8,000m 峰はことごとく登り盡され、これに続く 7,000m 峰も、めぼしいものは次々と登られて行った。云わば 1961 年は登山界における一つの大きな転換期であり、この転換期を各国の登山界がどの様に考えているかといったことが本年度或は昨年度辺りの

登山計画に現われていると云えるのである。こうした意味合いより前掲の各登山計画及び別表の昨年度の計画を分析すると、少く共次の様な傾向のあることが指摘され得る。その第一は、8,000m 峰がなくなった以上 7,000m 峰の残された峰々に順次登り初登頂をねらってゆくというオーソドックスなやり方である。英国のヌプツエ(偵察隊?)と阪大の P-29 は夫々エベレスト、マナスルといった伝統といきさつをもつとは云えこの代表的な隊であり、これにカンバチェン、ジャヌーといったものを加えた準 8,000m 峰は既に登られた 8,000m 峰に優るとも劣らぬ登山的興味と意義をもつもので、何れも簡単に登り盡くされるとは考えられないがしかしこうしたオーソドックスな方法が将来 7,000m 台を割って 6,000m 台の山々に迄何処までも第一線の登山界に於て推進され支持されるとは考えられない。こうした意味で、P-29 やヌプツエ、ジャヌー等の計画は極端に云えばメイジャーエクスペディションを以て行われる最後の華々しい初登頂争いであり、この傾向は以後はマチャプチャリやプモリ、アマダブラム等によって代表される純アルプスの登山への方向に引きつがれるものと考えられるのである。

第二の傾向は、エヴェレストの北面ルートやアメリカの K2 計画、JAC のカンチ計画によって代表されるバリエーション・ルートよりの 8,000m 峰登頂であり、過去において登山が歩んだ来た道より考えて容易に良そうし得る方向である。第三はヒラリーの唱える酸素を使用しない 8,000m 峰の登頂である。酸素を使わずに登頂された 8,000m 峰は可なり多いけれどもそれらが何れも 8,200m 以下であるという事実は生理的な背景をも加えて、マカルー以上の高峰に対する無酸素登頂をバリエーション・ルートによる登頂と同価値のものに評価することを許すであろう。以上とは別に、種々の興味ある傾向も見のがす訳にゆかない。例えば雪男を先頭とする所謂学術調査が少くなり遠征が次第に純粹のスポーツ登山になりつゝあることや、小型飛行機を持ち込む隊が現れたり、ヒラリー隊の如く入れ替り立ち替り誰かがヒマラヤに常駐しているといった状態など、ことこまかに見れば更に注目すべき点が多い。日本の山々を舞台としてヒマラヤ登山のトレーニングをして来た状態から、現在は小規模なヒマラヤ登山を足場にして前記の様な登山目標を達成せんとする状態に移行しなければならない時期に来ているのかも知れない。

この様な背景の下に計画され、行われている以上、P-29 登山隊の持つ使命は、P-29 の偵察並びに登頂という第一目的を除いても実に多種多様である。先ず登山隊は出発出来たけれども母体である山岳部がばらばらになったというのでは何にもならない。遠征準備を通じて堅まって来た組織が更に固定化され、強化されていなければならない

い。又ヒマラヤへ行った隊員達は一人でも多くのヒマラヤ経験者を増すという原則に基いて、ヒマラヤへ行くべくして行ったという人々ばかりである。

私達の山岳会の今後の方針や、今後の遠征計画が、これらの人々の手によって推進されない様であったならば、P-29 計画は失敗に帰するといっても過言ではなくなるのである。

〔1960 年度〕

1. ヒマルチュリー（七八六四 m）日本（山田二郎）登頂
2. アピ（七一三二 m）日本（津田康祐）登頂
3. ジュガールヒマール（七〇八三 m）日本（伊藤久行）
4. ドーラギリ（八一七二 m）スイス（M. アイゼリン）小型飛行機使用、無酸素登頂
5. アンナプルナ二峰（七九三七 m）英印（J.O.M.ロバーツ）英 6 印 3 ネ 2 混成部隊
6. ガネッシュヒマール（七四〇六 m）英（D.J.ワレース）第二登
7. エベレスト（八八四〇m）中国（史占春）北面ルートより登頂
8. エベレスト（　　〃　　）印度（G.シン）南峯以上に到達
9. アムネマチン（七一〇〇m）中国（日進孝）登頂
10. トリズル二峰（六六七八 m）三峰（六一八〇m）ユーゴ 登頂
11. ディスティギルサール（七八八五 m）オーストリア（W.ステファン）無酸素登頂
12. マッシュブルム東峰（七八二一 m）米、パ（G.I.ベル）登頂
13. K2 米、独、パ（W.D.ハケット）？
14. イエティ調査隊 英、米、ニュージーランド（E.ヒラリー）
15. ディオ・ティバ（六〇〇一 m）日本（細川沙汰子）婦人登山隊
16. ノシアック（七四九〇m）日本（酒戸弥二郎）登頂

P-29 峰登山準備過程日誌

昭和三五年

9 月 16 日 OUMC 理事会に於て徳永提案の P-29 計画原案採択。1961 年春季を期し、篠田会長を隊長とする登山隊を送ることを決定。

出席者 徳永、大島、家田、住吉、尾藤、坪井、西川、木村、
広橋、宮本、宍戸、平田

18 日 計画概要書及び登山隊参加希望アンケートを全会員に送付。

19～20日 篠田会長、徳永理事計画案をもって状況、日高、榎、成瀬、村木、古市氏等 JAC 及び毎日新聞社等関係方面の了解を受く。又、OUMC 東京支部に理事会の決定を伝達。

26日 準備委員会委属状発送。

29日 P-29 登山計画書印刷出来上がり（400部、後に300部追加）。

10月5日 P-29 計画を津田 JAC 関西支部長に説明、了解を得る。

6日 第一回ヒマラヤ登山準備委員会（以後11月末迄毎週一回開催）

準備委員会構成

委員長 篠田

事務橋長 徳永

総務 徳永[○]、大島、住吉、田島

装備 住吉[○]、木村（祐）、空中、広瀬、大島（浩）、酒井、前沢、新保（以上大阪）

田島、三枝、山本（信）、兼清（以上東京）

食糧 尾藤[○]、西川、玉井、保母、大工原

医療 松久[○]、尾藤、田村

酸素 住吉[○]

通信機 宮本[○]、田井

輸送梱包 坪井[○]、田村、高橋、四宮、吉見

写真 山本（信）[○]、宍戸、兼清、松久

土産物 平田[○]

渉外 徳永[○]、住吉、田島、岡田

現物寄附 住吉[○]、尾藤、田島、三枝、坪井、玉井、佐藤、広瀬、大島（浩）、大工原、錦田、田村、高橋、松久、新保、梶原

部内募金 広橋[○]、西川、新谷、河原（暲）

資料 大島[○]

庶務 広橋[○]、大工原

会計 岡田[○]、西川

梱包作業 住吉、尾藤、西川、山本（信）、兼清、田村、大工原、玉井、佐藤、酒井、前沢、黒木、金子、西垣、打出、高橋、白井、三沢、梶本、高田

JAC 理事会に P-29 計画案提出 (田島)

部内募金 (一口五千円、2 口以上) 予約依頼状発送

10 月 19 日 毎日新聞社大阪支社 (神前事業部長)、大学当局 (正田総長、中村事務局
長、森河学生部長) に后援の件依頼、了承を得る。

外務省経由、P-29 登山許可申請をネパール政府に提出。

22 日 日高 JAC 会長訪ネに際し P-29 登山許可運動方依頼。

住吉、尾藤両隊員決定。

26 日 ギャルツェン (シェルパ)、バルワラ (荷物輸送)、神原 (ネパール政府、
ヒマラヤンソサエティ交渉) 各氏へ依頼状発送。

11 月 6 日 松田雄一氏の来阪を得て種々教示を受く。

10 日 準備委員会ルームを大学構内記念館二階に設置。

14 日 村木潤次郎氏の来阪を得て種々教示を受く。

19 日 ヒマラヤ登山実行委員会開く (於好文クラブ)。

出席者 篠田、水野健、新谷、梶原、徳永、大島、住吉

実行委員会構成

委員長 篠田

水野健次郎、関集三 (以上理)、山口次郎、梶原信男 (以上工)、新谷五
郎、恩地裕 (以上医)、徳永篤司、大島輝夫、住吉仙也 (以上準備委)

11 月 28 日 隊員輸送に日通航空、A.I.I 及び B.I.line 使用、装備輸送に NYK 及び
B.I.Line 使用を決定、交渉開始。

西川、山本 (信) 両隊員決定。

装備、食料の最終リスト決定。

寄附依頼品目リスト完成。

食糧寄附依頼交渉開始。

12 月 3 日 ギャルツェン・ノルブよりパサン・プター三号をサードーとして紹介し
来る。

~7 日 一般募金準備活動開始 (篠田、水野、関、新保、大島)

6~8 日 皇太子御夫婦、カトマンズ御旅行。

9 日 大阪医薬品協会より医薬品寄附受領。

10 日 現物寄附依頼開始。

17 日 山本 (光)、兼清隊員決定。

- 19日 装備類の内日数のかかる羽毛製品等の発注開始。
ネパール政変により、コイラク首相等投獄さる。
- 23日 那須インド大使より外務省に入電（ヒマラヤンソサエティの申請を行うと同時に入山許可がおりる予定につき、早急にシェルパ申請を行われ度し）。

昭和 36 年

- 1月2日 準備委新年集会
- 4日 ヒマラヤン・ソサエティ宛シェルパ契約依頼申請書発送（直送）、同時に500 インド・ルピーの前渡金を送金す。
シェルパ依頼順位
- 5日 ルームに事務員（島咲子）を置く。
- 6日 P-29 入山許可下付（外電）。
- 7日 記者発表（午後3時半、於阪大松下会館）。
- 8日 毎日新聞社告発表。
- 10日 東京放送後援、カメラマン参加の件決定。
旅行計画日通へ呈出。
募金用印刷物作成（講演会趣意書、P-29 計画書、隊員名簿、寄附申込書）

登山後援会メンバー

会長 赤堀総長

青木 大、今村荒男、大島堅造、岡田 実、小田原大造、佐藤義詮
正田健次郎、杉 道助、関 桂三、中井元次、日高信六郎、堀田庄三、
本田親男、榎 有恒、水野祥太郎

- 1月13日 本日よりルーム当直（現役担当）開始。
- 16日 本日より寄附金集荷に現役全員動員。
- 19日 医薬品梱包開始。
- 20日 本日より東京（田島、兼清等）との定時通話開始。
- 23日 梱包作業開始、26日迄。平行してパッキング・リスト作成開始。
- 27日 正午、梱包、リスト完成
一四〇〇辰巳商会築港倉庫へ集荷し、税関検査通過。船積用梱包終了。
ベンガル湾運賃同盟の了承をうく。

28日 第一便、NYK 健竜丸へ船積開始。

722 Cubic feet

4,732.6kg

(内訳)

装備 一、六二六．四 kg

医薬 四五．八〃

食糧 一、九三四．〇〃

先発乗船隊員決定 (尾藤、山本 (光)、西川、兼清)。

渡航手続開始。

渡航申請会前交渉 (篠田、古市、田島)。

30日 パッキングリスト (第一便) 完成。

31日 正午、健竜丸大阪出発。

(カルカッタ入港予定、3月19日)

2月2日 B.I積荷 (第二便) 集荷開始。

一般募金入金開始。

3日 先発隊員予防接種開始。

7日 海外渡航申請会にて外貨申請通過。

外貨総額 計一二、三八二．六〇USドル

篠田隊長以下6名分

円払旅費 \$三、四四五．八〇

純外貨 \$七、一二九．〇〇

小秋元氏分

円払旅費 \$ 六六八．一〇

純外貨 \$一、一三九．五〇

ヒマラヤン・ソサイティより次のシェルパ決定の通知あり。

(サーダー) パサン・プター三号 (ダーチリン)

(コック) ペンバ・ノルブ (ダーチリン)

(シェルパ) アン・ダワ、アン・ノルブ、ダ・ノルブ、アン・ナンギャ

ル

2月8日 東京放送派遣のカメラマン、小秋元隆邦氏 (運動部副部長) 決定。

隊員身体検査 (阪大病院、松久)。

- 10日 先発隊員状況、パスポート、インドビザ下付。
ネパール内通信依頼人にビナヤを指定する旨現地へ通知。
- 13日 夜半、第二便梱包完了。
- 14日 第二便、神戸港ジャパン・エクスプレス倉庫へ集荷。
税関通過、B.I Line “Sirdhana”積込み。
第二便（普通梱包のまま）
172.8 Cubic feet
1,477.2kg
（内訳）
 装備 九六七．〇kg
 医薬 一三．〇”
 食糧 四九七．〇”
- 15日 全パッキング・リスト完成。
ビルマ・ビザ下付。
- 16日 14.00 先発隊員 Sirdhana 乗船（神戸）
17.00 総長、毎日新聞共催壮行会（於大学構内松下会館）
19.00 ヒマルチュリ登頂映画試写会
19.30 準備委壮行会
全パッキング・リスト関係方面送付（外務省経由分 7 部。英文計画書 7 部及び公文書添附。ニューデリー及びカルカッタ日本公館、ネパール政府、バルワラ、カルカッタ税関、ノータンワ税関等へ直送）
- 2月17日 17.00 先発隊員乗船。
23.40 Sirdhana 出港（カルカッタ着予定 3 月 12 日）。
- 18日 ネパール政府より P-29 入山許可下附の旨外務省に入電。
- 20日 インド気象庁、オールインド放送へ気象通報依頼状発送。
ネパール政府へ隊員増加並に無線機持込みに関する追加申請送付（直接及び外務省経由）。
- 24日 帰途 B.I Line（カルカッタ発 7 月 3 日）予約。
H.S よりシェルパ変更通知あり。アチバ（サーダー）、ペンパ・ノルブ（コック）、アンダワ、ミンマ・ツェリン、カルマ・オンゾ、アンナンギャルとなる。

- 3月4日 本隊上京、パスポート、インドビザ下附。
- 6日 東銀カルカッタ支店宛、外貨送付（東銀トーア・ロード支点）。
- 8日 山本（光）、西川両隊員、午後ラングーンよりカルカッタ到着（リトン・ホテル）。
- 9日 本隊、伊丹空港発上京、第三便として無線機。
- 3月10日 本隊（篠田隊長、住吉副隊長、山本（信）、小秋元）A.I.Iにて羽田発、カルカッタ到着。
- ルーム閉鎖。
- 11日 第一回残務整理委員会
メンバー 徳永、大島（輝）、広橋、岡田、木村、大工原、大島（浩）、
広瀬、（田島）
以后毎週土曜日開催。
- 15日 隊員増加並びに無線機持込許可書到着。
- 31日 募金目標額に達す。

以上（徳永、大工原）

（注）上記の日誌は篠田隊長遠征中の為募金関係の活動状況は記入されていない。

エヴェレスト遠征（一九五三年）に於ける食料計画

L.G.C ピュウ 著

（徳永 訳）

ヒマラヤ登山隊の食糧は一般に英国本土やインドから運んだ貯蔵食糧と現地調達
の食糧より成り立っている。現地では米、じゃがいも、ツアンパ、レンズ豆、卵、鶏、
肉類等が調達されるが新鮮な野菜や果物は大きくて手に入らない。初期のエヴェレスト
登山隊は色々な貯蔵食糧を携行したが、今日では、紅茶、粉乳、砂糖、ジャム、ビス
ケット、バター等、現地調達の出来ないもの以外は現地に依存する傾向が強くなって
来ている。

（一）チョー・オユー遠征（一九五二年）の経験

一九五二年に行われたチョー・オユー遠征で栄養や食糧の問題が調査された。種々
の高度で各自のペースをもって登っている状態における隊員の酸素消費量を測定する
と、アプローチの時期や高所滞在期間における大雑把なエネルギーのバランスシート
を作ることが可能である（第一表）。この表によるとアプローチ期におけるカロリー消

第一表 1952年のチョー・オユー遠征に於ける
食餌の分析及び熱量のバランスシート

期間	高度	摂取した				熱量消費量 (Cal)
		蛋白質(g)	脂肪(g)	含水炭素(g)	カロリー(Cal)	
30/III~17/IV	アプローチ 300~350	108	110	713	4,267	4,370
1/V~10/V	クライミング 5800~6850	42	71	596	3,187	3,960
15/V~19/V	レスト 4650	64	90	640	3,626	3,220

費量は殆んど実際に与へられた量と等しくなっているが、ただ嵩張ったり、平素食べ
つけないものは却って一部の人々に消化器障害をもたらしている。食事のメニューは
第二表に示す如くで、高所滞在中では食慾不振の為、毎日摂取する食餌の相当な部分
が飲料水中の砂糖の形で取られていた。又一部の隊員はパイナップルや鮭といった特

殊なものをほしがった。

第二表 チョー・オユー遠征（1952年）のメニュー

高度(m)	朝食	朝食	行動中	昼食	おやつ	夕食
アプローチ 300~350	ツアンパ ミルク 砂糖(ミルク 及び砂糖入 り) 紅茶	グレープナッ ツ、ミルク、砂 糖、ベーコンと 卵、バター、ジ ャム、チャパテ ィ、紅茶	ビスケット チョコレート スウィート	チャパティ バター ジャム 紅茶	紅茶	スープ カレー、米 ポテト レンズ豆 コーヒ
クライミング 5800~6850	—	バター、ジャム、 ビスケット、ミ ルク、砂糖、紅 茶、グレープナ ッツ	スウィート なつめ 干ぶどう	ビスケット バター ジャム 紅茶	紅茶	ペミカン スープ ベーコン ポテト ココア
レスト 4650	—	グレープナッ ツ、ミルク、砂 糖、ベーコン、 ポテト、紅茶	ビスケット 紅茶	チャパティ ビスケット バター ジャム 紅茶	紅茶	ペミカン ポテト ココア

高所滞在中における摂取カロリーの不足はかなりの体重減少を招き、三六〇〇m以上で滞在した最初の二四日間における体重減少は平均五 kg（二、七 kg—六、四 kg）であった。

こうした現象はこれまでの登山隊でもみられた事柄であるが、チョー・オユーでの食欲の減退は過去のエヴェレスト登山隊よりは一層低い所でおこっている様に思われる。チョー・オユー隊の少ない食料摂取量は不十分な高所順化のあらわれでもある。良く順化されたこの遠征の后期になると、隊員の全身状態も食慾も回復している。チョー・オユーにおいて食事が大して取れなかった他の原因として、単調な食餌や食慾を減退させる様な食物が考えられる。こうした事柄に基いて、来たるべきエヴェレスト遠征には高所順化に更に時間をかけ、もっとうまいものを食べさせる様に大幅な改善が行われることになったのである。

(二) エヴェレスト遠征（一九五三年）

一九五三年のエヴェレスト遠征に際しては、食糧計画は従来の慣習を放棄し、新しく、軍隊の作戦中に用いられている様なコンパクトなレーション（コンポーレーション）を採用することになった。この様なコンポー・レーションの利点は次の如くである。

- (イ) ヨーロッパ風の食事を供給出来る。
- (ロ) 嗜好性とバラエティに富んだ食餌が出来る。
- (ハ) 整理と荷造りが簡単化される。
- (ニ) 食べ過ぎや浪費によって主要食料が欠乏するのを防止できる。
- (ホ) 蠅や調理（ヒマラヤでは全部シェルパが料理する）によって食物が汚染されることが少く出来る。

以上の利点の代りに、食糧の重量と費用とか増大するという欠点があり、重さが増えることはそれ程でもないが、輸送費が高くつくことは大きなマイナスであった。五四〇〇m 迄の荷上げに要するポーター賃は大したものではないが、ヒマラヤでのポーターによる輸送は、あるシーズンとか、ある高度以上では特別の装備を必要とするので問題になる。我々の場合でも延二、三〇〇人分の食糧の総購入額は無料で貰った五万乃至一〇万円見当の食糧を除き約四五万円であったが、英国本土からカトマンズまでの食糧輸送費は約一〇万円でポーターに依存したカトマンズからエヴェレスト」のベースキャンプ迄の輸送費は約五〇円であった。

コンポー・レーションの詳細はハントの公式報告、《エヴェレスト登頂》に載っているがこれは二種類に分かれ、一つは第三表 (A) に示す普通食の為のコンポー・レーションであり、他の一つは第三表 (B) に示す様な六四〇〇m 以上で使用するアタック食であった。

普通食のコンポー・レーション

普通食コンポー・レーションの梱包は次の如くである。フード・ボックスは防水・防温のファイバー・ボード・ケースに、一四人一日分の夕食、朝食及び行動時の食料を入れて約二〇kg 毎に包装され、食料は鮭を始め五種類の肉類、四種類の野菜、果物缶詰、ケーキ、オート・ミール、ビスケット、バター、ジャム、マーマレード、チョコレート等で各食品目毎に缶詰にされていた。肉類と野菜、果物、ケーキを種々に組み合わせることにより、色々と変ったメニューが一週間の間毎日変わってあらわれる様になっており、それらのボックス夫々色わけされていた。ある一日のメニューは第三表の如くであった。

ビスケットボックスは一五、二 kg の木箱で内に六つの封印した缶を入れ、その一つ一つに一五個の一七〇グラム包装のビスケットが入っていた。ビスケットは一人一日当り一七〇グラムであったが、一三〇グラム位で充分であった。食料ボックスは一五、八 kg のファイバーボード・ボード・ケースで、一四人二日分の砂糖、オートミル、紅

茶、コーヒー、コゝアが真空包装で入れられていた。又、飲料ボックスには缶詰は使われなかった（第三表）。

第三表 エベレスト登山隊食糧

(A) 普通食コンポー・レーション

① コンポー・ボックス（14人1日分、No7メニュー 日曜日）

(食)品目	缶詰数	単位重量 (オンス)
朝食		
オート・ミール、ビスケット	1	12
ベーコン	5	12
バター	2	15
ジャム	2	9
マーマレード	2	9
チーズ	2	8
チョコレート・スウィート	3	12 1/2
食糧	1	4
マッチ	1箱	
主食（上部）		
スチュウド・スティク	8	16
えんどう豆	3	10
ケーキ	4	10
スープの素	2	2 1/2
布切れ	2個	
ラトリン紙	1箱	
罐切り	1個	

② ビスケットボックス（6オンス箱×15×6、1人1日6オンス）

③ 飲料水ボックス（28人1日分）

品目	包装数	単位重量 (オンス)
砂糖	4	19 1/2
紅茶	2	10
粉乳	4	8
即席オート・ミール	1	16
たねぬきなつめ	2	8
たねぬき干ぶどう	1	16
コーヒ又はコゝア	2	13

以上の食料の補助として、現地で調達したじゃがいも、米、レンズ豆と時に新鮮肉が当てられた。コンポー・レーションは現地で入手したものを除き、一人一日約四八〇〇カロリーであった。

チョー・オユーでの研究に基くと、必要熱量は四五〇〇カロリー以下で良かった。過剰の食料は、ダーチリンから遠征に加わったシェルパ達の食料であるアタ、米、ツアンパ、じゃがいもをおぎなう為に当てられた。しかし、シェルパ達が料理しているので、食料の内のある一定量が少なくなることは予想されていた。

ア タ ッ ク 食

コンポー・レーションでは最早重量の関係で不適當であり、又糖分の要求が非常につよくなるような高所で使用する為に、二四時間攻撃用の特別レーションが用意された。これは真空包装された基礎的な食品に限られ、アタック食を補う時に隊員たちの個々の嗜好に合わせて英国から運ばれてきたぜいたく品であった。アタック食のカロリー値は必要よりも高く、そして夫々の人間が即席で加減し、とても食べられないと感ずる様なものは除かれた。実際には七〇個のアタック食が BC (五、四〇〇m) での計画に基いて組み合わせられた。加減された夫々のアタック食の単位は第三表の如く、一つの袋に包装された二人一日分よりなっていた。本来のアタック食は第三表に加え

第三表 (B) 組合せアタック食 (2人1日分、各自好みの品物を加えて使用)

品 目	包装数	単位重量 (オンス)
ロールド・オーツ	2	1
粉乳	2	3
砂糖	4	7
ジャム	1	2
スウィート・ビスケット	2	3
ミントバー又はバナナバー	2	2
チーズ	2	1
ココア	1	1
紅茶		1 1/2
スープの素		2 1/4
レモンパウダー	2	11
食塩	2	5 1/2(g)

て、七〇グラムの低脂肪のペミカンと八五グラムのグレープナッツ（これらはチョー・オユーでは良いと思われたが、エヴェレストでは除かれた）を含んでいた。

一九五三年の遠征の食料に関する隊員達の感想は、帰国後アンケートにより集められた。それによると一人の隊員を除き、他の全員は嵩ばった食料を嫌いコンポー・レーションをとることに同意しており、大部分の人々はもっと現地食を望み、特にもっと魚を増やし、缶詰の肉などを減らす事を望んでいた。しかし、ヒマラヤ遠征の帰途食料がなくなると何時も経験することであるが、魚肉は常に入手出来るとは限らないのである。

無理な注文ではあるが、攻撃用に包装された食糧は全員に対して必要な基礎的な食品のみを含むべきであり、今日の遠征隊がやっている様に、個人個人が選んだ食品で用意されるということが望ましい。コンポーレーションは予想されたよりも更に高い所でも要求され、六、四〇〇m 第四キャンプでも必要であった。これは、一つには一九五二年のときよりもよく順化されていた事と、又一つにはバラエティに富んだうまいものが多かったからであらうと思われる。又高圧のクラッカーや調子の良いプリムス・コンロが食事の準備を助け、飲物による水分の補給を完全に成し得たのである。

更に高いキャンプでは、前記の組み合わせアタック食が満足すべき結果をもたらし、これは又、昨年スイス隊がサウス・コルに残したものを含む、サーチン鮭、蜂蜜、ヴィタミート、saucisson などによっておぎなわれた。隊員たちは高所キャンプが設営されつゝあった攻撃期間中の二日乃至五日間、この組み合わせアタック食で命をつないだ。体重の変化を調べると、隊員達がこの遠征のどの期間でも、前年のチョー・オユーの時より良いコンディションを示していたことがわかる。即ちアンボチュ（四、〇〇〇m）到着後の二六日間における体重減少の平均値は僅か〇.九 kg（マイナス三.六 kg からプラス一.四 kg）で、チョー・オユーの同じ時期では平均五 kg（マイナス二.七 kg からマイナス六.三 kg）の減少であった。この時期は、隊員が四、〇〇〇m から五、四〇〇m 位の高度に滞在して、六、〇〇〇m に登っている所謂高所順化期間である。主としてウエスタン・クーム（六、二〇〇-六、四〇〇m）で過し、短期間七、三〇〇m や時には八、〇〇〇m 近く迄登った二ヶ月間における体重減少の平均値は一.八 kg（マイナス五 kg からプラス一.四 kg）であった。

遠征の種々な時期におけるカロリー値や食事の品目は第四表に示す如くで、アプローチ期間ではカロリー摂取量は一九五二年に匹敵するが、脂肪の摂取量は二倍になっており、嵩ばった食餌が少くなっている。

第四表 エヴェレスト遠征各時期に於ける食餌の分析

高度 (m)	蛋白質 (g)	脂肪 (g)	含水炭素 (g)	熱量 (カロリー)
アプローチ期	110	231	453	4,328
ベース・キャンプ 5,500	81	190	437	3,786
CIII~CV 6,250~6,450	75	184	478	3,869
アタック期	46	54	638	3,208

ベース・キャンプ及びウエスタン・クームでのカロリー摂取量はチョー・オユー遠征の高処滞在期間に摂取されたよりも多い。数字的な裏付けはないが個人差は相当に多く、同じキャンプでは同量の食物が夫々のクライマーに与えられたが、皆が全部食べたとは限らない。ローツェフェイス及びそれ以上（六、七〇〇m）での食事については量的な記録が少々残されている。第四表の値は組み合わせアタック食の各栄養素より算定されたもので、一部のクライマー達はそれを殆んど食べたと云っている。全部或いは殆んど全部に近い砂糖が消費されたことは全員の認めるところであり、それだけで一、五〇〇カロリーはある。ウォードは彼自身とノイスが第四キャンプから第七キャンプに至る間の四八時間にとった食物を記録しているが、それによると一人一日当りの熱量は二、六〇〇カロリーとなっている。ヒラリーは、彼とテンジンが八、五〇〇mのキャンプでどの様にして一夜を明かしたかを述べているが、それによると、彼らは三〜四杯のラサード・スプーンで山盛り一杯の砂糖を夫々の紅茶に入れ、ミルクを加えて飲み、サージンとビタウィート・ビスケットを食べている。登頂の翌日、帰途の第四キャンプで、ヒラリーはオムレツ二個と一七〇グラムの鮭を食べ、約一・一立のレモネードを飲んでいる。

一九五三年遠征の全期間を通じて、摂取した食物の量は一九三五年シプトンのエヴェレスト遠征を遙かに上回っている。シプトンは、五、二〇〇mと六、四〇〇mの間では食物は二、〇〇〇カロリー以下でもよく、もっと上では一、五〇〇カロリー以下でも良いと云っている。

本計画では、雪をとかして水を作る様な高所における水分摂取の問題に特に考慮が払われた。一九五二年春のエヴェレスト・スイス隊のクライマー達は極度の脱水状態に陥り、サウス・コル（七、八五〇m）で過ごした三日間に彼らは一人一日当り〇・五立以下の水分しかとらなかつた。この水分の欠乏こそが、彼らを苦しめた極度の衰退現象の原因であったと考えられた。チョー・オユーでは、一日二・九立乃至四立の水分が飲料やスープとして取られた。こうした水分補給に対する考えはエヴェレストに

においても立証され、エヴェレストでは恐らく全期間を通じて水分補給量が一日の必要量を割ったことは一度もなかったと思われる。

六、七〇〇mの高さに至る迄、隊員達は一日二~三回小便をし、検査された一人の一日の全尿量は一・二~一・五立であった。登頂期間では殆どのクライマーは一日二回小便をしたことを記憶しており、この事実は七、六五〇m以上で過した一七時間に五人のクライマー中唯一人だけ尿の出た隊員であったフィンチの意見と比較してみると興味深い。

更にとり上げる課題はビタミンの問題である。ビタミンは、三ヶ月間保存食で生活するといった状態では当然不足勝ちになる。一九五三年では、その前年のチョー・オユーと同様に、各隊員はビタミンC七五mg、ビタミンA五、〇〇〇単位、ビタミンD五〇〇単位、ビタミンB1三mg、リオフラビン二mg、ニコチン酸二〇mg、葉酸一mg、ビタミンB12一mgを含む総合ビタミン剤を携行した。しかし乍ら一九五三年の登山隊の食餌はアタック食を除きビタミンを多く含んでいるからこうした薬は必要なかった。ただビタミンCは、一日の食餌中に一四mgしか含まれていなかったから補足する必要があった。

検 討

以上述べた事柄により、ヒマラヤ登山隊の戦力というものは、従来行われて来た様な食糧計画よりも、もっと種類を多くし、口に合ったヨーロッパ風の食物を用意することによって強化することが出来るということを示している。今迄食べたことのない様な、まるで田舎料理のような嵩ばったものを食べた隊員は、沢山な荷分けと、一・二ヶ月の内におこって来る消化器障碍に苦しむであろう。経験によれば、大抵の場合に順化現象がおこり、ヒマラヤ経験者は初参加者より現地食に対する適応力が著しくすぐれている。エヴェレストの様な高度のある困難な山への遠征には、たとえ経費が少々高くついても、手のこんだおいしい食料を持って行って、隊全体の能率をあげ、病人を出さない様にすべきである。筆者の経験では、激しい疲労状態におかれた場合、人間は全然味覚を感じない食餌を嫌々食べるよりもむしろなにも食べたくないし、のどのかわきが満たされない限り食べることも出来ないものである。食物を十分に取らない事が、水分の欠乏と共に一、二日以上続くと仕事の能率が低下して来る。六、七〇〇m以上になると、酸素不足による体力の減退は避けられないから、この場合、食物と水分の欠乏により更に衰退してゆくことを防止するという事は重要な意味をもつ

ものである。事実山登りということ柄を離れても、飲食の欲求を満すべき適当な処置も行えないようでは本来の目的も既に失敗に帰しているといっても過言ではない。

クライマーが高所で糖分を非常に欲しがるという事実は既に以前より認められている事柄であるが、この欲求は彼らに十分な糖分が供給されるということが殆んどなかった程強烈である。甘いものなど好きでない人達でさえ、高く登るにつれて糖分を要求するのである。砂糖は高处では甘味が少い様に感じられ、多量の糖が飲料を甘くするために用いられる。この高所における砂糖への強い要求は、呼吸生理学的にも理由をもつものである。仕事の量に相当する酸素摂取量は、低い呼吸商のときより高い呼吸商（炭酸ガス発生量を酸素消費量で割った値）のときの方が少い。ハウストンは、六、一〇〇m で呼吸商が混合食による〇・八から純粹の含水炭素による一・〇に上昇したときの末梢酸素分圧は、六〇〇m に降ったのに匹敵するということを指摘している。

（六、一〇〇m で混合食を食べているより、純粹の含水炭素をとった方が能率が良い。筆者注）

体重の減少は、高所に滞在したときの特長であって、バークロフト、デイル、ヒングストン、ウェアレン、パウワー等の遠征隊と同様の結果が観察されている。これは低酸素症と密接な関係があり、高所衰退の最も特長的な症状の一つであるが、体重の減少があっても、健康状態や隊の仕事は案外うまく行っているものである。或程度の体重の減少があった方が、登山という激しい仕事をする上には都合が良いかも知れないのである。一九五二年のチョー・オユー遠征の結果より、我々は或程度の体重減少は順化過程の附随的現象であると解釈しようとした。これ故に、エヴェレストで高所順化と食餌を改良した事によって、体重が良く維持できたということを極めて興味深く感ずるのである。

（紙面の関係より総括の項を除いた＝訳者注）

参 考 文 献

Barcroft, J. (1925) : Cambridge, University Press

Baur, P. (1931) : Im Kamptum den Himalaya, Munich : Knorr & Hirth

Dill, J. B. (1938) : Heat Life and Altitude, Cambridge. Mass : Harvard University Press.

Hongston, R. W. G. (1925) : Geogr. J, 65, 4.

Houston, C. S. (1947) : J. Aviat, Med, 18, 237.

Hunt, J. (1953) : The Ascent of Everest

Shibton, E. (1938) : Chem. & Ind. 57, 1231.

后記＝一九五三年のエヴェレスト登山隊に、高所委員会より隊員として派遣された生理学者ピユウ博士の報告は既に十数編に上り、チョー・オユー、エヴェレストより南極横断に亘る。何れも専門分野において高く評価されるべき貴重な文献であります。昨年、当会は博士のこの方面の全論文の寄贈と翻訳出版の承諾を得たので順次時報に掲載してゆく予定です。

部内募金中間報告

(4月25日現在)

工	久保 三郎	10,000	歯薬	抱 忠男	10,000	法経文	田島 汎	20,000	
	川島 勇	10,000		三枝 礼子	20,000		土屋 直	5,000	
	宮本 貞雄	10,000		工	西堀 清美		1,000	由比浜哲也	10,000
	近 璋三	5,000		中島 康治	10,000		広橋 茂	15,000	
	二木 節夫	10,000		池田 滋	5,000		木村 裕一	10,000	
	奎中 勝	10,000		吉田 達三	10,000		岡田 博司	15,000	
	鷺沢 忍	10,000		仙波 正	5,000		野田憲一郎	5,000	
	村瀬 泰弘	10,000		岡 三太郎	10,000		平田 彰	10,000	
	田端 剛爾	10,000		野崎 善蔵	5,000		横山 保枝	5,000	
	木村 征二	3,000		河原 暲	10,000		一山 幸代	5,000	
樋下 重彦	5,000	池田 穂夫	5,000						
医	大久保勝己	10,000	医	砂越 竹夫	5,000				
	徳永 篤司	20,000		小林 義郎	5,000				
	松久 博	20,000		酒井 英之	10,000				
	家田 千尋	5,000		坂谷 信次	10,000				
	東 雍	10,000		新谷 五郎	10,000				
	小沢 逞夫	10,000		理	大島 輝夫	15,000			
	岩永 剛	10,000		加藤 幹太	5,000				
	林 伸一	2,000		大村 一生	10,000				
	坪井圭之助	10,000		山本進一郎	10,000	工	21名	159,000	
	宍戸 元	5,000		関本 靖裕	10,000	医	17名	162,000	
片山 徹	15,000			歯薬	2名	30,000			
恩地 裕	5,000			理	5名	50,000			
国里 勇吉	5,000			法経文	10名	100,000			
							合計	501,000	

遠征隊資料

装備

	第一便		第二便	
ナイロンザイル				
	3mm 200m	1本	8mm 40m	12本
	4mm 200m	1本	8mm 50m	2本
	6mm 250m	1本	9mm 40m	2本
	6mm 100m	1本	9mm 50m	2本
	11mm 40m	1本		
テント		23展		2展
アイスハンマー		1個		
ロックハンマー		2個		
カラビナ		61個		
ロックピトン		44個		160個
アイスピトン				50個
あぶみ(縄バシゴ用ステップ)		170個		
縄バシゴ		2本		
フィックスドバー		10本		
ローソク		626本		
赤旗		600枚		
電池			単1(半数耐寒用)	360個
			単2(耐寒用)	720個
			単3(耐寒用)	400個
			67.5V	20個
プロパンランプ				1個
プロパンバーナ				7台
プロパンボンベ			(10kg入)	4本
石油コンロ		5台		8台
薪ストーブ		1個		1個
けいねん		99個		34個
ケロシン		92ℓ		38ℓ
シャベル		3個		
酸素ボンベ	(170気圧)	15本		
観測器具		1式		
200mm 望遠レンズ				1台

食料

	単位重量 net/gross (g)	数	
		第一便	第二便
α米	160/165	1,470 袋	
即席ラーメン (85g2 ケ入)	425/400	408 袋	
おかき	150/150	160 袋	22 袋
ウエハー	100/100	48 袋	
クラッカー	140/150	80 箱	
乾パン	150/150	350 袋	
ビスケット	140/140	40 袋	
小麦粉	500/500	30 袋	210 袋
ホットケーキミックス	450/480	28 袋	20 袋
魚缶 (含カニ缶、コンビーフ)	220/300	264 缶	174 缶
乾燥肉 (真空冷凍乾燥)	100/110		82
コンデンスミルク (缶入)	385/450	35 缶	9 缶
乾燥果物	100/100	148 袋	19 袋
果物缶 (平均)	480/550	154 缶	
砂糖	500/510	364 袋	52 袋
固型スープ素 (平均)	8/8	1150 個	
かきめしの素 (缶入)	380/450	43 缶	
スイートコーン (〃)	190/250	32 缶	2 缶
ポタージュスープ素	60/65		80 袋
紅茶 (缶入)	110/150	138 缶	50 缶
缶入バター	225/300	70 缶	10 缶
乾燥野菜 (熱風乾燥)	200/210	177 袋	
〃 (真空冷凍乾燥)	10~15/10~15		128 袋
醤油	500/550, 1.9ℓ/2.0kg	52ℓ	9ℓ
スキムミルク	400/430	72 箱	24 箱
サラダ油 (アルミ缶入)	380cc/400	32 缶	16 缶
ベーコン (真空包装)	300/310	48 袋	
〃 (特殊包装)	3kg/3.3kg		8 個
佃煮 (真空包装)	100~200/100~200	158 袋	
はちみつ (缶入)	2.4kg/2.6kg	10 缶	
缶入ビール	350cc/430	154 缶	
ウイスキー	720cc/1400		12 本
以上の他	主食として 白玉粉、片栗粉、マカロニー	若干	
	調味料として マヨネーズ、みそ (真空包装)	相当量	あり

編集後記

遅延に遅延をかさね、まことに申し訳なく思います。

こゝにささやかながら第十一号をおくります。

巻末に目下遠征中の阪大山岳部ヒマラヤ遠征の資料を若干加えました。

これは次号にはもっと完全な型で発表されることになるでしょう。

(佐藤)

大阪大学山岳会「特報」第11号	発行
一九六一年六月	発行
発行所	大阪市北区常安町
大阪大学学生課内	
大阪大学山岳会	
編集人	佐藤 茂
印刷所	大阪市西区江戸堀北通二
電話	電停西
電話	研 五〇〇八番
社	